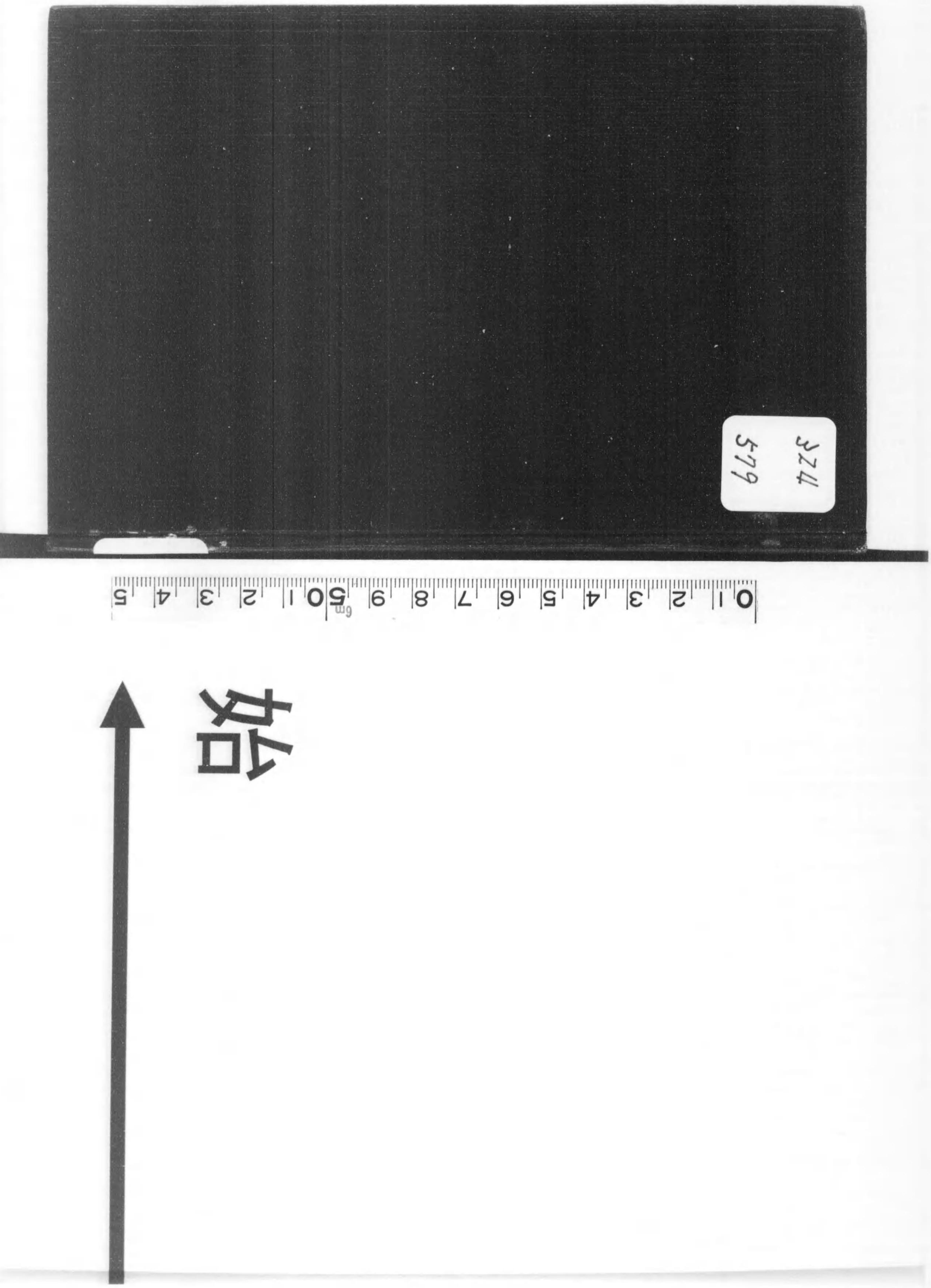
3211
579
故

324
579

敬神と實際生活

續編

大正
12. 1. 30
内交

はしがき

一、本書は書名の示すが如く、前著「敬神と實際生活」の續編でありますから、其主義精神に至つては、素より同一でありますが、只其内容たる資料及編輯の體裁を異にしてゐるのであります。即ち前著は全編を通じ一貫して書いてありますが、本書は前著出版後、編者が各所に於て試みました、拙劣なる通俗講演の筆記又は速記を主として輯錄したのであります。だから通俗講演集というてもよいのであります。否寧ろ其れが適當かと思ふのでありますが、前述の如く、前著の主義精神を繼承したのでありますから、續編と名づけたのであります。尤も講演筆記ばかりでなく、一時の感想や、折りにふれての述懐等も收めてあります。

一、編輯の各篇は講演當時の筆記又は速記其儘を列ねたのでありますから、時代の推移した今日から見れば或は矛盾したり、又は觀察を誤つた事柄もありますけれども、當時の眞相を知る便宜の爲、敢て改訂を加へないのであります。

一、以上の次第でありますから、各篇とも、其文體文法さては語調、調勢等に至るまで、其時々

によつて趣を異にし、必ずしも一定してゐません。

一、各篇の内容は互に重複しない樣は勿論、前著に既載の事柄は、一切避けたつもりでありますけれども、時に或は語調や調勢の關係、又は意義の徹底を期するといふ所から、重複した所もあります。

一、書中「前著大」とあるは「神宮大麻と國民性」又前編とあるは「敬神と實際生活」のことであります。

一、書中に引用した、大家先輩の所說は、大概其出所を明かにしておきましたけれども、單に其大要を摘錄したもの等は、その眞意義を誤り傳へんことを虞れて誌さぬのもあります。

大正十一年十月　日

編者識

緒言

一、政治的にも、經濟的にも

歐洲戰亂の結果は、世界的大勢に大なる變化を與へ、地上にある國家の存在と、人類の生存とに甚大なる影響を及ぼすであらうといふことは、前編の緒論に書いておいたが、果して其通り、今や國家の存在は危からんとし、人類の生存は安定と保障とを失はんとしてゐる。現に本年四月十日ゼノアに於て開會された、歐洲の經濟回復を目的とする各國代表會議の發會式に於て、佛國代表委員バルツー氏は表明して曰く（本年四月十日國際直電ゼノア發）

全世界は今や保障と安定とのない爲苦んでゐる。世界の窮狀を救ふ唯一の途は誠意ある活動に

ある云々

と演說してゐる。これは、今日世界各國民の眞に僞らざる叫びであらう。全く世界は今日、如何にして國家の存在を圖らんか、如何にして人類が生きんかとの問題に、血眼になつて騷いでゐるのである。尤も國家の存在如何の問題も、要するに人類が如何にして生きるかの問題によつて解

決されるのであるから、結局問題は、如何にして生きるかといふことに歸着するのである。

日、英、佛、伊等の世界的に堂々たる國々をはじめとして二十八ヶ國の代表百五十二名の委員が、一ヶ月以上もかゝつて愼重審議したゼノア會議も遂に不成功に終り、續いて牙海、倫敦と矢繼早に會議は開かれたけれども、何れも快刀亂麻を斷つやうな解決的の、空腹に牡丹餅を食うやうな快感的の妙案は一つも纏らない樣であつた。即ち世界は今や、政治的にも、經濟的にも、全く行詰り、而して精神的に、死に瀕してゐるといふべきである。

二、二大思潮

蓋し戰後雜然として起つた、種々の思想、幾多の運動、各樣の議論も、要するに如何にして生きんかの問題を解決せんがためであらう。この雜然たる思想、運動、議論は、いろ〳〵複雜混沌としてゐるやうではあるが、試に之を概括的に整理して見れば、其中におのづから、二つの大なる思潮が鮮かに流れてゐることを認められるのである。即ち其一は世界主義的思潮即反國家主義、一は國家主義的思潮即反世界主義是れである。

イ、世界主義

然らば其世界主義的思潮とは、どういふ主義であらうか。世界主義的思潮といへは、世人は直に危險思想を連想して、惡的世界主義と速斷するけれども、世界主義の全部が必しも危險性といふわけではない。其中には大に採るべき美點も潜在してゐるのである。要するに、物に善惡長短の兩方面がある如く、世界主義にも亦この兩方面があるものと考へなければならぬ。

先づ其の善的方面よりいへば

曰く、戰爭は悲慘のものである。殘酷のものである。未來永却戰爭は仕度ない。其れには何事も國際的に自治的に相談協議の上解決し　斷じて、戰爭はしないこととし、經濟上も互に助け合つて、全世界を擧げて眞善美化し、人類をして眞の幸福に生活せしめたいといふのである。其理想の一端が、例の國際聯盟と華府會議となつて現はれたのだ。尤も華府會議は、其内幕には一二强國の野心が潜んでゐた事は事實であつたらうけれども、兎も角形式上の理由は、世界人類幸福のために、永久の平和を將來したいといふのであるから、表面上から見れば、世界美化の理想に向つて一歩を進めたものと見なければならぬ。之は假令形式にもせよ、表面だけにもせよ、喜ぶべき

現象としなければなるまい。これが段々試練せられ、洗練せられ、形式でなく、表面だけでなく本當に然うなれば人類の幸福は此上もない事で、眞に善的世界主義というて差支なからう。

蓋し昨今世界の何處からとなく、さういふ雰圍氣が、幾分かづゝ濃厚になつて來つゝあるではあるまいか。現に本年八月二十五日より同三十日に亘りオースタリヤのウインナに於て開催された、萬國議會同盟會議に於ての議題中に、小數民族の權利擁護といふ問題も出たさうであるが、最も議論になつたのは、デンマルクの元陸相マンク氏より提出された、徴兵制度廢止案であつたさうである。更に人々を驚かしたのは、佛國上院議員ムデー氏の軍隊廢止案であつたといふ。他の國から提出するなら格別だが、佛國が軍隊廢止など言出すといふは本氣の沙汰であるまいとは、何人も直に感ずることであらう。果して之はサンヂカリズムから出たものであることが判つて取消したさうである。これ等の議案の成否、實行の如何は別問題として、又其れが眞面目に提出されたのかどうか、眞面目に論議されたのかどうかは知らんが、兎にも角にも、小數民族擁護とか徴兵制度廢止といふ問題が議題に上つたといふこと、夫れ自體が即ち其第一歩ではあるまいか。何れにしても、以上は善的世界主義として差支なからう。たゞ、今の處では單に理想であつて、何時實現するかといふことは判からんのみならず、或は百年河清を俟つことに終るかも知れんのである。

そこで一面には惡的世界主義が而も熾烈に迅速に、颱風的勢ひを以て全世界を吹き倒さんとしてゐるのである。即ち曰く、今や人類は生死の大難關に立つてゐるのである。此秋に方り、國際的に自治的に相談して、戰爭を止め樣の、經濟上助け合はふのつて、そんな生ぬるいことではいけない。一體戰爭の起る原因は、國家なんといふものがあつて、互に睥睨み合つてゐるからである。隨つて政府だの、法律だのといふものがあつて、土地財産の私有を許し、これを保護するから、茲に階級爭鬪の因を作るのである。宜しく國境を撤廢して全世界を打つて一丸とし、宜しく私有財産制度を廢止して、全財産を平分し、因て以て總ての人類をして皆平等に、さうして自由に生活せしむべしといふのである。其思想は共産主義、社會主義、無政府主義などいふ頗る危險性を帶びた主義となつて實現しつゝあるのである。ところで此各主義は、其主義、主張、手段、內容に至つては各其性質を異にしてゐるので、決して融合混和の出來るものではないのであるが、只現在の國家社會に對する不平の點に於て共通してゐるので、その共通點を以て互に提携してゐる

るかの觀があるのである。是れいふまでもなく惡的世界主義であつて、却て人類の幸福を妨ぐるものである。我國に於ては此一派を危險主義者といふのである。蓋し獨逸のスパルタカス、佛國のサンヂカリズム、米國のI、W、W、露國のボルシエヴキなどは之に屬するものであらう。而して今日では世界主義の善的方面は其影甚だ薄く、獨り惡的方面のみ活躍しつゝあるかの感がするのである。世人が世界主義的思潮即危險思想と速斷するのも決して無理からぬことである。

ロ、國家主義

然らば世界主義的思潮に反對なる國家主義とは何か、これも矢張善惡二つの方面がある。曰く戰爭は悲慘であり、殘酷であるから絶對に戰爭は仕度ないといふことは同感であるけれども、昔からいふ如く戰爭と、泥棒と、病氣とは、どうしてもなくならん。一片の國際聯盟や軍縮協定で、永久の平和が保持されるものとせば、遠の昔に戰爭は絶無になつてゐる筈である。然るに事實は全く反對で、神聖同盟だの萬國平和會議だのといふものが起れば起る程、戰爭は却て多くなつてゐるではないか。即ち戰爭は絶對に拒止することの能きないものと見なければならぬ。果してさうだとすれは、萬一他國と交戰した際は、石に噛りついても勝たなければならぬ。敗けては實に慘酷いものだ。それには國家を強くしなければならぬといふのである。然るにこの主義が徹底して來ると、他の國を壓迫しても、自國を強くしよう。他の國民はどうならうとも、自分の國だけ強ければよい。甚しきは人の國を征服してまでも、自國を強くしようといふことになる。かうなると、之は軍國主義又は帝國主義といふもので、決して賞むべき主義でなく、喜ぶべき思潮ではない。然るに今日は各國とも、口には立派の事をいうてゐるけれども、其實何れも軍國主義的思潮を高調してゐるのである。現に英米等の强國が弱小國に壓迫を加へてゐることは世界周知の事實であるし、又表面には人道だの軍縮だのと叫びながら、內實は却て軍備の充實に努めてゐるかと疑はれる樣の事をしてゐる國もあるのである。斯の如きは決して誠意ある眞の國家主義とはいはれない。所謂惡的國家主義といふのである。

眞に誠意ある國家主義といふものは、先づ我祖國を美化し、その美化した祖國を通して世界各國を美化せしめ、以て人類をして眞の幸福に生活せしむる如く努力するものでなければならぬ。これを是れ善的國家主義といふのである。

ところで近時面白き現象は、彼の印度に於けるガンヂーの奮起、最近土耳其に於けるケマル、

バシャーの成功、伊太利に於けるベニト、ムソリニの活躍である。三者個人の批判は暫く措き、大局より見て何れも愛國的運動の成功と見らるべきものではあるまいか。換言すれば國家主義的思潮の高調と見られやう。只善的國家主義か、惡的國家主義か、一寸判斷がしかねるが、兎に角かういふ愛國的運動氣運は各方面に擡頭して來たのではあるまいか。ガンヂーは別として、ムソリニの率るるファスシスチ黨は其の主力が在鄕軍人に在ると、其黨の組織の動機が、三年前の一九二〇年の夏頃、伊太利が赤色勞働團の爲、全土が赤化せんとした時、反過激主義、反共產主義の旗幟の下に建設されたるものなるに於て、又ケマル、バシャーは彼自身が既に軍人出身なるに於て、共に熾烈なる愛國の至情に出たものたることは疑ひなからうか。併し私は其れが善的にもせよ、惡的にもせよ、又果して將來に成功の實を結ぶや否やは逆睹の限りでないが、今日の場合、列强環視の間に在つて國家主義的愛國運動に奮起したる意氣を壯として賞贊したいのである。この愛國的運動と、前に述べた徵兵制度廢止運動とは洵に面白きコントラストではないか。一體これは何を物語るものであらう。

それは偖おき、眞の國家主義は先づ祖國を美化し、其美化したる祖國を通して世界の美化に貢

獻するに在る事既に述べた通りである。而して祖國を美化せんとせば、先づ祖家を美化しなければならぬ、祖家を美化せんとせば、先づ自身を美化すべきである。所謂修身齊家治國平天下であらねばならぬ。自身を美化せず祖家を美化せずして、祖國の美化は、あり得べきてない。祖國を美化せずして世界の美化は更にあり得べきでない。愛國婦人會員が、假令國を愛することを知つても、我家、我父母、良人、弟妹を愛することを知らなければ、それは虛僞の會員である。赤十社員が、たとへ四海の同胞を相愛すべきを知つても、我家庭を愛せず、我鄕土を愛せず、我祖國を愛せざれば、それは虛僞の社員であるといはれても仕方がないと思ふ。我國では此類の會員、社員が決して尠くないと思ふ。再びいふ修身齊家治國平天下であらねばならぬことを。

三、生を求めて却て死を早む

かく論じ來つて見れば、眞の世界主義と、眞の國家主義とは、其理想に於て精神に於て全く一致するのである。同時に危險的世界主義と軍國的國家主義とは其經路は異なるか知らんが、世界の美化を妨げ、人類の幸福を阻止する點に於ては同一である。然るに今や世界の各國は、或者は

軍國的國家主義を、或者は危險的世界主義を、各々固執してゐるのである。換言すれば何れも善的方面を捨てて、惡的方面にのみ走りつゝあるのである、而も世界主義の背後にはプロレタリア階級、國家主義の背後にはブルジョア階級が頑張つてゐるのである。故に今日では、世界主義即プロレタリア、國家主義即ブルジョアといひ得るのである。否、初めよりブルジョアの欲望が軍國主義となり、プロレタリアの欲望が世界主義と化つたのであらう。

茲に於て世界主義對國家主義の紛爭は即ちブルジョア對プロレタリヤの階級爭鬪で、共に根本方針を誤つてゐるのである。が併し之れも大局から大觀すれば矢張如何にして生きんかといふ問題を解決せんが爲に外ならぬものかと思ふ。即ちかうもしたら生きられようか、あゝもしたら救はれようかと、苦しまぎれに焦慮した結果と見れば、寧ろ同情に堪へないわけだ。だが之れでは迚も生きられないし、救はれない。丁度游泳を知らぬものが、水に落ちたと同じで焦れば焦るほど深所へはまり死期を早めるのだ。鵜に捉はれた蠅と同じで、跪けば跪くほど自由を失ひて、見苦しい往生を遂げるのだ。考へて見れば實に馬鹿々々しい話で、生きんとして却て一歩々々死所に近いてゆくのである。

四、吾人の使命

偖以上の如き瀕死の境に在る世界をどうして救ふたらよからう。どうしたら助けられるであらう。之れは他でない、前に述べた樣に、先づ自らの祖國を美化し、其美化した祖國を通して、世界を美化し、人類をして眞の幸福に生活せしめんとする一大信念、一大理想を以て立てる國家でなけらねばならぬ、民族でなけらねばならぬ。別言すれば善的世界主義の理想と、善的國家主義の信念とを根本精神とする、更にいへば世界主義にして危險思潮に溺れない、國家主義にして軍國主義に陷らない、又いへばブルジョアもプロレタリアも眼中になく、嚴然として總ての階級、總ての利害に超越したる國家及民族でなけらねばならぬ。

斯の如き國家が地上の何れにあるであらう。此の如き民族が世界の何れにあるであらう。實に我日本帝國をおいて外にないのである。我大和民族をおいて他にないのである。我國は神代の昔から我民族は原始の當初から、此一大信念、一大理想を以て終始一貫今日に及んだのである。

四方の海みなはらからとおもふ世に、など波風のたちさわぐらん

とは恐れ多き事ながら、日露戰爭の當時、戰爭の慘狀を歎かせ給ひて述懷遊ばされた先帝の御製である。こは併しながら、獨り先帝のみの大御心でなく、歷代皇室の一大信念、一大理想にあらせられたのである。取りも直さず皇祖皇宗の御遺訓にして、所謂祖國精神と稱すべきものである。立國の大義も國體の精華も、一に此精神の作用に外ならぬのだ。されば吾等は此祖國精神を體現して、全世界の爲に、全人類の爲に貢獻すべく奮勵努力すべきである。是れ即ち吾人の使命である。かくてこそ吾等は陛下の忠良の臣民として誇ることが能きるのだ。果して然らば此祖國精神を體現するに於て、吾等はどういふ心掛を以て進むべきか、如何なる方法を講ずべきか、本編は實に之れに向つて適當の解答を與へんとの努力に成つたものである。大方諸彦希くは高覽の榮を賜ひ幸に示敎を惜むなからんことを。

大正十一年十月三十日

敬神と實際生活　續編

目次

一、緒言……一
一、政治的にも經濟的にも……一
二、二大思潮……二
イ、世界主義……三
ロ、國家主義……六
三、生を求めて却て死を早む……九
四、吾人の使命……一一
一、すさりゆく人の心……一

一、本能的我欲……一
　一、新人の新道德……一
二、心は我欲の結塊か……三
三、悲慘の事實……五
四、我欲的迷信……八
五、物騷千萬の世の中……一〇
　附嫉妬（嫁姑爭鬪）反抗
六、表裏二面觀と性欲問題……一七
　附獸姦と俗謠、戀愛關係
七、支那人と我欲……三一
　附歐洲の賣妻、淫樂の研究と纏足
八、止むを得ざる事情……六三
二、本心の光明……

九、懺悔反省……三八
一〇、靈妙なる心の活き……四〇
一一、心の重心即眞心……四二
一二、純眞心の勝利……四八
二、我欲と生命……五一
　一、我欲の根本……五二
　一、現實と理想……五二
　二、生命欲……五三
　三、不死欲……五六
　四、長壽欲……五八
　二、二元生活……六一
　五、靈的生活……六三

六、肉的生活……六五

三、中心の移動と我が國體……六七

一、地理的關係……六八
　イ、西洋の開化西行す……六八
　ロ、亞細亞の文明東流す……六九
二、世界文化史發展の徑路……七一
三、惟神の自然……七三
四、平和主義柔順主義……七八
　イ、既往七十年……七八
　ロ、往時二千年……八一
五、國體と其靈的力と作用……八九
　イ、泉源をこしなへに濁らず……八九
　ロ、神宮とこしなへに嚴たり……九二
　ハ、國體の尊嚴を體得せよ……九六

四、大祓式に就きて……九八

一、現行の儀式……九八
二、其意義……九九
三、沿革……一〇〇
四、諸行事の意義……一〇二
　一、贖物、二節折、三名越祓、四茅輪
五、形代……一〇六

五、東宮殿下奉迎謹話……一〇七

六、更に新時代に……一一七
七、巡回感想……一二一
一、神武東上と豐後水道沿岸……一二二
二、史實の考證……一二五
三、小藩割據……一二六
四、敬神思想……一二八
八、世界に類例なき紀元節と改造……一三一
九、耶蘇の素性……一三五
一、耶蘇の出生……一三五

二、淫猥なる習俗……一三七
三、基督の信仰……一四〇
一〇、新思想の觀察……一四二
一、平和の第一年……一四二
二、新思想と壓迫……一四三
附露國の暗殺時代
三、採長短補……一四五
四、國運發展の兆……一四六
五、希臘時代の所產……一四八
六、デモクラシーの歷史的變遷……一五一
七、生物と生活法……一五二
八、掃除と破壞、自由平等と放縱均一……一五七

九、デモクラシーの本質を誤解……一五七
一〇、眞に父子の情……一六〇
一一、國體の擁護に全力を……一六六
一一、理想的國家と現代思潮……一六九
一、戰亂の影響……一六九
二、眞の自由平等……一七一
三、人類と國體生活……一七四
四、專制と民本……一七五
五、父子の關係……一七六
一二、國際聯盟と永久平和……一七八

一三、神嘗祭に就きて……一八三
一四、出征軍人を送る……一八五
一五、氏神と産土神に就きて……一八八
一、氏神……一八八
二、産土神……一八九
三、古來の美習……一九二
一六、八幡宮の由來……一九四
一、祭神……一九六
二、宇佐八幡宮……一九六

三、八幡の御名號……一九七
四、三社の託宣……二〇〇
五、八幡宮と源氏の關係……二〇二
六、鶴岡八幡宮……二〇三

一七、問答

國體觀念と宗教信念……二〇七
甲某氏に答ふ……二一一
當山春三氏に答ふ……二一五
乙某氏に答ふ……二一六
當山氏の答に答ふ……二二〇
再び乙某氏に答ふ……二二七

一八、神代史の價値と祖國精神……二二九

一、神代史……二二九
イ、根本精神に觸れよ……二二九
ロ、新學者の批判……二三〇
ハ、神話解釋の異說……二三二
二、祖神の信念理想……二三六
イ、永遠無窮の生命……二三六
ロ、造化の三神と宇宙の本體……二四一
ハ、諾冉二神と修理固成……二四三
三、天照大神の表現と其信念理想……二四七
イ、政治的主權の確立……二四七
ロ、食料政策即農業國本策……二五〇

ハ、授鏡と人情美……二五七
ニ、神籬と祭政一致……二五九
ホ、天照大御神と大直日靈……二六一

目次終

敬神と實際生活　續編

一、すさりゆく人の心

大正十一年六月　日

第一章　本能的我欲

一　新人の新道德

今日は何事も新しいことを貴ふ世の中であつて、而も其新しいといふことは、多くの場合私達人間の本能的我欲を露骨に告白し、甚しきは、之を直接行動に訴へて其我欲を滿たさうといふことを意味してゐるのである。さうして、これが新人の新道德であつて、僞らない眞實の生活であるといふのである。忠孝だの、仁義だのといふ、小六ヶ敷い道德は、舊人の舊道德であつて、虛僞の生活であると排斥するのである。而して世人の多くは敢て怪まず、寧ろ共鳴し、力めて之を實現せ

んとするに汲々としてゐるのである。實に面白い世の中となつたものだ。尤も私達人間が神でない限り、佛でない限り、乃至聖人君子でない限り、それが或は本當であるかも知れぬ。されば、荀子に「凡そ人に同一なる所、飢、食、寒、暖、勞、息、利、害、是れ人の生れながらにして有する所、是れ待つことなくして然るものなり、是れ禹桀の同しき所なり」というてある。即ち禹の如き聖人も、桀の如き惡人も、人間の本能的我欲は同一であるといふのである。これを從來は國家の制度や、法律や、又社會の制裁や、習慣や乃至自己の常識、扨ては所謂浮世の義理人情等の爲に抑へて遠慮してゐたのだが、今日はさういふことは遠慮するものでない、何んでも思ふがまゝに打出すものであるといふのである。アメリカの學者スタンレエホオル氏は人間の意識を氷山に喩へて、「氷山の海面に現はれてゐるは一小部分で、其大部分は海中に隱れてゐる。この隱れた部分に潮流などの影響を受けると、非常の連力を以て漂流するものである。この如くに人間の意識に於ても、所謂意識に現はれた部分は私達の心の一小部分で、心の大部分は無意識となつて睡つてゐる。ベルクソンの純粹意識も實は無意識界であつて、無意識的衝動が、意識の表面に發動しても、それが意の如くならぬ時、一旦は無意識界に引返して潛伏してゐるけれども何時か時機の乘ずべきあれば、直に無意識界から飛出して來て、横暴を極めんとするのである」といふやうの意味をいはれてゐる。本當に私達人間社會に、若しも外に法律の罰則なく、内に道德の制裁がなかつたならば、どうなるであらう。

二　心は我欲の結塊か

私は私達人間の心といふものは、本能的我欲即ち物欲、食欲、性欲又は戀愛欲、安逸欲、賣名欲等諸々の我欲に更に嫉妬性、殘忍性、反抗性等の危險性を加へたもの、結塊ではないかと疑ふものである。何となれば私は私達人間が、四六時中この我欲の爲に汲々日も尙足らずに、焦り狂ひ、更に嫉妬、殘忍、反抗等の危險性を加へて、人を苦め人を害し、而も自分も苦み、自分も破壞されつゝある淺猿しき心の存在を否定する勇氣を有たぬからである。尤も我欲、嫉妬、反抗、殘忍等の惡素が各々別のものではなく、我欲の徹底したものが嫉妬となり、嫉妬の高調したものが、殘忍となり、反抗となるのである。而して之が私達の心の全部ではあるまいかと疑ふのである。「心こそ心迷はす心なれ、心に心心よろすな」といふ道歌があるが、全く其通りで、私達は自分

の心で自分の心を迷はし、飛んでもない所へ連れて行くのである。

「我心鏡にうつるものならばさぞや姿のみにくかるらむ」。全くですね、私達の心がありのまゝに鏡に映つたならば、隨分と其姿は醜い穢いものであらうと思ふ。即ち我欲の爲に血眼になつて何物かを漁つてゐる狀態。嫉妬の爲に排擠陷穽等のあらゆる惡辣の手段を考へてゐる姿は、二目と見られたものであるまい。「よかりけゝる仲もこのほど惡くなりぬ、隣りて倉を建てゝから後」これは實によく私達のさもしい心の底を穿つたものである。地方町村の自治の發達しないのも、各種事業の發展しないのも、これが爲である。徒に互に嫉妬を以て排擠陷穽をこれこゝし、協同一致共に助け合うて努力奮闘することを忘れてゐるのである。いやそれどころか、堂々たる天下の大政治家、大學者、大宗教家、大教育家等の群れでさへ、悉く、この嫉妬の爲に互に相爭闘し、相反目して各其職責を棄り分を破り、これが爲に國家社會の安寧を害し、秩序を亂し、世界の進運を妨げ、人類の福祉を沮むこと實に大なるものである。實に憎むべきは、人間の嫉妬心である。

されば日本書紀推古紀に

群臣百寮、嫉み妬むことあるなかれ、我既に人を嫉めば人も亦我を嫉む。嫉妬の患其極を知らず。故に智己に勝れば則ち悅ばず。才己に優れば則ち嫉む云々

と詔せ給ひてある。實に畏しき極みである。昔も今も人の心の淺猿しさは濕らぬものと見える。只今日は一層猛烈を極めてゐるかと思ふ。

三　悲慘の事實

毎朝繁く新聞紙には、以上を證明すべき幾多の事實が、間斷なく私達の眼球に映つるではないか。私はこれ等の新聞記事を見る毎に、私達人間の心のさもしさ淺ましさをつくづく情けなく思ふのである。中には自己一人の我欲を滿たさん爲に、累を人に及ぼすは云はずもがな、可愛想に何んにも知らぬ、妻や愛兒を路頭に迷はせ、飢餓に泣かせ、甚だしきは法廷に罪を問はるゝ樣の悲慘事も少くないのである。最近即ち本年五月十一日の新聞に、宗教界の權威者たる松村介石氏の姪に當る、兼子千代（四一）といふ婦人が、詐欺横領の罪名の下に、囚はれの身となつたことが報ぜられてある。千代は今から十五年前神戸の宗教女學校を卒業し、間もなく陸軍中尉某に嫁したるも、離緣し、當時神靈術で時めいてゐた、兼子喜代八に再嫁したのであつた。然るに喜代八

が一攫千金を夢みて、誇大の事業熱に浮され、永年なれた神靈術を捨てゝ、經驗なき各種の事業に手を出し、見事に失敗した結果、千代は一旦良人の鄕里福島の義兄の許に預けられ冷い月日を送つてゐたが、都合により大正九年の夏歸京したれど、身を寄する所もなく彼方此方と流浪徘徊し、貧苦其極に達し。當時十才の長男に可愛想に寒空に而も土地不案内の電車道に夕刊賣りをさせ、辛くも飢餓を凌いでゐたが、いたいけな子供の飢に泣く顏を見ては身も世もなく、悶へに悶へた結果、法の恐しさも忘れて罪を犯すに至つたといふのである。何んといふ憐れの事であらう。これも良人喜代八の我欲から起つたことであつて、千代に對しては同情に堪へんのである。また少しく古い事ではあるが、大正九年十二月十一日岐阜縣武伎郡吉田倉庫銀行の支店長中島喜七といふ人が、自己保管の行金七萬圓を盜み、其犯跡を覆はん爲め、外部より强盜の侵入した如く裝はうとて、あらうことかあるまいことか、當時七八歳になる長男行雄とかいふ子を殺したのである。金が欲しくて盜んだら盜んだで、露見したら、自分で罪に服したらよいではないか。己れが罪を隱さんとて、何んにも知らぬ神の樣な、佛の樣な、而かも現在血を分けた可愛い我子の喉笛に刄を刺すとは鬼であらうか蛇であらうか、迚も人間業とは思はれない。これも我欲の高調から來たことであらう。然も殘忍性を遺憾なく發揮してゐるのである。實に恐るべきは人間の我欲である。又本年四月二十四日の新聞には珍らしい慘事が傳へられた。事は德島市の出來事で、同市新倉の高利貸岩本駒衛(五九)といふ元警部も勤めた人が、長男敏行(二六)といふ者の爲に斬殺されたといふことである。其原因は父駒衛が、餘りに强欲で、長男が肺病に罹つて費用が嵩むとて、常に口きたなく小言をいふので親子喧嘩の絶間なく、敏行は父の慘酷無情を怨み、一層殺して自殺せんと決心した結果であるといふのである。何たる淺猿ましい事柄であらう。これが人間の親子といはれるであらうか。又同三月廿八日の新聞に千葉縣長生郡で代市喜之松(五三)といふ父と喜惣といふ長男と、財産の爭ひより長男は嘗て父を絞殺せんとした事あり、父は長男の家の井戸に猫イラズを投入して、長男夫婦一家四人を屠殺せんとした事が露現して、親子法廷に爭ひつつあるといふ記事が掲載せられてあつた。何といふことであらう。氣の弱いものは聞いただけで卒倒するであらう。尤もこの樣な事件は親子の我欲から起つたことではあらうが、嫁と舅姑の嫉妬怨恨も手傳つたことではあるまいかと想像されるのである。こんな事實を數へ上げてゐれば、所謂枚擧に遑なしである。而も新聞紙上に現れるのは、稍極端なものか、若くは何等かの事情に

よつてたま〳〵餘儀なく現はれたもので、未だ世間に知られないで、より以上の恐るべき、憎むべき事實は、いくらあるか知れないのである。考へて見れば、人間といふものは、隨分淺猿しい動物であるといはなければならぬ。

此處で一寸斷つておきますが、以上に擧げた實例は、總て新聞記事によつたのであるが、新聞記事には往々事實相違の場合があるので、以上の事例にも或は相違がないとは保證し難いのである。併し事件の當該者其人としては相違の事であつても、斯ういふ、いきさつの事實は、幾らもあると信ずるのであります。以下に於ても新聞記事を引證した場合は同樣であります。

四　我欲的迷信

一體私達人間は、どこまで欲張つてゐるのか、東京あたりには隨分馬鹿々々しい、滑稽的の迷信が流行つてゐるが、それが如何にもよく其欲張りを表白してゐるのである。例へば泥棒の張本人であつた、鼠小僧次郎吉の墓の石を缺き取つて懷中して往けば、無盡の籤に當るというて、可愛想に次郎吉の墓は缺き取られて、慘々の態であるが如き、又酉の日に大鷲神社へまゐり熊手を買求め、幸福を酉(取)の日で、世界中の金を熊手で搔き集めて、大鷲(大に取る)であると、勝手に理窟をつけるが如きに至つては、滑稽も馬鹿々々しさも通り過ぎて只痛み入る外ない。又冬至に「柚湯」に浴るのは、ヒビ、アカギレの用心乃至冷えぬ爲だといふのでなく「柚」を「融通」とこじつけて、金の融通がつくといふためださうである。故人寺崎廣業氏の畫を、商人が頗る珍重するのは、どういふわけかと聞けば「廣業」は「業を廣める、業が廣まる」の意味からだといふ。大阪の畫家一鳳氏は、商人の依賴に必ず「藻を刈る」圖を書くさうであるが、それは「藻を刈る一鳳」は「儲かる一方」だからだといふのである。實に恐れ入つた次第である。これも慥に我欲の一端の現れであるに相違ない、が併しこれ等の迷信は一面に於て無邪氣滑稽の所があつて、而も意味に於て茶味性を含んでゐるので、必ずしも憎むべきこでもないと思ふ。只前に擧げた事例の樣な殺伐性、殘忍性を有つた我欲に至つては、實に恐るべき、且憎むべきものである。

五　物騒千萬の世の中

附　嫉妬（嫁姑爭鬪）反抗、

全般を通じて昨今は世の中が頗る物騒になつて、何となく人の心が、苛ら〳〵して沈着きがなく段々と荒みゆきて、前に述べた我欲は勿論であるが、嫉妬、殘忍反抗等の惡素が益々助長する樣に思はれる。さういふ事例は、矢張日々の新聞紙上に報道せられてある。しかも斯ういふ記事は昔は三面に限つたものであつたが、今日は殆ど全面を埋めてゐるかと疑はゝ位である。本年五月廿七日の新聞に、千葉縣印幡郡に石井松五郎といふ父と、其次男武次とが、親子でありながら、平素から仲が惡く別居してゐたが、武次は何か父に小言をいはれたとかで、其面當に三人の子供を縛つて父松五郎方の井戸に投込んだ後放火し、隣家二戸を燒き武次は妻と共に十數丁離れた山林で縊死したといふ事が傳へられてある。若し事實とすれば思ひ切つて念入りの面當をしたものである。これも前に擧げた事例と同じに、嫁姑の爭ひが手傳つてゐるではないかと想像される。何故姑嫁といふものは、昔から斯う仲の惡いものであらう。これも結局は嫉妬から來たのであるが、困つたものである。本年二月十日の新聞に、東京に某砲兵少佐（當時英國出張中）の母（七三）が嫁女（某大佐の娘）を憎んで良人に無斷離緣したのみならず、其孫十三歳の少年を虐待して警察から取調べられたといふことが傳へられてあつた。少佐の母堂といへば相當人格者であるべきに去りとては、餘りに淺猿しいではないか。又同月十五日には神戸市に於て何龜吉といふもの、妻が舅の老人（七四）を餘りに慘酷に虐待した爲め、老人も堪へ兼て、唐鍬を以て嫁を打殺さんとしたといふ悲慘の記事が見えてゐた。ところで、これらの事實は偶々新聞に出されたのであるが、未だ新聞等に出ない、上流、中流、下流を通じての各家庭に、より以上の姑嫁の爭鬪、繼子の虐待等の事柄は、いくらあるか知れない。この爲に家庭の平和は破られ、產は傾けられ、或は有爲の青年少女をして、自暴自棄的悲慘事に終らしむる等の事が多々あるのである。西洋に「嫁の時によき姑なく、姑になつてよき嫁なし」といふ諺があるが、姑嫁の鬪爭は東西共通の人情と見える。其度し難いのは無理もない。或人が將來嫁姑爭鬪の緩和策として、嫁及姑に平常下の如き俗謠を念佛代りに謠はしておいたらよからうといはれたが、至極同感である。曰く「たとへ姑が鬼でも蛇でも、可愛お主の親じやもの」「たとへ嫁女が鬼でも蛇でも可愛息子の妻じやも

の」といふのである。この心がけならば、問題は起るまいと思ふ。飛んだ話が岐路へそれたが、というて全く緣故のない事柄でもないが、兎に角殺伐、殘忍、反抗等の惡風は日一日と多くなつてゆくかと思はれる。本年四月廿四日の新聞には長崎縣高來郡に野口政吉（二九）といふ青年が戀の叶はぬ恨みに三人を慘殺したといふ、短氣極まることが報道された。又五月二日には鶴見に少女の三人殺あり、越えて三日には前橋市に五人の殺傷事件あり。其他男女戀愛の嫉妬から、殺す、斬る、毆る、投込む、火を放けるなどは毎日の樣に新聞を賑はしてゐるので、實に物騷千萬危險なくて臆病のものは、現實の世の中には生きてゐられないと思ふ。同じく最近の新聞で知つた事であるが、私は人間の反抗心、復讐心の熾烈なるに慄然としたことがある。それは、茨城縣眞壁郡雨引村小學校の尋常三年生のハツ（一〇）といふ子と、ナミ（一〇）といふ子が、些々たることから嗔嘩し、ハツは下駄を以てナミの胸部を打つたが打ちどころが惡るくて死んだといふのである。僅か十歲の而も女の子が相手を毆き死にいたらすとは、何といふ恐しい事であらう。これを見ても私達人間には熾烈なる反抗性を有つてゐるものであることが判ると思ふ。一體動物といふものは皆反抗性を有つてゐるもので、猛獸は勿論であるが、犬猫牛馬でも皆さうである。彼等は人が前に引けば後に退がり、後から引けば前に出るもので、牛馬に荷車を曳かせ、犬に腕車を曳かせるのも其性を利用したものである。支那の車夫は非常に腕車を曳くに上手なさうで、上海等の人馬の雜沓してる中を、巧に疾走するさうであるが、彼等は餘程動物に近い性を有つてゐるからであると誰れやらが評してゐたが、或はさうかも知れんが、一般に人間が反抗性を有つてゐることは確かである。甚しきは日常寒暑の儀禮的挨拶にまでも、反抗性を發揮してゐるものもある。

甲「どうもお寒い事であります」乙「なんだ、お寒い、寒いとて俺の知つたことでない」甲「何時も御繁昌で結構であります」乙「オホキナお世話だ、繁昌しようとしまいと、馬鹿野郎め」

甲「何時も御壯健で」乙「何が御壯健だ、間抜けめ、この間から赤痢、チブス、黑死病、疱瘡、腸加答兒が、一度にやつて來て、死ぬめにあつてゐら、漸く癒りかけたが、それでも今朝から厠へ五十何回行つてゐら、ヒョットコ目、マゴ〳〵すると赤痢糞を振りかけてやるぞ」乙「何に赤痢、チブス、そりや大變だ」

これぢや誰れでも逃げ出すだらう。さうかと思ふと、また稀には馬鹿に盲從する僻の人もある。

甲「エー毎日お天氣で結構で」乙「左樣毎日お天氣で實に結構でございます」甲「併し餘りお天

氣續きでは農家で困りますな――」乙「さうでございます、かう御しめりがなくては農家では困りませう」甲「けれども又雨が長ふりしますと、洪水といふ恐ろしい災難が來ますから、矢張お天氣の方が結構ですな――」乙「左樣です、おつしやる通り矢張お天氣の方が結構でございます」

これでは全然で鸚鵡返しで何をいつてゐるのか判らん。尤もこんなのは共に例外である。それは兎に角として私達は何んでも他に反對せんとする傾向のあることは前にいふ如く事實だ。新聞紙などでも、時の政府に反對しなければ賣行きが惡いといふことである。青年諸君の中でも、動ともすれば、何んでも彼でも反對さへすれば偉い人物であるかの如く考へて、町村の施設等に片端から反對して破壞を之れ事として快としてゐるものもあるのである。素より屈辱、盲從は宜しくないことはいふまでもないことで、正義正道の旗熾の下に侃々諤々の論議を敢てするは望む所である。けれども徒らに物事に反抗反對して、秩序紀律を紊すが如きは、小人の小勇といふものであつて、思慮ある大人の大勇ではないのである。こゝを考慮する必要があると思ふ。

こゝで一寸話しが岐路へ這入るが、人間の反抗性の裏書として、獨逸國民の反抗性を話して見やうと思ふ。

戰前に於ける獨逸國民は、規律、協同、服從等の諸德によつて國家的に統一せられてゐたといふことであるが、果して然うだとすれば獨逸國民は、餘程服從性に富んでゐた樣に思はれる。何こなれば規律、協同、服從の三德中の主德は服從でなければならぬ。服從するから、規律が立ち、規律が立つから協同が出來るのである。服從がなければ規律も協同も出來るものでない。ところが事實は反對でこの獨逸國民程昔から反抗性の熾烈なる國民はないのである。現に十六世紀の初めに、世界の國王をさへ眼下に睥睨して、無上の權力を有つてゐた、羅馬皇法に反抗し遂に新敎を樹立したのは、サソニーのアイスレーベンの一農家に生れたマルチン、ルーテル（一四八三、一五四六）である。彼がウオルムス議會に於て獅子吼したのは一五二一年四月十八日で今から實に四百一年前彼が三十八歲の時であつた。又近くはキヨルン市のヤトーといふ牧師が信者の前で「神は世界の創造主でない」の「基督敎以外の宗敎を單に異神邪道視することは出來ない」のと、既成宗敎に對する反抗的氣焰を擧げた際に、國民は大に共鳴し彼をルーテルの再來であるとして聲援を與へたといふことである。又政治上の主權者即獨逸皇帝に對し、社會民衆黨の一代議士〃

デブールは議場に於て「自國より遙に後輩の國が民主制に鞍換をしたのに、獨逸が共和制たらざるべからざるゝ宣言するのは決して不合理でない」というて帝制に反抗してゐる。又現時獨逸社會黨の主領シャイデマンが議會の副議長になつた際、彼は皇帝に謁見することを拒絶したといふことである。斯の如く地上の權威に反抗する、獨逸國民の反抗性は更に外部に對して、世界經濟の覇者たる英國に對する反抗と化したのであると、慶大教授のどなたかが中央史壇かにいうてゐる。私は思ふ、是れといふも、カイゼルの政治が壓迫專制を以て終始し、國民を無理に頭から抑へ付け、汎カイゼル主義にのみ汲々とし、國民を顧みなかつた結果であつたのだと。尤も獨逸ばかりでなく、英國も佛國も、さうであつた。露國は特に然りであるし、其他の諸外國も皆さうである。（この事に關しては前編六三頁以下思想の戰の章に詳說してあるから參照せられたい）。これを思ふにつけ私は此際我　昭憲皇太后の民意尊重の御歌を拜想し奉つりたいのである。嘗て靜岡縣の金原明善氏が天龍川の治水工事に盡力した事が雲上に聞ゆるや、昭憲皇太后は「治民如治水」といふ御題の下に

あさしとてせけばあふるゝ河水の、心や民の心なるらむ

と賜はつたといふことである。これは單に　皇太后陛下のみの大御心でなく、實に我　皇室の一大御理想にまし〳〵たのであつた。古來我國民も相當に反抗心を發揮してゐるけれども、獨り皇室に對し奉りては絕對服從の誠を致して來たのはこの爲である。これが即ち我國體の由來する所である。國體に關しては後段に述べるけれども、前編第三章を參照せられたい。）

六　表裏二面觀と性欲問題

附　獸姦、古歌と俗謠、戀愛關係

以上述べ去り、說き來つてみると、私達人間の心なるものゝ、餘りに醜く餘りに穢ないのに驚くのである。其醜さ、穢さが、私達の心眼にも見え、心鏡にも映るのである。さうして恥しいと思ひ、情けないと感ずるのであるが、それで、それを制することが出來ないとは、何としたものでああらう。口でこそ、筆でこそ、誰れも彼れも、立派な事をいうたり、書いたりして、全然で、神の世界からでも、出て來たやうの、高慢チキの顏をしてゐるけれども、一皮ヒッ剝いて見よ、本能的我欲を御大として、嫉妬、殘忍、反抗等の醜の軍勢が、銃口を揃へて、仁義、道德、風敎、

人道などいふ正義軍を敵として、突擊しようとして待ち構へてゐるのである。然も別働隊として最も有力なる性欲の戀愛軍が背後を突かんとしてゐる此頃明治聖德記念學會の紀要に、皇學館教授某氏が三代御記の拜講筆記の中に「私どもの僞らざる表裏兩面の眞生活を、たとへそれを公にせずとも、先づ自分の妻に、自分の子に向つて、公開することを得る人が幾人ありませうか」といはれてある。これは餘りに一般の人格を無視したやうではあるけれども、さてこの言葉を頭から否定することは出來まいと思ふ。現に本年になつてからの出來事であるが、青森縣に、帶妻三人の子ある小學校長(四三)が當時有夫かどうか知らんが、子供を持つてゐる三十幾歲の女の准教員と通じて駈落ちした珍事があつたし、關西の兵庫縣須磨郡には同じく三人の子ある小學校長(三三)で、淡路郡の酒造家某の三女(一六)の高等女學校の生徒と情意投合して、江島片瀨へ駈落したが發見されて鐵道自殺したとかいふ奇談もある。又某地に某教の牧師で情婦に墮胎さしたとかいふ噂の種を蒔いたものもある。又彼のダンスの先生として男勝りと評判された、大阪の多賀玉子といふ婦人が姦娠したを耻ぢて自殺したといふこともある。又堂々たる學者にして妻子と別居し情婦と同棲して平氣でゐるものもある。こんなことを一々數へ上げてをれば殆ど際限がないが、私は右の中で、小學校長及牧師の戀愛問題には同情に堪へないのである。何となれば此の人達は、偶々世間に知られる樣の不手際の事をやつたので、つまり戀愛問題に關して未だ經驗なく甚だ幼稚であつた結果であらうと思ふのである。それが教員なるが故に、牧師なるが故に、大に世間の注意を惹いたので、普通の人であれば何んでもなかつたかも知れんと思ふ。しかく世人が教育者や宗教家を聖人扱ひにするのが惡いといふのではないが、教員とても、牧師とても、神でも佛でもない、普通の人間であることを認めておくことは必要であらうと思ふ。というて決して稱賛すべき事では勿論ないが、只この人達ばかりでないのであるから同情するといふのである。況んや私達人間の本能的我慾の中でも、この性慾だけは特に常識や理智を以てのみ考へることの出來ない所のある、厄介のものであるに於てをやである。現に中世の歐洲に於て宗教上の會議に列する教會の代表者を接待するに、密に一群の娼婦を以てしたことさへあつたといふ位である。俗塵を超越して殆ど神といはるべき、教會の代表者でさへ、それであつたのである。凡人間の我慾の中で最も耐忍の出來ないものは、食慾と性慾であらうと思ふ。食慾のことは此場合暫く措き、性慾についていへば、昔から東西洋に行はれた獸姦の如きが雄辯にこの消

息を語つてゐるのである。一七三〇年頃のマルチン、シユリツヒの記述によれば「犬、猫、羊、鶏、鷺鳥其他猿、猩々、古代では蛇が屢々婦人の利用する所となつた」といふことである。古來最も盛んであつた所は支那と伊太利ださうで、前者は鳥、後者は羊を犯したものださうである。舊約の申命紀に獸姦を誡めた箇條のあるのを見れば、其弊害も多かつたのであらう。我德川時代に奥女中が狗兒を愛したのも其一つであらう。信濃の山中に巨莖の爲に人と交はる能はず、牝馬と交つた男があつたさうであるが、これは例外であらう。波斯の醫師は淋病者に獸姦を勸めるといふことであるが、これも例外であらう。（變態心理　田中香桂氏）我國の古今萬葉の歌謠が殆ど戀歌であるを見ても其一端が知れるではないか。古今萬葉拾遺などに今日の俗謠と同意味のものが隨分澤山ある。これは俗謠が古歌の意をとつたのか、但しは人情の機微が偶然一致したのか知らんが、興味あるものだと思ふ。例へば萬葉四、

遠くあればわびてもあるを里近く、ありときゝつゝみぬがすべなさ

は俗謠の

とほけりや遠いとあきらめもせうが、なまじ近所で物思ひ

と同意である。中にはまた可なり思ひ切つたのもある。萬代集藤原恒子の歌に

うたゝねにまちや明さん下紐の、とけぬるよひは枕だにせず

は俗の

ぬしのくる夜はよひから知れる、しめたしごきが空とける

と同じで、隨分露骨で、頗る危險い所である。又古今集躬恒の

むつこともまたつきなくにあけにけり、いづらは秋の長してふ夜は

は俗の

秋の夜を長いこいふはそりや常の事、主とねた夜の短さよ

と同意で、矢張可なり際度いものである。新古今式子内親王の

忘れては打なけかるゝゆふべ哉、我のみしりて過る月日は

は俗の

思ひきつても日のくれ〳〵は、おもひかへして獨泣

と同意で、所謂情緒纏綿といふ態である。かういふ類は數百首に及んでゐるので、今一々披露の

餘地がないから省略するが、如何に戀歌が盛んであつたかが窺はれるのである。尤も時代の所産ではあらうけれども、兎に角これは東西古今を通して、所謂禹桀も同一で、貴賤貧富の別がないのである。甚しきはストックホルムに於ては一度花柳病に罹つたものでなければ入會を許さぬ、陸軍將校の倶樂部があるといふことである。我國の一部の階級にも花柳病にかゝつた時「これで私も男の仲間入が出來た」というて誇りとした風習が今尙あるといふが。（林癸未氏國の疲弊と賣淫）これは所謂東西揆を一にするといふべきであらうが、馬鹿々々しい話である。因にいふ梅毒は普通コロンブスが亞米利加遠征の時に兵士と土人との交接から發生し、西洋各地に傳播したものとしてあるが、實は夫れより十五年も前に以太利に流行してあつた。一四九五年に佛蘭西のカール第八世が英、獨、和、西班等の各國から兵士を募り遠征軍を組織し、伊太利を征伐すべく巴里を出で、マルセーユを通過し以太利に侵入しネヤベルに滯陣中に發生し、非常の勢を以て流行した、其時軍隊に婦人も居つたといふ。其年の秋凱旋して軍隊を解散したので、第一佛蘭西に大流行し、次で各國に傳播したのである。當時其病名が判らんから佛ではネヤベル病又は以太利病、其他の國では多く佛蘭西病というて發生地の地名を冠して呼んでゐたのである。其翌年喜望峰の航路が開通したので、葡萄人が東亞細亞に來る樣になり、支那の弘治九年頃支那に流行を始めた。支那では廣東人より始まつたといふので廣東病と呼び其形が似てゐるとて楊梅瘡というたといふ。梅毒の名これより起つたのであらう。我邦では室町時代の末有名なる京都の竹田月海といふ醫者の隨筆中に「永正九年人民多く瘡あり浸淫瘡に似たり云々」とあり。永正九年は一五一二年で、支那弘治の末年が一四九六年だから、此間十六年を經て日本に傳はつたわけである。永正十年甲州の妙法寺の記錄に「此年天下にタウモといふ大なる瘡出で云々」とあり。京都から甲州へ傳染するに交通不便の當時一年かゝるは當然ならんか。（醫學博士富士川游氏流行病「聖德紀要」參照）兎に角右樣の次第で性慾は私達人間の最も耐忍に困難の中の一であるから、同じ人間である、教育者や宗教家の戀愛的性慾關係を強ひて咎めるのは酷であるかと思ふ。が併しその如くに盲目的に、高調するものであるから、私達は出來るだけの修養と耐忍と努力とを以て之を抑壓しなければならぬのである。若し其欲する儘に放任せんか、それこそ百鬼夜行の禽獸世界の醜態を曝露して、遂に家庭を破り、社會を毒し、國家を亡すに至るや必せりである。米國の如き、極端に自由の國、否寧ろ放縱といふが適當かも知れん位な國であつても、戀愛表情は公衆風俗に反するものとして、費府のトーマス

といふ判事は大道や公園に於ける戀愛表情に關し左の如き罰金制を定めた。（大正八年十月十二日新聞）

一、片手で婦人を抱く場合　罰金　五　弗（我　十　圓）

二、兩手で腰を抱く場合　同　十　弗（同二十圓）

三、頰を接吻する場合　同二十五弗（同五十圓）

四、口と口との接吻の場合　同五　十　弗（同　百　圓）

五、接吻と抱擁の場合　同七十五弗（同百五十圓）

これは當時米國に於て、例の人間萬事金の世の中といふ算盤勘定の僻から、戀愛表情を金につもつたらば、幾何の價値があるであらうなどいふことが、各社會に喋々されてゐた時であつたから、其突飛的物好（ものずき）の衆俗に投ずる一時的の惡戯半分から出たことかも知れんけれども、兎に角公衆の風俗に反するといふ所から定められた、罰則なるに於て、面白味と權威とがあると思ふのである。尤もこの罰則は見樣によつては、男女何れが罰金を出すのか、或は兩方から出すのか、一寸明瞭を缺いてゐる樣ではあるが、一、二によつて判斷すれば男を罰する罰則たること明かであるやうであるから、結局この法の精神は女尊男卑の習俗から出た罰則とも見られるのである。蓋しそれか事實であらう。かねて米國は女權の盛んな國であることは何人も知つてゐるが、其盛んさが我々日本人からは迚も想像の出來ない事があるのである。內務省の田子社會局長の話によれば日本では梅毒は男子にあるが、あちらでは婦人に多いので、兵士でも妻あるものは、休日にも家に歸さぬさうだ。何故かといへば妻裙から梅毒を感染する虞があるからだといふことである。これは一般婦人は勿論、人の妻でも、恰も日本の男子の如く、我儘不品行を敢てしてゐることを證明するものであらう。彼の禁酒法案が議會を通過したのも、議員にしてこの法案に贊成しないと家に歸つて妻裙に叱られるから、心にもない贊成を表したのだといふことである。正かさうでもあるまいが、併しさういふ議員も確かにあつたに相違あるまい。ところ變れば品かはるで、面白いものである。品かはるといへば、米國には、まだ面白い事がある。可なり古い事で、即ち大正五年十二月の新聞通信であるが、オレゴン州のアマチラ市では十二月二十四日選擧の結果、市長、收入役、市會議員五名全部婦人が當選し、市長に當選したスターチー夫人の良人は當時の市長で、此選擧に夫人と競爭して敗北したので、流石の米國でも空前の事として喧傳されたといふことである。夫婦が互に市長の候補に立つて競爭するなんとは、突飛も突飛だが、私達日本人から見れ

ば馬鹿々々しいも程があるといひたくなる。右の如く一般民衆が突飛な、滑稽な、さうして没常識なことを行るばかりでなく、裁判官などが仲々、思ひ切つた突拍子の裁判をやつてゐる。これは遂この頃の事であるが、桑港市のエドワード、ワレースといふ職工が、市内のアイスクリム屋で、大聲で唱歌を唄ひ、治安妨害犯として拘引せられた所、判事ラザルスは、其唱歌が若し立派ならば、治安妨害にならぬといふ理由で、法廷に於て唄はせることにした所、ワレースは美聲を張り上げ目下流行のベッキー、オニール歌を節面白く唄つたので判事も傍聽者も悉く悦に入り却つて拍手されて、無罪になつたといふことである。我國の昔各藩の關所を通る時に藝人は、藝を演じて通つたといふ話しがあるが、それが今米國の法廷に行はれてゐるといふわけである。又オークランド市の金屬商の某なるもの妻との離婚に際し、同棲中妻を三十回毆打した其料として三千弗の支拂を裁判長から命ぜられたといふことである。拳固一個が百弗とは隨分高價のものである。何れも日本では一寸見られぬ裁判である。尤も大正七年米騒動の時、面白半分に彌次馬に乘り「ヤレ〳〵」と二聲どなつた爲に罰金二十圓、五聲叫んだので五十圓に處せられたものがあつたさうで、一聲十圓づゝなので、是れも餘り廉からざるものであつたと、當時の新聞の餘滴欄だかにあつた。

大變話が岐路へそれだが、兎に角米國でさへ、公衆風俗に反すとて戀愛の表情を法律を以て禁じてあるといふに、近時我國はどうであらう。淫佚の風は滔々として上下を靡かし、奢侈の俗は淫々として都鄙を溺らすともいふべき狀態ではないか。今日の所謂新人と稱ふ人達は、戀愛は純眞だ、神聖だ、自由だなどゝ、飛んでもない熱を吹いて、糟糠の妻を捨てゝ、情婦と道行を極めたり、或は貞淑なるべき妻の身を以て、良人をすて、子をすて、情人に趨るなど、實に言語道斷の至りである。然るに世間の馬鹿者がそれに共鳴して、やれ純眞の戀愛に活きるの、永遠に自由の戀に貢献するのと、はやしたてゝゐるのである。戀愛も、私達人間の我慾の一つであつて、而も最も有力の我慾である。最劣情の性的我慾である。この我慾が若し純眞であり、自由でなければならぬものならば、金が欲しい爲に强盗をしても、人殺しをしても、純眞であり、自由であるとして許さねばならぬではないか。天下何ものか、斯の如き馬鹿げた、没道理の事があるべきであらう。若しも戀愛は他の我慾とは全然其性質を異にしてゐるもので、全く神聖であり、純眞であり、自由であつて、須磨子が抱月に殉したのも、梅子が隈畔と情死したのも、皆永遠の愛に生き

たのであるなどいふならば、馬鹿も休み〳〵いへといひたくなる。梅子は限畔が、限畔の妻子の專有になるのを嫉妬んだ結果であるし、須磨子は享樂の相手がなくなつて淋しくなつたからで、共に純眞でも、神聖でもなんでもないのである。或は曰く、須磨子にして果して然ういふこゝであつたなら、別に享樂の相手を求めたらよいでないかといふものもあらうが、そこが彼の虚榮心のある所で、彼も女優として相當の地位に立てられてゐるのであるから、世間の手前、さう娼婦的の眞似も出來ないではないか。彼はつまり女優としての須磨子を幾分生かして、以て抱月を捕にした罪を若干たりとも償はうとしたに過ぎないのであらう。一體今日の日本人に、戀愛ばかりでない、總ての事柄に對して、純眞だの、神聖だのといふ、尊い精神の持主は殆どないといふても差支へなからうと思はれる。口でのみ純眞だの、神聖だのというてゐるけれども、それは先づ自己の良心への言譯、次は世間の耳目を晦さうとする鄙劣の手段なのである。男も女も共に〳〵劣情なる肉的享樂と、物的我慾とを滿足せしめん爲に、戀愛を、もてあそんでゐるのである。今日では人に忘れられたが、東大の某教授は學生時代に學費を供給せられた妻を捨て、北海道の農大の某教授は秋田から貰うた、持參金付の妻を欺して離緣してゐる。これは男も無論薄情であるが、女及女の父母も悪いのである。大學生といふ所から將來の榮達を夢みて、學費を出したり、莫大の持參金を出したりしたので、眞に其人を愛したのでもなんでもなく、大學といふ名稱を愛したのである。男も亦眞に女其人を愛したのでなく金を愛したのであつた。それでも最初は純眞の戀愛だなどゝいうて互に握手もし、接吻もしたであらう。斯ういふ考への男女が夫婦になれば、年を經るに從つて、各々別方面に向つて、所謂純眞の戀愛を漁るに相違ないのである。というて、私は戀愛、性慾を否定するものでも、排斥するものでも、憎惡するものでも、何んでもないのである。人間に性慾なく、戀愛なければ、木偶と等しく、何等の情味もなく、雅趣もなく、隨つて何等の用もなさないものである。只其戀愛は眞から純眞に、其性慾は眞から神聖にありたいのである。一夫一婦、男貞婦操、以て陰陽相和する所に純眞の戀愛が成立するのである。この純眞なる戀愛を以て、閨房嚴肅、神聖なるに於て、始めて我精神、我血液を永遠に子孫に傳へることが出來るのである。ところがこんな四角四面の考の出るころは、大抵幾人かの親となつてゐる時で、折角の妙案も六日の菖蒲、十日の菊たる恨を遺すのであるから、青年血氣の男女は緊褌一番、大に考慮して欲しいのだ。ヨハン、ゴットリブ、フィヒテは大學卒業後一時田舍の家庭教師となつ

てゐたが、更に學問の研究を志して愈々都へ上らんとした時、彼と相思の中であつた、ヨハンナ、アリア、ラーンといふ女は、彼フィヒテの貧乏を知つてたので、若干の金を贈らうとしたところ、彼は斷然之を謝絶して、折角心を罩めた戀人の好意を顧みないで、都に上り、多年螢雪の苦學を積み、大哲學者となり、衣食に事缺かぬやうになつて、芽出度戀人と結婚したといふことである。斯の如きことこそ實に純眞の戀、神聖の愛といふべきである。又獨逸のゲー、エフ、ニコライ博士は、まだ五十に充たぬ學者で大學の教授であるが、氏は獨逸の軍國主義に初めより反對し、大戰の初めに、獨軍が白耳義の中立を破つた時、公然と抗爭した。其爲めに、氏は其地位を奪はれ、財産は全部没收せられ、全く無一物となつてしまつた。氏の妻は海軍將官ブスレイの娘であつて夫婦の間には一人の女子があつた。妻の父は彼女が夫を捨てるならば、一生母子が安樂に生活し得るべく取斗つてやるというた。然るに、彼女は斷然これを拒絶し、良人を見捨てる位ならば、寧ろ道路の掃除人夫となつても、雜役女となつても、自分と子供とのパンは得られると答へたといふことである。何んといふ美しい心掛であらう。純眞の戀、神聖の愛より成立つた眞の夫婦の果實はこれである。我國でも昔は右のフィヒテ夫婦、ニコライ夫婦に劣らぬ、純眞美の男女が尠くなかつたのであるが、今日は迚も話しにならぬ。本年二、三月頃の新聞だかに、黒龍會の調査によれば、妻より夫に離縁狀を突き付けてあるものが、二百六十何人あつたといふ事である。白蓮も其一人であつたらう。これは女が如何にも、お轉婆的我儘から出たのであるやうに見えるけれども、其半面には男にも相當の罪があるのであらうと思ふ。詰り男が無闇に純眞の愛を他方面に捧げるから女の方でも負けてゐないで、神聖の戀を他方面に求めやうとしたのであらう。當世新人夫婦の家庭を穿ち得て妙なりといふ俗謠がある。

宿の寢顔をつく〳〵ながめ、主の月給はいつ昇る

といふのである。良人たるもの玆に至つて呆然として爲す所を知らずといふわけ。だが苟も良人たるもの、將た男子たるもの、之に對し一句反報なかるべからず曰く、

妻の寢顔をつく〳〵ながめ、斯くも婆樣になるものか

斯ういふ夫婦が其初めは純眞の戀、神聖の愛と騷いで、親の意見も、友の忠告も、無視して、成立した夫婦なのである。以て當世的戀愛の眞相を知るべきである。然るに何ぞや、近時性の教育などというて、馬鹿に半可通の新人連が騷ぎまわつてゐるが、笑止千萬の至りである。性問題な

どは教ふべきものでない。これは荀子の所謂、生れながらにして知るもの、待つことなくして然るものである。教へなくとも適當の時期に於て理解すべく、先天的に備はつてゐるものである。矢張性は飽迄神秘的なる所に尊い所があるのである。新人は曰く性を教へて性の墮落を防ぐなりと。それが即ち半可通といふものである。例へば子供が父母若くは先生に、私はどうして生れましたかと問うた時、之に具體的に開放的にさうして徹底的に、どういふ風に教へるか。如何に新人といへども、出來ない相談であらう。凡何事も教へるといふ以上は、徹底的でなければならぬ。抽象的や半解的曖昧では兒童は承知するものでない。今日性の問題について、隔靴搔痒的乃至は言外に了解を求むる的の、教へ方をして御覽、それこそ性的墮落を早めるもとである。

七　支那人と我欲

附　歐洲の賣妻、淫樂の研究と纏足

以上私は私達の本能的我慾の各要素に渉つて稍詳細に論議を重ねたのである。然うしてそれは全く私達日本人の實際について事實を述べたのであるが、更に私は隣國支那と比較對照して見て、私達日本人が上來述べた如き、可なり深刻に、我慾に沒頭してゐることを反省したいと思ふのである。昔から私達は、人間の我慾、就中拜金慾、性慾等は支那人が標本であると信じてゐたのである。實は今もさう信じてゐるのである。實際支那人は金の爲には、自己の生命さへも惜しまぬので、現に日清日露の戰爭の時、砲彈の下を潜つて、戰死傷者の兵士の懷中を漁つて金品を奪つたのは彼等であつたのが何よりの實例である。だから忠孝も愛國も、道德も、戰爭も、扨ては妻子、奴僕、子女も總て金を以て賣買するのである。例へば戰爭の時、敵味方の兵士が互に相談して、明日何時に當方から攻擊するから、君の方では空銃二、三發擊つたら、時を計つて銃を捨て、逃げる事、其代りこの價金何百元なら、チャンと約束が出來るのである。だから戰鬪報告などに激戰數時間、死傷算なしなど、誇大の報告をしてゐるが、其實皆嘘なのである。日清戰爭の際、彼等支那人が一生懸命で日本軍の御用を勤めてゐたに徵しても、其心事を知ることが出來る。北方滿洲人はさうでも南方の漢人はそんなことはないといふかも知れんが、南方人も同じことだ。一八五六年のアロウ號事件で英佛聯合軍が一八五七年十二月廣東城を攻擊し、城將葉名琛を捕にした時の戰爭にも、彼等支那人は聯合軍の軍役夫となつて、砲火の裡に彈藥運搬をして、

犬馬の勞に服してゐたのである。土臺彼等の眼中には國家もなければ、順逆もないので、只眼中金あるのみである。從つて國が中華であらうが淸であらうが、將又敵であらうが、味方であらうが、彼等には無關心であるのだ。尤も國民が或主義の爲に、理想の爲に、意識的に、祖國に背いた例は歐羅巴にいくらもあつて、例へば、宗敎的改革時代にスイスの舊敎徒、フランスの新敎徒等が各自國に向つて戰かつた如きそれである。希臘にも羅馬にも佛蘭西にも事例は澤山ある。元來歐羅巴人の愛國心は個人主義に立脚したものであるから、自己の利益的理想が、國家の權威を以て實現せらるゝことを確信した時に限り國家の爲に働くけれども、國家が自己の理想に應じてくれない時は、不得止其理想の爲に祖國と戰ふといふことになるのである。斯ういふ個人主義的利己の點に於て支那人も同一徹であるが、只支那人には理想の爲に主義の爲に立つといふ樣の意氣がなく、只無意識に金の爲に盲從するといふ所に多少の相違を見るのである。又兒女、妻妾の賣買は天津、上海、湖南、四川、廣東地方には盛んに行はれてゐるのである。つまり金にさへなれば、親子の愛も夫婦の情もないのである。尤も歐洲に於ても最近まで賣妻の風はあつた。殊に英國に於て最も盛んに行はれたのである。英國では良人が不用になつた妻を公に衆人の前に曝して何人にても來り購ふに任したのである。此風習を英のアングロサクソン王は禁ぜんとしたけれども及ばなかつたといふことである。十八世紀末から十九世紀初にも尙行はれ、二十世紀の初めにも尙あつたといふことである。其價は二十五ギニーから一ペニー位まであるが、甚しきは一度の食事又は一瓶の酒と交換せられ、賣買成立すれば男は互に握手して別れ、新夫婦は連れ立つて敎會に至り式を擧げるといふことである。（野上文學博士　英國に於ける婦人運動）私達日本人が聞くとビックリすることであるが、併し今日の新人は、敢てやり兼ねまいと思ふ。現に實行してゐるといふても然るべきやうの事實はいくらもあるかと思ふ。支那人は妻を公然賣買するといふことはどうだかよく私は知らんが、女の子は慥かに賣買するのである。甚しきは茄子か南瓜を賣るやうに、籠に入れて町を賣つてあるくといふことである。これも拜金思想から來たのであらう。然るに支那人は斯の如く非道までして、金を溜めてどうするかといへば、大抵淫樂の爲に消費して仕舞うのである。一體支那人はこの點に於ては餘程研究が富んでゐるやうに思はれる。例をいへば婦人の纏足である。あれは、蓮步といふて婦人の步く姿の優雅といふか、嬌態といふか、兎に角淫樂的の風姿を取る步調で、孔平仲の詩に

雲鬢應節低、蓮步隨歌轉

といふのがある。其步調を取らしむるに纏足が必要であるといふのである。又或は婦人の姦通を防禦する爲だとも言傳へてゐる。もう一說は頗る振つてゐる。それは纏足して終始步行してゐれば、生理上から筋肉の力が、或部分に集中するから○が○○になつても○○が○○してゐるからといふのである。恐らくはこれが事實でないかと思はれる。何れにしても研究が頗る徹底的であることに感心するのである。

右樣の次第にて人間の本能的我欲、就中拜金欲、性欲の徹底的なるに於て支那は正しく天下に冠たるものであることは事實である。

八　止むを得ざる事情

然るに、支那人の斯の如く我欲の標本であるといはれるまでに、徹底的に訓練されるの止を得ざるに至つたには、頗る同情すべき事由の因て存するものであることを考へてやらなければならん。それはどういふことであるかといふに、先づ第一は終始革命が起つて、戰爭の絕え間がなく人民は常に生活の安定を得ないといふことである。そこで彼等は何時戰爭が始まつて國が亡びても金さへあれば、何處にても往かれるといふことから金を溜めるに道を選ばぬのである。第二は貧富の差が甚しく、富者が金を以て女子を買占めして仕舞ふから、貧者又は奴隸等は一生妻を持つことが出來ない。そこで何んでも金を溜めて妻を買ふか、然らざれば賣笑婦を漁るといふことになるのである。第三は生來の懶怠の風が原因してゐるのである。この風習も前の二者から自然の結果として傳統的に馴致したのである。だから彼等は勞せずして金を得るべく、盛んに賭博を行ゐるのである。親子、兄弟、夫婦から、親類緣者までが、寄つてたかつて終日終夜、賭博に耽つてゐるのである。又母親が、子供に乞食することを奬勵してゐるのも其の爲である。要するに右の三原因は傳統的に支那人に惡性格を植付けることゝなつたのである。素より國家の組織が、不完全であり、建國の由來が惡いためであることは勿論である。

以上の如く支那の狀態を親しく研究して、却說我國の現在はどうであるか。物欲の點に於て、嫉妬の點に於て殘忍の點に於て性欲の點に於て、前に迷べた事實に徵して見て、どうであらう。寧ろ彼よりも徹底的であるではあるまいか、深刻であるではあるまいか。しかも支那の如く、直

接に止むを得ざる事情の存するもの一つもないばかりでなく、國家の組織に於て建國の由來に於て、世界に類例なき立派のものを有し、何等の不安も、何等の危惧も感ずべき素質を持たないではないか。私達日本人は、こゝに大に反省しなければならぬと思ふ。

第二章　本心の光明

九　懺悔反省

ところで、上來述べ去り說き來つた、私達の本能的我欲は、果して私達の心の全部であつて、到底反省の餘地のないものであらうか、どうか。假りに心の全部であつて、反省の餘地がないものとして、私達は果して之に滿足を表し快感を覺えてゐるであらうか、どうか。瘋癲白痴若くは特殊の野獸性を有するものならば格別、苟も普通の人間である限りは、必ずや我ながら心の淺猿しさ、醜さに泣くであらうと思ふ。果して然らば其淺猿しさ、醜しさに泣くのは、一體何ものであるか、何ものでもない矢つ張り私達の心なのである。己の心から出て爲たことを同じ己の心が悔んで泣くといふは、頗るの矛盾で、理窟に合はぬことの樣ではあるが、しかし全く事實である。

若し嘘とおもふならば、試に淸夜人沈つて中空一朶の雲なく、冷かに冴え渡れる月の光に對坐して瞑目靜坐徐かに、我心を省みて見よ。本能的我欲の爲めにのみ、汲々として焦り來れる過去を追懷した時、私達は心から悔恨の涙に咽ぶてはないか。それまでゞなくとも、何となく寢覺めが惡く感ずるではないか。それに反して、たゞへ僅の事柄でも過去現在に於て、精神的に道德的に利他的に奉仕したことを自信したとき、私達は非常に快感を覺ゆるではないか。吉田松陰氏が、死に臨み、從容として

我今爲國死、死不背君親、悠々天地事、感賞在明神。

とうたはれたのも、大石良雄が宿望を果した時

身はすてつ思ひははてつ望月の、心にかゝる浮雲もなし

と高吟せられたのも、共に光風霽月的快感に堪へざる心の流露でなくて何んであらう。これに反し、平淸盛、北條義時等が、死に瀕して、煩悶懊惱殆ごなす所を知らず、狂ひに狂ひて狂ひ死にしたが如きは、矢張心の呵責でなくて何んであらう。

一〇　靈妙なる心の活き

斯く論じ詰めて來た時に、私は私達人間の心なるものゝ如何にも不可思議にして、且靈妙なるものであることを考へざるを得ないのである。誠に思へば、圓にもあらず、方にもあらず、白にもあらず、赤にもあらず、而も靈妙不可思議なるは事實である。和歌に

心にも及ばぬものはなにあると、心にとへば心なりけり

西鶴に

奇しきは海、海よりも奇しきは空、空よりも奇しきは人の心なり

又

心は不可解なり、不可思議なり、不可思議なるが故にないかといへば、
其無いといふもの即ち心なり

というてある。支那の天台大師は

適々これありといはむとすれば形質なし、有無を以て仕度すべからず、
故に心を名けて妙となす

といはれたさうであるが妙とは實に妙である。妙とは「若き女のもつれ髪結ふ(言)にゆはれず、解くにとかれず」で全く言ふことも、解釋することも出來ない所に妙の妙味があるのである。それが心なのである。されば佛教には一念三千の教義というて、ハット思ふ刹那にも三千の相を具すといふのである。天台の止觀に、

この三千一念の心あり、若し心なくば已みなん、介爾も心あれば即ち三千を具す

といふのがそれである(瑞雲)故人高木兼寛氏は心はコロ〳〵で終始コロ〳〵と轉げてゐるのであると說明してゐる。高木流の解釋として相應しいと思ふ。それは兎に角として。成程私達の心は正に不可思議、不可解のものたるには相違ない。其不可思議を靈といへば大層聳いが。惡くいへば曖昧ともいはれる。高木氏の說明の當否は知らんが、併し私達の心が終始コロ〳〵と轉げて、捕捉しにくい所のあるは事實だ。或は又瓢簞鯰の樣にヌラリ、クラリ、キロリ、シャラリと不得要領の所もある。當世的才子は、これに屬するのであらう。もし斯樣のものであれば私達の心なるものは一向詰らんもので、何等の價値もないもの、樣に思はれるが、そんな筈はあるべきでな

いと思ふ。假りにもせよ、嘘にもせよ、昔から萬物の靈長といはれてゐる私達人間の心は其作用は色々に、變化するならむも、其本心には必ずや一定不變の本性を具してゐるものと信じて疑はぬのである。

一一　心の重心即眞心

氷山が漂流する時、其かたち、すがたには、或は斜に或は横に縱に直に、或は圓丘の如くに、或は岩山の如くに、或は大に或は小に種々樣々あるであらう。併しだ、其すがたかたちの如何にかかはらず、必ず重心がなけらねばならぬ。恰もこの如くに、私達の心の氷山にも、必ずこの重心があるのである。其重心が私達の眞の眞なる、純の純なる本心の本性なのである。これを眞心といふのである。良心といふのである。この眞心こそ永久に亘つて死せざる心の靈である。佐藤一齋翁曰く

夢中の我も我なり、醒後の我も我なり其夢我たると醒我なりとを知るものは心の靈なり、靈は即ち眞我なり、眞我は自ら知り醒睡に間なく常靈常覺萬古に亘りて死せざるものなりさ。この言の如く夢我と醒我とを知るもの心である如く、善と惡とを知るもの亦心であるのである。氷山の全體が、重心によつて動く如く、私達の全心全身も亦この心の重心たる眞心によつて活動しなければならぬのである。この眞心をしつかり捕へて、始めて私達の本能的我欲の心は、私達の心の全部でないは無論一部分でもない事が明確に判るのである。これは眞心の外皮に附着したる汚塵であるのである。何ミなれば私達がこの天地に向つて第一聲の產聲を放つた時の刹那には、何等の我欲もなかつたからである。それが長ずるに從つて環境の感化により、何時とはなしに、眞心の外皮に汚塵が附着したのである。これを汚心といふのである。されば私達は先づ何よりも、この汚心を排除して重心たる眞心の光明を見出さなければならぬ。この眞心こそ、即ち宇宙の本體たる神の分心なのである。私達はこの眞心の光明を以て、全心全身を照徹して始めて人間としての全人格を認めらるゝのである。然るに私達は、本能的我欲の汚心の爲に、重心たる本性の眞心を覆はれて、其光明を遮ぎられてゐるのである。皮肉にいへば自分の所持してゐる、天下無類の寶物を知らむでゐるので笑止千萬の至りである。負うた子を探ねたと同一徹である。

自性迷即是衆生、自性覺即佛

といふ、禪宗の教へも、この道理を悟れといふのであらう。ところが私達は中々其自性を覺れないのである。假へ一旦は迷うても覺醒すればよいのであるが、易に

先迷失レ道、後順得レ常

と教へてある。又素書に

迷而不レ返者迷

といふ如く、迷うて覺醒しなけば終に濟度の道がないといふのである。私達が私達の心の奥の奥の底の底にある重心、即ち眞の眞なる純の純なる眞心を見出した時、一言にいへば本性自性を覺つた時、更にいへば迷より覺めた時は、胸中高明洒落無上の快感を覺ゆるであらう。ところで只自性を覺つたゞけでは、いまだしで、更に一歩を進めて汚心を征服しなければならぬ。所謂已に門に達したならば、更に堂に昇らなければ何んにもならぬ。そこで私達は此處しばらくは、汚心の征服戰を演じなければならぬ。勝敗果して何れに歸するか、蓋し中々の苦戰であらう。即ち私達は非常の決心と努力とを以て、修養に修養を重ねてかゝらねばならぬ。というて何も萬卷の書を讀まなければ出來ないものでもないし、樹下石上に難行苦行しなければならぬものでもない。

假令目に一丁字ない人でも、又何等の難行苦行をしたことのないもんでも、僅かに己の心掛一つで隨分純眞心の勝利者となつたものは、いくらもあるのである。彼の赤穗義士の快舉は、百世の下世道人心を照らす光明となつたのであるが、其裏面には、名もなき足輕仲間小者扨ては孱弱い婦女子までが、人知れず純眞心を發揮して、義士の人々を激勵し援助した、潜んだ力の偉大なるものがあつたのである。例へば死を以て吾子を勵した母あり、辛慘苦節を嘗めて良人を援けた妻あり、金鐵の義心を以て主人をして後顧の憂なからしめた忠僕あり、數へ來れば一として純眞心の發揮でないものはない。私は表に立つた義士の誠忠にも無論泣くが、裏に潜んだこれ等の人の苦衷には、より以上に泣されるのである。私達は何人も純眞の心を持てゐるのであるから、事により物にふれ一寸とした事でも純眞心の發露を見たり、聞いたりすれば、必ず共鳴するのである。この共鳴が涙となるのである。それはこの純眞心即至誠か思想や理性を超越した絶對の力であるからである。

誠者天道也、思誠者人道也、至誠而不動未有之也

或は

眞者精誠之至也、不レ精不レ誠。不レ能レ動レ人

といふもの即それである。（前編一〇一頁參照）現在私達が、芝居を見たり、講談を聽いたり、又は新聞記事等を見て、一寸した事に、人知れず、泣く場合がいくらもあるのは、みんなこの至誠の發露に外ならぬのである。私はこの頃東京で、協調會の活動寫眞で「人の心」といふのを見たが、彼の加藤といふ職工長が、工場主の若主人に懸賞飛行に成功せしむべく平素の主人の恩に報ゆるは此秋であるとて（此時主人は非常の悲境に陷つてゐた）無給料で晝夜兼行の奮闘を續けてゐたのである。其至誠に彼の妻が感孚して、女にとつては命よりも大切だといふ衣類を賣つて部下の職工に給料の幾分を拂ふ資にしてくれと、簞笥の引出を引出した其刹那に私は、彼女の純眞の誠に泣かされたのであつた。

鬼神も泣かするものは世の中の、人の心の誠なりけり

と明治大帝の仰せられたとほりである。有情の人が有情の人の至誠に泣くのは當然で、昔は無心の草木でさへ人の誠に泣いたといふことである。今より約四百年前即後奈良帝の御宇、三條西實隆卿（遙遙院内府）は近江の唐崎松がすでに枯れんとした時に

唐崎の名をもおもはゞこの松の、ふたゝび青きみどりともかな

と詠まれたれば忽ち緑の色をなして、よみかへつたといふことである。然るに昨大正十年に至りさしも名木たりし松も命數つきたと見え遂に枯れてしまつた。今人には昔の如き歌聖がなかつたと見える。（歌道）（滋賀縣神職會では此松の靈祭を行つた筈である）。

又彼の承久の役に、逆臣義時の爲に、佐渡が島へ御遷幸遊ばされたる、順德院は萬乘の御身を以て絶海の孤島に悶々の御聖情を忍ばせ給ふ折柄、杜鵑の啼音を聞召され

啼けば聞くきけば都の戀しきに、此里すきよ山ほとゝぎす

と御製遊ばされたれば、それから杜鵑は啼なかつたといふことである。かく無心の松、無情の鳥でさへも、至誠には感激するではないか、況んや有情有心の人に於てをや。それは兎に角として斯ういふ感激の涙は、我に之に共鳴すべき純眞の至誠が同じく存在してゐるからである。酒を好きな人が、酒屋の前に至れば直に酒氣に共鳴して鼻を蠢かすと同じことである。延元元年五月廿五日（五八七年前）楠正成公、滿腔の經倫空しく用ゆるの機なく時艱にして策施すに足らず、一族の精英を盡して三路の敵に當りて戰死し、七生報國の丹心永く青史を飾つた。時に公年四十二歳。

尊氏元と楠氏と恩怨がない。公の戰死を知り、其苦衷に同情し熱涙を揮つて忠烈難に殉したるを悲み、特に人を遣して、その遺物と與に首級を千早城に送らしめたといふことである。惡逆無道の尊氏も尙一片本心の光明は心の底に光かてゐたのであつた。黑住忠宗氏の歌にも

神といひ佛といふも世の中の、誠の中にすめる生もの

といふがある。味ふべき歌である。

一二　純眞心の勝利

すなはち、純眞心の勝利者たるものは、必しも萬卷の書を讀破した學者でなくとも、難行苦行を重ねた名僧でなくとも、乃至高官の貴人でなくとも、金持でなくとも、何人でも、僅に心の持方によつて出來ることであることが判るではないか。ところが一時の勝利者ではいけない、一瞬間の感激てはいけない。永遠の勝利者でなければならぬ。別言すれば、徹底的に汚心を征服し、再び起つ能はざらしめたのでなければならぬ。斯うなつてくれば、私達の一擧一動一思一念が、總て公明正大眞に天地に伏仰して愧ぢざるものとなるのである。而して今まで、嫌だと思ひ不快と考へ、不平で堪へなかつた事柄が反對に、面白く、樂しく、愉快になつてくるのである。例へば今までは、他を利するの、人を愛するのといふことは嫌であつたが、それが今度は面白くなつて來る、今までは、親に孝行なんて窮窟な、さうして、うるさいと思うてゐたのが、今度は却て樂しくなつて來る、今まで君に忠を盡すなんて、馬鹿々々しいと考へて、私かに不平であつたのが、今度は非常に愉快を感じて來るといふやうに變つて來る。就中最も顯著なるものは、目に見えない、神明に對して　非常に熱烈なる崇敬の誠を致すやうになつて來るのである。實にや

目に見えぬ神にむかひてはぢざるは、人の心の誠なりけり

と仰せられたる、先帝の御製は、千古不磨の眞理であると拜すべきである。

斯く私達が神明に對し奉りて、崇敬の誠を致し、其廣大無邊の神恩を感謝するに於て、私達の純眞の至誠は、いやが上に洗練せられて、益々光明を發揮するわけである。つまり崇高なる神明の靈氣は、露妙なる私達の心に感應して、神人一體、顯幽融合の妙境を出現するのである。近江聖人の歌に

皆人のまゐる社は月なれや、心のすまは神や宿らむ

といふのがあるが、神人至誠感應の妙諦を歌つたものである。この歌は熊澤蕃山が、まだ佐七郎というてゐた時代に

皆人のまゐる社に神はなし、心の底に神やますらむ

といふ歌を詠んだのに對して、與へられた歌であつたのである。流石は近江聖人といはれるだけに異つたものだと轉た感佩に堪へない次第である。そこで、若し私達の心に、未だ眞に敬神の誠が湧出しなければ、換言すれば誠心誠意神明の存在を認めることが出來なければ、いくら口で自性を覺つたの、本心を見出したのというても、それは皆んな嘘である。反言していへば、未だ本當に本能的の我欲なる汚心を征服したものでないのである。隨つて、忠孝又は利他愛他等の道德を衷心から愉快に樂しく、面白く、實踐するといふ意氣がないものであることが判るのである。故に私達が人間としての人格を完うする第一歩、萬物の靈長たる實を擧ぐる第一歩は、敬神の誠を致すこと、それである。抑々私達の汚心に本能的我欲がある如く、私達の眞心には精神的我欲がある。本能的我欲の對象に、物欲、性慾、名譽欲等種々ある如く、精神的我欲の對象には敬神、忠君、愛國、至孝、同胞相愛等の諸道德がある。而して本能的我欲の主欲は人によつて之を異にするであらう。例へば食欲を主とするもの、性慾を主とするものといふやうに。しかし、精神的我慾の主欲は敬神欲にして、これは萬人共通の欲望である。何となれば、この敬神の至誠から、人間としての諸道德が胚胎するものであるからである。

斯く論擧し來れば、現代のすさり行く、人心を救濟するは、一に神祇の崇敬に目覺めしむべく聲鐘を鳴らすより外ないと思ふ。

私はこれから百尺竿頭更に數歩を進め、日本の神祇と宗教との關係及現代の教育と神社との關係等について詳論し、以て本講の意義を一層徹底したいのであるけれども、其邊の所は前編に詳しく說いておいたから、本講はこれで終りとし、尙其足らざる所は、別の講に讓ることにする。

二、我慾と生命

第一章　我欲の根本

一　理想と現實

抑々私達人間が世に處するに方り高尚なる思想と健實なる信念とを以て、精神的に靈的に意義ある生活を營まうといふことは萬人共通の理想であらうと思ふ。然るに理想は矢張理想であつて多くの場合容易に實現し得ないものであり實行し難いものである。若しも私達人間にしてこの理想の境内に入るものありとすれば、それは神とし聖として敬すべきものである。勿論私達も譬へ理想境には達し得ないとしても、責めては一歩でも此理想境に近づき度いとは常に考へてゐるのであるけれども、悲しい哉現實の慾望に遮られて進むことが出來ないのを淺ましく思ふのである。

大正十一年五月　日

二　生命欲

一體私達人間の本當に僞らない、本當に飾りのない慾望は何であらうか。近時流行の精神分析學（サイコアナリシス）では人間の慾望を食欲、性慾、安欲の三部類に分ちベルグソンの根本要求も即ち是であるとし、さうしてフロイド一派では性慾を以て根本的のものとしてゐる。併し之はあまり偏狹に過ぐるから一層これ等の欲求を綜合して「我欲（エゴ）」と呼ぶのがよからうと或人はいうてゐる。至極尤もであると思ふ。がしかし兎に角其根本は何んであるかを强ひて考へて見れば、私は生命欲であると思ふ。尤もこの生と性と食との慾は何れが先、何れが後か又は何れが重く、何れが輕いといふ樣に判然と決定することは出來ないばかりでなく性慾と食欲とを擅にしたい爲に生を要求せるものであるともいはれるのである。けれども人間ばかりでなく禽獸昆蟲に至るまで生、食、性の中何れに最も執着するかといへば生欲であることは彼等が先天的に生命を保護すべき即ち攻防に關する種々の作用を具備してゐるのを見ても知ることが出來ると思ふ。例へば鳥賊は黑汁を吐いて身を隱し、アメリカのスカンクといふ動物は臭氣を放つて逃げるさうで、辨

當の中まで臭くなるといふことである。又甲羅種の龜だの臺灣に居る穿山甲などは甲羅で、針モンガーや山荒しなどは栗のイガ樣の物で何れも敵を防ぐの武器としてゐるといふ。蜘蛛類は樹木に穴居し、木葉蝶だのアメリカのカメレオンだのは自然色を以て共に護身としてゐるといふことである。以上は消極的防禦の方であるが、積極的攻擊の方もある。獅子や虎や熊は勿論であるがアフリカには人馬を一所に締殺す蛇がゐるといふ。さうかと思ふと他の動物を威嚇して身の安全を計るのもある。蟹なども其一つで、大きな鋏を擧げて近けづば挾み切るぞといふ威風を示してゐる。朝鮮には腹赤蛙といふて、赤い腹を出して脅かすのださうである。アメリカに眼鏡蛇といふがあつて、頭の後に黑い斑文が二つあり頭をフクラスと大眼玉のやうになるので、他の動物が之を見て驚き逃げるのださうである。これ等は皆彼等の生命を保護するために神が特に附與した武器並に戰術であるのであらう。私達人間も學者の研究によれば原始時代の人間には尻尾もあり耳も動いたものださうである。今現に私達の體に其跡が遺つてゐるといふことである。某齒科醫の發表に從へば今より四十萬年前の人間の齒は四十八本あつたさうである。今でもアフリカの土人には三十六本ある種族があるといふことである。これ等も原始時代に、攻防作戰上必要の武器であつたことは勿論である。然るに私達人間には神より智恵といふものを附與されてあるから、之を以て攻防作戰上種々の武器を發明し敢て尻尾や齒を用ゐるの要を認めないので、自然淘汰の結果無くなつたのであらう。尤も今日でも親の脛を嚙じつたり、砂礫をかむだりする人もあるけれどもそれは例外である。要するに皆これ生命の安全を期する作用であつたのである。如何に生物が生に執着する念の熾烈であるかといふことが知られるではないか。

古歌に

うつせみの命ををしみ波にぬれ、いらごの島のたまもかりをす

といふ歌がある。一首の意は死ぬるよりも辛い境遇にありながら、なほ死にかぬるといふ、生に執着する人情の微をうたうたうたである。又老人六歌仙の一に

聞たがる、死にたうながる、愚痴になる、出しやばりたがる、世話やきたがる

といふのがある。「死にとうながる」はこの狂歌の骨子で、矢張り生の執着をいうたのであらう。

三　不死の欲

已に生に執着する上はこの生命の不老不死ならむことを希ふは、無智の動物は別なれども、智慧ある人間の當然起すべき慾望である。乃ち人間の我欲は生命欲にあつて而も不老不死を欲求して止まないものであるといふことは、古往今來何人も否定し得ない事實であらうと思ふ。三千年前埃及人は死者の靈魂は一度天に昇るけれども二千年經てば又戻つて來る。それまで身體を保存して置けば蘇生するものと考へてミイラを發明しピラミットの中に貯藏して置くことにしたのも生に執着の思想の作用である。秦の始皇が不老不死の藥を東海に尋ねたのも、釋尊が老病者を見て發心したのも動機は同一心理から出たものであらう。英國のジョンバンターは氷結した動物は一時生活現象が止まつて死の狀態にあるが軈て氷が解けると復活を始めるといふ事實を人間の上に當嵌めて不死の狀態を解決しようとし、獨逸のブルーメン、バッハは一二昆蟲動物の仔蟲が冬期は假死の狀態にあるも、夏期に至ると再び生活を開始する事實を認めて不死論を證せんとした（中央公論藤澤術彥氏）といふことである。これ皆生命欲の高調から來た結果の研究であらうと思ふ。

若しも人間が其生命の終焉即ち死を豫知したものとしたならば如何であらう。絶望の極、煩悶懊惱遂に狂死するであらうと思ふ。此の場合食欲も性慾も考ふる餘地はあるまい。嘗て米國の或劇場で斯ういふ筋書の芝居が演ぜられた。すなはち或大學を優等で卒業した一青年が意氣揚々として舞臺に登り來つた時に、舞臺の上壇に人の死を司るといふ惡魔が出現し青年をにらむで今より二時間の後汝の生命は終焉する旨宣告を與へたのであつた。この宣告を受けた青年は全く生氣を失ひ煩悶又煩悶、懊惱又懊惱頻りに苦しんでゐる所へ、彼の親友の一人が來つて彼の卒業論文が通過して博士になつたことを知らせた。けれども彼は少しも喜ばず只煩悶を續くるのみであつた。更に一友人來つて、彼が命までもと戀慕した美人が、愈父母の許しを得て彼の結婚を承諾することになつた旨を傳へた、けれども彼は少しも喜ばす、只懊惱を續くるのみであつた。また一人來つて彼に某富豪經營の會社に於て彼を破格の高級を以て入社せられむことを交渉し來つた事を告げた、けれども彼は更に喜ばず、只煩悶懊惱を續くるのみであつた。其中に段々時間が迫り來り十分となり五分となり一分となり一秒となつた時、彼が死の相圖として太鼓がドーンと鳴ると同時に青年はドート倒れ幕が下りたのであつた。これは即ち私達人間が如何に生に執着するもの

であるかといふことを諷したものである。

四　長壽欲

ところで私達人間が如何に生に執着すればとて死は絶對に免れない。たとへ死物狂ひになつて不死の藥をさがしてもあるべきものでない。鹽絶ち、火だち、水だちをして神にいのり佛にすがつてもこればつかりは聽かれない。舊約の創世紀に從へばアダムは九百歳其子セツは九百十二年其子エノスは九百五年其子カイナンは九百十年を生き、支那の彭祖は八百歳を生きたけれども矢張り死んだ。尤も此の時分の一年は三箇月であつたから何れも二百歳前後であつたのである。我倭姫は五百歳、武内宿禰は三百餘歳これは正味かけ値のない歳であるが矢張り無限に生きることは出來なかつたのである。

そこで私達人間は如何に集つても如何に苦心しても、絶對に死より逃れることの出來ないといふことは解つた。そこで責めては長壽を保ちたいとの欲求が起るのである。これも何人も否定することの出來ない事實であらう。現に八十九十の高齢者がモーこれで澤山だ何時死んでもよろしいなどゝ口ではいふけれども其實肚の裡では決して死にたいなどゝは思うてゐない。益々長生せんことを希ふてゐるのである。されば五十六十の人は「五十六十は鼻たれ小僧男ざかりは八九十」などというて力んでゐるし、八十九十の人は「八十九十は鼻たれ小僧男ざかりは百二三十」などいうて威張つてゐる。倭姫や武内は「二百三百は鼻垂小僧男ざかりは八九百」などゝいはれるであらう。世間に喜の字の祝ひだの米壽の筵だのというて之を祝ふとて或は松によせての鶴によせてのと、千年も萬年も生きる樣の空想を歌に詠み詩に作つて喜んでゐるのは、考へて見れば笑ふに堪へたる滑稽なわけである。例の蜀山先生或る人に「松契千年」といふ題に八十の壽歌を賴まれ「八十のがらくたおやぢ生きのびてまだも齡を松にちぎるか」とやつたさうであるが、人間の淺ましい我欲を徹底的に痛罵したものである。尤も蜀山だの一休だの宗因などゝいふ連中にかゝつては堪まつたものでない。

世の中はへちまの皮の袋なり、そこがぬければ穴へどんぶり　一休

このよをは御暇乞ひよ線香の、けぶりとゝもにハイ左樣なら　蜀山

宗因はどこへと人の問ふならば、チト用ありてあのよへといへ　宗因

などに至つては生死を超越し、所謂大我の妙境に到達したものであらう。尤も日本人には自殺にまで滑稽洒落的茶氣を帶びたものがあるので

死ねばこそ只の二百といふめれと、生きてゐたなら百もかすまい。

ながらへて地獄の裡にくらすより、死ねば樂しき極樂ぞある。

などは餘り茶味化してはゐない、寧ろ悲壮の意味があるが、

世の中に汽車で死ぬほど樂はなし、浮世の馬鹿が病んで死ぬなり。

ゆく先も又行先も同じこと、どれこの邊で一寸休まふ。

などに至つては、呑氣の極致にして茶氣の眞髓を遺憾なく發揮したもので、一休連中の大悟徹底を滑稽化して行つたものとでもいふべきであらう(前著大九六頁參照)。兎に角かういふヒャウキン者や脫俗者は別として、普通の私達には矢張り一日でも長く生きてゐたいとの慾望が止まないのである。其上モウ一つ慾望を加へてゐる。それは何んであるかといふに、いつまでも若く不老でゐたいといふ虫のよい慾張りである。これも亦人間共通の慾望であつて否定することは出來ない。小野小町が「おもかげのかはらで年のつもれかし、たとへ命に限りありとも」と述懷したのは此間の消息を露骨に告白したものである。またスタインナッハ氏が一度び若返り法を發表してから、歐洲に於ける白髮童顏の老人連をして天の福音として狂喜せしめ、我九州大學に於て之が施術を發表するや、高砂の老翁老嫗が海老腰に杖を突張り其施術を請んとて押すな〳〵の盛況であつたことは、最も雄辯に之を說明してゐるものである。

さて以上の如き深刻なる私達人間の生きんとする慾望は、果して實現し得べき可能性を有するものであらうか。または絕對に不可能性に屬するものであらうか。

第二章

五　二元生活

抑々私達人間は二元的生活を營んでゐるものである。即ち一は內面的心靈即精神生活、一は外面的肉體即物質生活である。この靈肉二元、內外兩面の生活は、車の兩輪の如く鳥の兩翼の如く須臾も離るゝことの出來ぬものである。否離れては生活をなさぬものである。只併し靈は主にして肉は從たる關係にあらねばならぬ。即ち肉は常に靈の主義方針、指揮命令の下に隨從して活動す

べき運命を有するものである。これは私達日常の實際生活に於て、不斷經驗しつゝある事實である。例へば內面的心靈即精神に喜怒哀樂を感ずれば、即座に外面的肉體の顏面並に四肢五管に活現するのを見て明かである。されば、外面的肉體に於ける壽命の長短、老不老は一に內面的心靈即精神の作用如何によつて決定せらるゝものであることを信じ得るのである。即ち私達の內面的心靈即精神が常に健全にして、終始希望に滿ち、日々に愉快に日に愉快に、日々に樂しく、日に樂しくあれば、外面的肉體も亦常に强健にして、終始生氣に富み、血液の循環は日々に新たに日に新たに、食物の營養は日々に進み日に進み、かくて自然の結果として肉身は若々しく、壽命は長生を保持し得らるゝのである。若し之に反し、精神に不快を感じ苦痛を覺え煩悶懊惱するならば、肉體も亦疲勞を來し倦怠を覺え食は進まず血は環らず、自然の結果として早老短命に終るものである。これ世間の事實に於て私達の屢々實見する所である。要するに一言に之をいへば、內常に愉快に樂しくあれば外長壽不老なり、內常に不快苦痛にあれば外早老短命に終るといふ結論に歸するのである。この結論よりして私達人間の慾望たる壽命の長生と肉身の不老とは、或程度まで實現し得る可能性を有するものであることを信じ得るのである。

六　靈的生活

果して然らば其愉快と樂みとは如何にして之を需むるか、これはいふこでもなく內面的心靈即精神の修養にまたなければならぬ。さて其修養の方法は如何にするか、他なし恰も肉が靈の從なる如く、靈も亦或偉大なるものゝ從となつて進めばよいのである。其或る偉大なるものとは何であるか。曰く我國の神祇即是である。神明即是である。私達が衷心から神明神祇の御思召のまに〳〵活動し、其廣大無邊なる神恩を感謝する所に、私達の純潔なる至誠が顯見するのである。其所に眞の愉快と眞の樂みとが將來するのである。かくてこそ私達は忌まはしい不快な苦痛から逃れて、安樂世界に處することが出來るのである。古歌に「のちの世もこの世も神にまかするや、愚かなる身のたよりなるらむ」といへる如く、全く自己中心の小我を捨て、宇宙の本體たる大我の神と一致するのである。こゝまで修養が進めば最早壽命の長生や、肉身の不老等は問題でなくなるのである。即ち私達の理想とした精神的靈的の意義ある生活の境に到着したもので、たとへ外面的肉體即物質は亡びても、內面的心靈即精神の生命は永遠に滅びずして光を放つのである。

黒住忠宗が「天照す神のお腹にすむ人は、ねてもさめてもおもしろきかな」とうたひたるも同じ意味である。彼の幕末の志士佐久良東雄氏は王政復古を祈りて「人しれず神にぬさおきいのりてそ、まつたのしみもある世なりけり」と歌つてゐる。人しれず神に至誠を捧げて祈る所に一點の私心なく、一朶の邪念なく公明正大の心事眞に快感を覺えたであらう。流石に氏は平田先生の門人だけに、勤王の精神は頗る熾烈なものであつた。不幸にして萬延元年捕はれて獄に下り食を絶つて五十歳を一期として死んだ。即ち肉體的生命は僅に五十年なりしも精神的生命は永遠に益々光輝を增すのである。夫は兎に角として「まづ樂もあるよなりけり」と歌はれたる精神に千金の價値があるのである。氏は五十年にして絶食自殺したけれど若しも天然の壽を得てあつたならば、必ずや一段と國家社會の爲に貢献された事であらうと思ふ。私達もまづこの樂みを獲得して自已のものとしなければならぬのである。この樂みの作用は、外に發しては忠君愛國の誠となり、内に入つては孝貞恭弟の情となり、轉じて仁となり義となり信となり禮となつて、彌が上に光風霽月、衷心の快感を覺ゆるに至るのである。かくてこそ敢て長壽を願はざるも益々長命し、好んで不死を求めざるも益々若やぎて瀟洒たる元氣が充實されるわけである。

七　肉的生活

然るに私達の多くは何れも思ひを茲に致さぬのである。何となれば上述の如く長壽と不老とを慾望しながら、常に之を裏切る所の生活をしてゐるのである。

即ち内面的心靈即精神生活を閑却し、徒らに外面的肉體即物質生活にのみ吸々として不純不潔の我欲の爲に、或は人を恨み人を嫉み、甚だしきは父子兄弟夫婦相爭ひ相殺し、四六時中煩悶懊惱少しも心を安んずるなく、出ては不快入つては苦痛、自から好んで早老短命に終るのである。何んたる淺ましいことであらう。甚しきは精神的眞の愉快眞の樂みを、肉的本能の享樂主義と誤解し、食欲の爲には飽食暴飲健康を害し、性慾の爲には姦淫々奔人倫を紊り、終には煩悶懊惱を將來し、不快苦痛の極、長壽どころか鐵道自殺で死を早め、汚名を汽車で千里に輸送してゐる仕末である。何んといふ淺間しいことであらう。私達は何故もつと立派な、もつと美しい、もつと清い心になつて精神的に靈的に意義ある生活の理想境に進まれぬのであらう。道歌に曰く「心こそ心まよはす心なれ心に心心ゆるすな」と誠に味はふべきである。淺ましいかな私達の心。思ふ

に私達の多くは慾望の出發點を誤つてゐるのである。本能的享樂を擅にしたい爲に、長壽不老を欲求してゐるので、國家社會の爲に一日も一時も長く貢獻したいために、長壽不老を欲求してゐるのでないのである。

故に長壽不老を慾望してゐながら、却て早老短命に終るのは當然の歸結であるのだ。昔齋藤別當が染髪して戰陣に臨んだ如きが眞の不老を欲求する精神であるのだ。また德川の老臣の誰であつたかが(本多佐渡守か)德川の爲に爲すべきことが多くあるのに死期が近づいて來た時「死にともなあゝ死にともな死にともな」というたといふことであるが、これ等も、それに屬するものであらう。仙臺の志士林子平氏が『親もなし妻なし子なしはんぎなし、金もなけれど死にたくもなし』と歌つたのも其意味であらうと思ふ。

されば私達は本當に長壽不老を慾望し、本當に永遠の生命を得たいといふならば內面的心靈即精神生活を徹底的に實現する如く修養を積まなければならぬと思ふ(大正一一、五、三)

三、中心の移動と我が國體

大正十一年六月廿六日

こゝに中心といふは、世界的勢力の中心をいふのであるが、併し單なる勢力即ち武力的勢力などをいふのではない。學問に於て藝術に於て、經濟に於て道德に於ての所謂文化的勢力をいふのである。この文化的中心勢力が、今日は何れの方向にむかつて移動してゐるか、又何れの國が、この中心の覇を握つてゐるか、又將來は何れの國が、この中心勢力を以て、世界に號令するかといふことを考察し、之に對し私達日本國民は如何なる覺悟を以て、如何なることを爲すべきかを諸君と共に研究して見たいと思ふのである。先づ西洋の文化の移動のあとを歷史的に考察して見よう。

一　地理的關係

イ　西洋の開化西行す

石州津和野の人で、西周（あまね）といふ方がある。此方は文久二年に和蘭に留學し、英國にも遊びて早く海外事情を研究された方で、德川慶喜公の侍講となり、維新後は學士會員、貴族院議員となり明治二十七年六十九歳にしてなくなられた有名の人である。此方が嘗て或雜誌だかに「西洋の開化西行す」と題せられて、西洋の開化が段々西に移動するといふことを述べられたことがある。今にして思へば實に卓見といふべきであつて衷心敬服に堪へない。考へて見れば全く其通りで、先づ西洋の開化は希臘に發芽し、西羅馬に傳播し、こゝに燦爛たる花を咲かし、更に西して佛、和、西班等に轉々移動し、彼方此方に文化の根を下したが、彼の西班牙の無敵艦隊が、英の海軍に破られた一五八八年頃を期限として、徐ろゝ海を渡つて英國に移動を始めたのである。其頃は恰も英國ではエリサベス王女の文學隆盛時代であつた。かくて英は當時海軍國を以て天下に誇つてゐた和蘭の海軍もたゝきつけ、更に蓋世の英勇那翁をも放逐し、恰も旭日沖天の勢を以て可

なり永い間（那翁から數へても百年前後無敵艦隊から數へれば三三四年）世界に號令してゐたのである。ところが幸か不幸か這次の歐洲大戰の爲に、其お株は西大西洋を越えた米國に奪はれ、今や米國は世界文化の覇を掌握し、殆んど全世界の死命を制してゐるかの觀がある。併しながら、これとても決して恒久に其榮を擅にすることは出來ない、轉て又西行の原則によつて西行すべき運命が近き將來に到來するのである。さて其の西は何れであるか、いふまでもなく我日本帝國である。而して一度び日本に移動して根を下すが最後、再び西に移動することなく、こゝに始めて、恒久的に文化の實を結ぶのである。即ち西洋の開化は西行して、我國に來つて停止し、此處を永久の住家とするのである。こは決して手前味噌的杜撰の肯定ではなく、地理的關係から見て、然うなければならぬのである。この事は平田翁も已にいはれてゐる。なほこの地理的關係については、我國が島國にして、海洋を境界としてゐること、海洋は自由不自由の兩極端性を帶びてゐること、我國は溫帶地即人類地帶にあること又太平洋上の中央的位置にあること等を詳述すべきなれども、大概世人の周知の事でもあり、且つ煩はしいを以て省略する。

ロ　亞細亞の文明東流す

我國は太平洋上の中央に位置し、恰も地球の首部に位してゐるから、啻に西洋の文化が大西洋から迂回して來るばかりでなく、亞細亞の文明も亦東流して我に集中するのである。彼の世界最古の文明といはれてゐるナイル河畔に起つた埃及の文明、及ユーフラテス、チグリス河畔に發した小亞細亞の文明はエーゲ海の文明となつて希臘に向つて西流したのではあるが、併し其一部は確かに印度方面に向つて東流したに相違ない。特に明かに史上に其痕跡を遺してゐるはアレキサンドル大王や、セルウコス等の印度征服事業によつて紹介せられたことである。而してインダス、ガンヂス河畔に生れた印度文明と一緒になつて支那に入り、更に楊子江、黃河の邊りに起つた支那の文明と合して、先づ支那に燦然たる文化の花を咲かし、次いで東日本に流れ着いて、堅實なる文化の實を結ぶに至つたのである。これは歷史が證明してゐる事實である（前著大五七頁）。即ち日本は東西兩方面より文明を吸收して、さうして時代文化の美を織り出すべき地位と使命とを有してゐるのである。更に一歩を進めて世界文化史の發達の徑路から考察して見れば、一層其事實の確かなることを知るのである。

二　世界文化史發達の徑路

獨逸の地理學者カールリ、ツテル氏は世界の文化史を三期に別ち、第一期を河川時代、第二期を內海時代、第三期を太洋時代としてゐるが、至極尤であると思ふ。先づ人類最初の文明が河川より發生した事は、埃及の文明がナイル河に、小亞細亞の文明がユーツラテース、チグリス、印度の文明がインダスガンヂス、支那の文明が楊子江、黃河の河畔に起つたに徵して明かであつて前に述べた通りである。我國に於ても、近幾地方に於ける淀川、由良川中部地方に於ける木曾川、天龍川、關東地方の隅田、利根川、奧羽地方の北上、逢隈川、北陸地方の信濃川等數へ來れば何れも其沿岸は文明發生の源たらざるはなしであつた。

次いで第二期は內海時代で歐羅巴に於ては東南の地中海、西北の北海からバルト海等の文明時代を擧げらるゝであらう。我國に於ても第二期文明時代としては、先づ瀨戸內海等に指を屈すべきか。

次いで時代は第三期の太洋文明に進むのである。この移動の時期を或人は、一五九二年コロン

ブスが印度に至る西方航路を發見せんとて、偶々亞米利加に達しバハマ、キユバ、バイチ等を發見した頃よりとすれども、本當に太洋文明に這入つたのは十八世紀の中葉即ち彼のワットが蒸汽機關發明後と見るが有力ではあるまいか。假りに然うだとすれば、今日迄約二百年間は先づ太洋文明時代といはれるであらうが、併し今日迄は總て大西洋に其中心があつたのである。ところが歐洲戰後それが太平洋に移動して來たのである。即ち今や太平洋の周圍にある國々は何れも擡頭して來て、大に世人の注視する所となつたのである。就中我日本と米國とが世人注視の集點となつてゐるのである。而して今の處米國が得意の絶頂で、頗る横暴を極めてゐるのである。富と領土と海軍とを以て數百年間世界文化の覇を握つてゐた、過の英國も、今は米に一歩を譲される次第となつたので氣が氣でないが、そこは昔し取つた杵ねつかで、巧に米國の機嫌を取り、衝突を避けるに苦心してゐるのである。日英同盟の廢止もその爲、西比利亞で日本に構はず米國と行動を一にしたのもその爲、這次の海軍縮少會議も實は英の肝煎りだこの事であつた。兎に角最早英は米の敵でない。只米國の恐れるのは、獨り我日本あるのみである。今や我の一擧一動は大に世界の注視する所となつてゐるのである。現に華府會議に於て英米二國が共同して我の海軍を縮少せしむるに全力を傾注したに見て判るのである。少くも今の處三大强國の一たるは疑ひない所である。蓋し我國が太平洋に於ける其の中心たるべき地位に達することも、餘り遠き將來ではあるまい。即ち今や世界文化の中心は太平洋に移動し、其太平洋の中心たるべき榮冠は近く我日本の頭上に飾られること疑ふ餘地がないのである。

三　惟神の自然

斯く論じ來れば、日本は軍國主義、帝國主義即ち武力を以て、無理に世界文化の覇を握らんとするのであるといふものがあるかも知れんが、それは我皇室、我國家、我國體及私達大和民族を理解しないものである。これは我國が惟神の自然に稟有してゐる使命であるのである。そのことは追々判るものとして、私は此場合祈年祭の祝詞を思ひ出さずにゐられない曰く（前著大四八頁）

狹國者廣久　峻國者平久　遠國者、八十綱打掛瓦引寄如事

あゝ八十綱掛けて引寄する事の如くとは何たる雄大の氣宇であらう。私は同時に畏しこき事なから皇后陛下の御歌を拜想し奉るのである。

神風の伊勢のはまをき招かねと、したひよるらし四方の國々

これである。招かねと四方の國々が、我皇風を慕うて自然にしたひよりくるのである。是れが抑我皇の一大御理想にして私達臣民即大和民族の一大信念であるのである。而も其のこれあるや決して人間の力でなく、そこに何等かの或るものが存在することを私達は自覺しなければならぬのである。それは兎に角として私達が自分で自分の國の事をいうたのでは、或は我田引水といはれるかも知れぬから、私は此際外國の人が如何に我國を見てゐるかを紹介しよう。明治二十四五年頃の事かと記憶してゐるが、英國の毎日電報の主筆アーノード氏が我國を評して左の如くいうてゐる。(前著大五〇頁)

噫上に皇統連綿萬世一系の英主を頂き、國を太平洋中の中間に置ける、東洋優美の君子國の皇統連綿と地勢とは、金銀珠玉を以て購ひ得べきものならば、佛國の富を擧げて、佛國民之を購ふに躊躇せざるべし。未來商業の中心を太平洋上に占むる好位置は領土を以て交換し得べくんば、英國の領土を盡して英國民之を交換するに憚らざるべし。世界列國の欽慕措かざる萬世一系と太平洋上の商權を掌握すべき好位地とを占めたる日本は、此二者を以て世界に雄飛する何ぞ難からむ云々

大英國の大新聞の主事たる氏の筆になつた、この評論は、實に千鈞の價値あるものであらう。この評論は私が前來の所説に對して鮮かなる裏書を與へたものであり、徹底的に證明を付したものである。凡外國人が日本を評したものは澤山あつて、大抵は贊辭を以てしてゐるけれども、如此徹底的に其眞を穿ち而も有力なるものは殆どないのである(前著大帝國使命參照)

凡そ何事でも、何物でも、自分が自分の事、自分のものを主觀的感情的に保證したり、賞めたりしても、それはことによると怪しい場合がある。例へば俺は正直だ、俺は正義だ、俺は道德者だ人格者だと自分が自分を吹聽しても、悉く信をおかれないことがある。自分から吹聽しなくとも眞に正直正義であれば、眞に人格者道德者であれば、誰いふとなく自然に世間又は後世の人が、之を客觀的、理性的に觀て、賞贊し、保證し、吹聽するものである。反對に惡い事も同じ事だ。今日中學校生徒などが、よく先生に綽名を奉る僻があるが、甚だよくない事ではあると思うてゐるが、併し其綽名が如何にもよく、其人の體格の特徴又は性格、さては特殊の行爲等を象徴してゐることを思うて、私かに自笑することがあるのである。例へば禿頭を、電氣、藥罐などは陳腐てあ

るが「念入」（念入りにハゲてゐるの意）だの「練兵場」（練兵場の如く一本の草もないの意又額など廣い意味にも使ふらしい）だのは、振つたものである。又鼻の上向を「日和見」などいふのも稍振つてゐる。低い鼻を「おかめ」などは普通たが、「マイナス天狗」などは珍中の珍である。又性格の上から、甘くて角のある人を「金米糖」怒り易い人を「芋蟲」「大騒する人を「二百十日」氣の早い人を「蒸汽ポンプ」なども可なり珍品に屬すべきものであらう（大正十年九月の中學世界參照）。以上は惡戯的の方面であるが善い方にもある。時間の正しい人を「時計」行爲に非のない人を「書行燈」又は「夏の火鉢」親孝行の人を「孟宗竹」など、それである。兎に角善惡共に何れもよく、其眞を穿つてゐるものであることがわかる。又綽名ではないが、恐れ多い事ながら我歴代天皇の謚號などに其御德行を偲び奉つてゐるのがある。神武、崇神、仁德など即ちそれである。又夏の桀王たの段の紂王などいふ名は、謚號でもなく本名でもなく、全く彼等の暴虐を憎んで時の人が、誰れいふとなくつけたのである。桀王は名は履癸であるが、「殺を好み貪婪暴虐至らざるなきを以て、時人之を桀と呼びたり」と又紂王は帝辛といひ、名は受というたが「殘忍にして義を捐つるを以て紂といふなり」と或書に書いてあつた（史記本紀に帝辛天下謂之紂とあり）。即ち、我歴聖の御德行も桀紂の暴虐も、正しく事實であつて、後世其德を偲ひて謚號を奉つたのも時人か其暴虐を憎んで名をつけたのも、皆其事實をいうたのである。而も何れも自ら名づけたのではない。世間には己の理想や希望から、自分の名や子供の名に雅名を付けるけれども、これが往々事實と矛盾するのである。例へば秀一が學校で落第ばかりしてゐたり、糸子が馬鹿に肥つてたり、靜子が、おしやべりであつたり嚴城が病身であつたり、正が收賄したりするのは決して珍らしくない。秦の始皇も其部であらう。中には隨分捧腹絶倒的のものもある。或所に産兒制限の意味からか知らんが、十何人目かに生れた子を、これで出産が止まるといふ意味で「おとめ」と名付けたが、又次が生れた。今度はこれが末であるといふので「末尾」と名づけたが、又其次が生れた。今度ばかりは止めたといふので「止太郎」と名付けたといふ、嘘の樣の本當の滑稽があつた。（八幡社の由來、御名號の項參照）世の中に子福者は隨分あるが本願寺中興の祖たる蓮如師の如きは稀であらう。蓮如師は生涯に二十八人の子を持ち、而も十五女は八十二歳の時の子、十三男は八十四歳の時の子である。精力の旺盛眞に驚くの外ない。サンガ夫人之を聞かは何と思ふであらう。大變餘談に耽つたが、要するに自分で自分を賞めたのでは當にならんことがあるが、所謂衆目の視る所、十指の指さす所又は非常に有力の人が之を賞贊するに於ては誤りがないとい

ふのである、希くは私達の日常の行動も、こゝに思ひをおきたいものと思ふ。この意味に於て、私は毎日電報の主筆の我國に對する評論は、實に千鈞の價値があると思ふのである。

四　平和主義柔順主義

イ、既往七十年

上述の如く今や我國は三大强國の一に加はり、而も軈ては世界文化の覇を握るべき機運も熟してゐるが、顧つて七十年前即ちペロリが浦賀へ來た當時を追懷して見れば、轉た今昔の感に堪えぬとでもいふべきか、當時に於ける我れの幼稚さ加減と來たら實に話にならなかつた。一例をいへばペロリの大砲に對抗すべく、江戸の洛中洛外から寺院の鈎鐘を集めて海岸に放列して、我れにも斯の如く大砲があるぞと威張つたといふが如き、又彼等の種々なる勝手の要求に對し　幕府の役人は答辯に窮し、平素犬か猫の如く見下けてゐた、百姓町人にまで、其意見を徵したといふが如き、如何に苦しかつたかゞ、今も目に見える樣である。此時吉原の女郎屋の亭主が、女郎に盛裝さして、軍艦に送り外人に酒を呑ませ、醉うた所を日本武士が短艇に隱れてゐて飛出して斬り倒せといふ頗る非常に振つた建白書を出したといふことである（此書今某華族の家に在るといふ）。續いて維新前後に於ても、彼等の爲に、屈辱的服從を餘儀なくされたことは一再でなかつたのである。文久元年露國のボザートニック艦が突然對島を占領し、艦長ビリレフは海岸一部を租借せんと要求したるも、拒絶するや翌年三月再び來つて芋崎浦に上陸、兵營を建築するといふ亂暴を敢てし、幕府は驚いて、外國奉行小森豐後守、目付溝口八十五郎二人を急行せしめ、談判せしめたけれども應じなかつたが、幸に英國艦隊のアフリカを迂回し堂々我國に來航して、この露艦に抗議をしてくれたので漸く彼等は退却したのであつた。又明治八年樺太と千島と交換したが、これは嘉永六年プーチャーチンが來朝以來の懸案であつたのだが、交換といふけれども、其實樺太は元々我の所有であつたのだから、つまり掠奪せられたわけであつたのだ。先是寛政享和の頃我北海道を犯したのも露國であつた。而も我は日露戰爭以前に嘗て露國に發砲した事はなかつた。又戊辰戰爭の時、我國は危くも英佛の恐るべき羈にかゝる所であつた。この事は「前編四一頁」に詳說しておいたから省略しておく。又米國は日本を開發してくれた恩人の樣の面してゐるけれども、抑々ペロリが嘉永六年の來航は內心にそんな親切なごは毛程もあつたのでない。實は英國の大平洋艦隊の根據

地たる香港に對抗する、根據地を琉球其他の島嶼に求めたい爲であつた。彼はとう〳〵小笠原を占領して、兵器彈藥を貯へ糧食を積み之を根據として英に備へると同時に我をも威嚇したのである。のみならず彼は條約の不備に乘じて、我國の金貨を掠奪して、我國の經濟界を紊亂せしめ、たのであつた。（中央史壇白人の退却參照）。

一體米國は昨今頻りに人道だの、正義だのと馬鹿に聖人ぶつたことをいうてゐるけれども、米國程征服的、侵略的軍國主義の國はないのである。假りに獨立以來を純粹の米國として、今日迄約百四十年間に彼は干戈を動かしたこと、大小合して十數回、而も殆んど侵略戰ならざるはなし、征服戰ならざるはなしであることは世人周知の事實である。（前著大四八頁參照）。之を稱して變態的正義人道といふのださうだ。我國の恩師だなゝいつてゐながら、今尙我を苦め、我を苛めてゐるではないか。華府會議に於て然り、支那問題に於て然り、シベリヤ問題に於て然りである。我は末だ嘗て我れから進んで米國に反抗又は敵對した事は只の一度もないではないか。餘りに我は平和主義であつた、餘りに我は柔順主義であつた。

それがどうです。僅に七十年後の今日は、將に世界文化の中心たらむとする勢ひに達したといふは、全く夢の樣である。蓋し我のこの平和主義であり、柔順主義であつたことが大に與つたことであらうと思ふ。何となれば古語に「柔能く剛を制し、弱能く强を制す柔は德なり剛は賊なり」といふことのあるから考へてゞある。併しながらそこに人力の及ばぬ何等かの或るものが存在することを私は再び考へざるを得ないのである。

ロ、往時二千年

一體世間では、我國を好戰國であるの軍國主義であるの、さては侵略だの、征服だのといふけれども、我國ほど、昔から外國より壓迫され苦められた國は、ないのである。試に往時千五六百年（漢學が正式に我國に傳來した應神天皇の御宇、今より一六五三年前とす）間の歷史のあとを考へて見れば、蓋し何人も思ひ半に過ぐるであらう。其間に征服的の目的を以て直接武力を以て攻擊して來たのは元寇で、これは最も規模の大なるものであつて、又最も慘を極めたのであつたが、世人周知の如く神風の爲めに粉碎されて終つた。其他は維新前後に英、佛、米、露等から精鋭の兵器を以て嚇かされた位のもので、先づ大したこともなかつたのであるが、一番恐るべきもので而も最もしつこかつたのは、支那印度から侵入して來た、佛敎儒敎及之に伴ふ思想、文學、藝術等であつた。世界を震駭さした忽必烈の

鋭鋒は見事に、挫いてやつたけれども、この思想の侵入はとう〳〵防ぐことが出來なかつた。實にやユーゴーが「三軍の侵入は尙抗すべし、思想の侵入に至つては抗すべからず」というたのは尤もである。先づ支那思想についていへば、老莊の虛無自然などは、今日のクロポトキンあたりのナナーキズム又はマルクスあたりのソシアリズムともいふべきもので、頗る危險性を帶びてるたので、支那てさへも、警戒された位である。即ち史記に、太史公、老子の本旨を品判して「老子は虛無を原因として、萬般に應ずることを旨とせり、故に其弊極めて慘覈」というてあるのを見ても知られる。とはいへ、世に老子といふ書物があるが上下二篇八十一章より成つてゐる。これを熟讀頑味すれは、必ずしも世人が案するほとの危險性はなく、畢竟一身修治の工夫を得べき道德を敎へたものであるかと思はれる。只其道德が、儒者の所謂道德とは異つて、今日の所謂宇宙の眞理といふ樣のもので、聲もなく、形もない、靈妙不可思議のものである。その不可思議なる靈妙を道と假定し、而して既に其作用の物に顯はれ得るものを德と名づくといふ、易の「形以上謂レ道形以下謂レ器」と同じやうのもので、我古典の精神に類似の點があるかと思はれる。これが本居翁も或點に於て賞贊してゐられた所以であらう。特に四十二章の道生一の條は、我三神造化の首を作す、靈的作用と同一でないかと思はれる。このことは「前編二六頁」に書いて於たから、ここでは省いておくが、この三神造化の靈妙と老子の一より二、二より三、三萬物を生ずといふについて思ひ出すのは、我國唯一の民衆樂器たる三味線のことである。三味線は今より三百五十餘年前、正親町院の御宇永祿の頃、琉球より、蛇皮の二絃樂器渡り、和泉國堺にすめる琵琶法師中小路の手に傳はり、後一絃を增して三味線と稱し、調ふる音に、あらゆる呂律が備つてゐるといふので、これ即ち一より、二を生じ、二より三を生じ、三より萬物の音聲を生ずる理りであるといふことが、或書に書いてあつた。この三より萬音を生ずるなどは、老子の言を眞似たのではあらうが、兎に角單純なる三絃にして微妙複雜の音を有してゐることは事實だといふ。或心理學の書に聽覺の說明の條に「三味線を本調子に合せ一の糸を靜かに鳴して聽く時は、其れが單純の一の音でなく三の糸の音をも含んでゐることが分る。それは三の糸の調子を少し外して一の糸を鳴した時の音を比べて見れば明になる云々」と書いてあつたが、或は然かも知れん。即ち一にも三の音あり、三にも一の音あるといふやうに、複雜してゐるが、其複雜の中にも自然と統一があるので微妙の樂器たるには相違ないのである。それは兎に角として、この老子の三は萬物を生

ずるといふことは、面白いと思ふ。故にある意味に於て我國體講明の上に益する所がないものではなからうと思ふのである。只讀方が誤り、考へ方が悪いと大なる害を來すのである。つまり老莊の思想は、さ程恐怖するには及ばないが、これよりも一層危險性の濃厚なるものは易姓革命、讓禪放伐の思想であつたのである。孟子といふ書物の我國へ輸入を拒んだことのあつたのも其爲であつたのだ。然るに私達の祖先はこれ等の思想を一旦は味つたけれども、これは我國には毒であることを覺り、直ちに皆吐き出し、さうして我に適する大義名分忠孝仁義等の德目をのみ攝取したのである。其虛無自然などいふ小六ヶ敷い哲學的思想は、風流三昧の隱居茶人の友として片付けてしまい、其最危險性の濃厚であつた讓禪放伐的思想も、皇室に對し奉りて、誰もそんなことを考へるものなどなく、只大名武將などの横暴を制する時にのみ利用したらしいので、つまり稀に善用したに過ぎないのである。然るに今日の自稱新人等はやれクロポトキンがどうのマルクスがかうのと隨喜喝仰してゐるのは、恰も私達の祖先が吐き出した吐瀉物を珍らしがつて食つてゐる樣のもので、實に笑止千萬の至りである。だが併し支那の思想、文學、藝術等の爲に苦められた事は事實である。現に今尙私達は漢字の爲にどれ程腦味噌を贅費してゐるか知れないではないか。

これも確かに其一つである。試に一つ二ついうてみると先づ似寄つた字が中々澤山ある。于と干など棒の止めをハネるとハネないだけの違ひてある。之を覺えるには「于ハネ干モキ」というてゐる。瓜と爪もツメがあるとないだけで、而もウリにツメがあつてツメにツメがないのであるから、之を覺えてゐるには「瓜に爪あり爪に爪なし」といふのである。釣、鈞、鉤、鉤なども一寸と見ると殆ど同じに見えるから書く時には能く間違ゐるので、これは「一テウ二キンム口コウ」と暗記する。慕募暮墓墓幕などは「水シタフ力はツノル日はクル、虫ヒキガヘル土ハカ巾マク」と記憶するのである。其他己已巳已なども一々正しく書く者は先づ稀であらう。晴と晴、杯と抔、收と收など數へ立てられぬ。又同一の字が用ゐ所により音も訓も異つてくる。樂は「タノシム」時は「ラク」氣樂、和樂。それから「鳴物」の時は「ガク」音樂樂器。殺は「コロス」は「サツ」「ソグ」は「サイ」相殺減殺。力は「ツトムル」は「リョク」力行、勞力「チカラ」の時は「リキ」力量、力學、力士。食は「クウ」時は「ショク」「食物」の時は「シ」單食壺漿。「人名」の時は「イ」審食其、酈食其など皆それ。又行はコウ、ギョウ、ユク、オコナフ、アン、ツラといふ正行を「マサコウ」銀行を「ギンツラ」と讀んでは可笑い。私の名は春三といふのが本當であるが之を「ハルザウ」「シユンザ

ウ」はまだよいが「カスザウ」と讀んだものがあつたには閉口した。どこのか地方に「山路分署（やまぢぶんしよ）」といふ警察分署の看板を見て「ヤマミチハ、ワケテ、アツイ」と讀んだものがあつたといふ嘘のやうの話がある。「村長若くは助役出頭すべし」といふ郡役所の通知を「村長若（ワカ）くば」と讀み、村長より年上の助役が出頭したといふ滑稽の話がある。こんな間違ひは御愛嬌で、今日正さか、そんな者はあるまいが、堂々たる學者が漢字の讀方で爭つてゐることがある。文學博士の辻善之助氏と東洋大學長の境野黃洋氏とが「叡山大師傳」の讀方で爭つたことがある。傳中に「猶尙天臺以爲指南」と文字がある、之れを辻博士は「猶天臺を尙ひて以て指南と爲す」と讀み、境野氏は「猶尙天臺を以て指南と爲す」と讀み、互にさうだ、さうでないと中央史壇の誌上で爭つてゐた。或人曰く「どれが境やら辻やら斯ういう（黃洋）ては、善も之れ助からんの（野）」とやれてゐたが、これも何の事やら判らん。田中館理學博士は「不許葷酒入山門」の句を「葷を許さゞれば酒山門に入る」「許さるも酒山門に入る」とも讀まれるというてゐた。こんな例を擧げてゐれば、際限がないが、要するに漢字を一々正確とは辻もゆかないが、或程度迄覺えるとしても、仲々大事業で、この爲にどれ程私達は苦められたか判らんのである。

次ぎに印度思想、印度思想というても、佛教のことで佛教に至つては、其弊其害迚も支那思想の比ではなかつた。第一支那思想には惡い所もあつたけれども、亦取るべき幾多の美點もあつたが、佛教に至つては取るべき何物もなかつたのである。さうして其世界觀的、厭世觀的、未來觀的の思想は何れも我良風美俗を破壞し、甚しきは累を尊嚴なる國體にまで及ぼさんとしたのである。この事については「前編一三九頁以下國體と宗教の章」に詳しく述べておいたから、こゝには一切省略することとする。が只佛教の本旨が如何に我國體に背くものであるかといふ事例を一つ紹介することにする。今より九百年前、後一條帝の御宇、大和國吉野の安養寺に幽棲してゐた、願西といふ僧尼があつた（安養尼ともいうた）。其兄は源信というて、有名の學者で、而も畫も書き彫刻もした（阿彌陀來迎の畫を作つたり彌陀の像を彫刻したりした）。慈覺大師に事へて顯密の教を究めた偉い僧都で、當時横川に居あつたかと思ふ。この兄僧都が毎年正月朝覲の行幸を拜したのを、妹の願西尼が怪み問うて曰ふには

僧都は世間を超脫せる出家の身なるに、毎年正月下山して京都に入り朝覲の行幸を拜するは何故ぞと

源信之れに答へて

十戒の力により十善の位に登り給へること尊く、なつかしくて拜するなり

というたといふことである。この問答によつて佛教の本旨のある所が、よく解るので、支那の廬山の慧遠法師の「沙門不敬王者」というたと同じ意味になるのである。この安養尼は個人としては頗る有德の人で、尼が奉持した法華經は病人を癒し、諸の邪氣を攘うたといはれてあるし、又日本の神祇や團體を知らむ人でもない樣に思はれるのは、世に西行の歌として人口に喧傳してゐる

何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ

といふ歌は、西行の作でなく、この尼の歌であるといふことである(中央史壇)。若し果して然うだとすれば、兄僧都の行幸を拜したを咎めたのは、全く佛教の立場から之れをいうたので、尼が個人の日本人としていうたのでないと思はれる。以て如何に佛教の本旨が我國體に戻るものであるかを實に判るではないか。其他厭世觀、未來觀等に關しては、前にいうた通り前編に讓るとして、今一つ佛教の爲に苦められた、見のがすことの出來ない、重大事がある。それは彼の文學藝術の爲に、我經濟上に及ぼした、惡影響である。これは實に我國に取つては、殆ど致命傷ともいふべき痛手であつた。之れがために國家の基礎を危からしめんとしたことも一再でなかつた。政權の武門に移つたのも、他に種々の原因はあつたけれども、主として、之の爲であつたといひ得ると思ふ。幸に私達の祖先は餘りに深入りしないうちに覺醒し、恐るべき爪牙より逃がるゝことが出來たばかりでなく、却て彼が結局我に降參同化してしまつたのである。又我天文、天正、慶長頃我國に渡來した、ゼスイト教なども頗る危險性の侵略主義を有してゐたのであつて、思想に於ても經濟に於ても矢張り隨分苛められた。當時彼等は頻りに日本から貴金屬を集めて持て行つたので、德川幕府の大藏大臣大久保岩見守長安など、密約したことさへあつたが、之れが發覺して遂に鎖國令が布かれたのであつた。かくて彼等も思想上にも經濟上にも十分目的を達し得なかつたのである。それもこれも人間業でなく、何等か或るもの、力によつたものであることを、私は三度び茲に繰返していふのである。

五　國體と其靈的力と作用

イ、泉源とこしなへに濁らず

私は三たびまで我國には何等かの或るものが存在して、一種不可思議の力を有してゐるといふことを繰返したが、其或るものとは何んであるか。外でもない、萬邦無比の國體即ち是れである。いや其國體に含有してゐる靈的力と作用とが即ちそれである。然らば其靈的力と作用とはどういふ活らきをしてゐるか。私はそれを說明する前に先づ國體の要素を考へなければならぬと思ふ。ところで國體の要素といふことになれば、頗る廣汎なもので、一寸叙述に困るが、甚だ恐れ多い事ではあるが、今上陛下御即位の御詔に其要素を明瞭に且簡潔に御示し遊ばされてある。これによつて國體の靈的力と作用とを感得すべきである。勿論御示の要素は、今上に於かせられて始めて御定めになつたのではなく、神代の昔から實在の事實を其まゝ御示し給うたのであることを拜知すべきである。曰く

天壤無窮の神勅によりて、萬世一系の帝位を傳へ、神器を奉じて八洲に臨み　皇化をのべて蒼生を撫す、汝臣民世々相繼ぎ、忠實公に奉ず、義は乃ち君臣にして情は父子の如く、以て萬邦無比の國體をなせり云々

これである。天壤無窮、皇化、蒼生愛撫、忠實奉公、義臣情父子、これ即ち我國體の要素である。

（前編二三頁以下參照）このうちの何れを缺いても萬邦無比とは、いはれないのである。然るにこの要素が、支那の虛無自然的、易姓革命的思想にも、又印度の厭世觀的、世界觀的、未來觀的思想にも、蹂躙せられずして、今日に至つたといふ所に靈的力と作用とがあつたのである。前の御歌所長高崎正風男の師であつた、八田知紀翁の歌に

いくそたひかきにこしてもすみかへる
　水や御國のすかたなるらむ

といふのがある。實によく我國體の眞髓を穿たれたもので眞に感歎措く能はぬと同時に、今更ながら我國體の靈的力の大なると尊さとに感泣するのである。即ち我國は時に或は外來思想の爲に動搖するこゝがあつても、何時とはなしに、この偉大なる靈的力によつて、元の姿に立かへるので、恰も泉源の淸きに濁流が直に元の如くに澄みかへると同じであるといふのだ。

而してその泉源たる眞體はいぶまでもなく、天壤無窮、萬世一系にあるのである。これあるが故に上　皇室は蒼生を赤子と愛撫し給ひ、下臣民は世々相續き忠實公に奉ずるので、外國の治者被治者の關係の樣に一時の策略や　政策の爲にするのでなく惟神の自然から流露した至誠の結合

であつて、是れが即ち靈的作用であるのである。莊子は「天下に大戒二あり、其一は命なり其一は義なり」といつてゐるが、其命といふことゝ似てゐるかも知れん。

ロ、神宮とこしなへに嚴たり

さてその天壤無窮萬世一系は、實に天照大神の廣大無邊、日月と並び稱ふべき御神德に其源を發したものである。我國體が偉大なる靈的力と、不可思議なる靈的作用とを有するのはこれが爲である。神風の伊勢の五十鈴の川上の底津岩根に大宮柱太敷き立て高天原に千木高知りて永久に鎭まりましますは、言卷も畏きこの天照大神にましますではないか。この大宮を普通に伊勢神宮と稱へ奉つてゐるのである。あゝ五十鈴の流れは洋々として千古其清冽を誇つてゐる。假令下流は濁ることあるとしても、泉源の清流によつて直に澄みかへるのが、我御國の姿である。繰り返していふ如く是れが即ち靈的力と作用との活きである。外來の思想文物の爲に、時によつては世を擧けて夢中にさまよふことがあつても、獨り神宮丈けは斷して犯し汚されなかつたのである。中古支那風の模倣盛んなりし頃其風を眞似て、王臣以下私人の奉幣を禁じられたことなどがあつたけれども、ほんの一時的で且形式上禁止したまでゞ、實際に於ては何等變らなかつた如きも其一例である(前著大二頁)。又佛敎は非常の勢を以て、我國の上下を風靡し一時は恐きことながら、天子自ら三寶の奴とさで仰せられた位であつたから、其他は推して知るべきであつたが、それでも神宮にだけは斷じて手をつけさせなかつたのである。所謂內外七言の忌詞(前著大一七頁)などが雄辯に之を說に關する言葉さへ遠慮さしたのである。啻に手をつけさせないばかりでなく、佛敎明してゐる。今日から考へれば隨分頑固の樣ではあつたが、併し今聞えても頗る痛快に感ずるのである。これはつまり天照大神が佛敎を好ませ給はぬから來たことなのだ。そればかりでなく、この神都の山田市は神宮の御膝下なるの故を以て、佛敎各宗が、自宗の勢力を張る手段として競うて寺院を建立し一時は何んでも三百餘ヶ寺も出來たが面白い事には、どの寺にも撞鐘は絕對に許されなかつたのである。岩淵町前田の光明寺で、常磐井入道實氏の寄進にかゝる鐘を一日二回丈け撞く事を豐臣氏へ願つて許されたことがあるだけである。尤も京都に於て新嘗祭を行はせられた時、其當日から翌日まで、京都及山城國中に讀經梵鐘の音を禁止されたことが、明治元年の太政官の布告に出てゐる(前著大一五頁以下)。如何に佛敎臭味が神宮及朝廷に嫌はれたかといふことが判るではないか。又治承元年八月十三日大納言藤原實房卿が神宮神嘗祭の勅使を仰せ付かつ

た時、直に家の門に

自今日至來月十日僧尼重輕服並不淨之輩不可參入

治承元年八月十三日

といふ高札を建てられたのであつた。即ち一ケ月間僧尼の參入を禁じて心身を清められたのである。治承元年といへば、今から約七百五十年前平安朝末期、鎌倉時代の初であつて佛敎の盛隆時代であつたのだ。現にそれから十幾年の後後鳥羽天皇が東大寺大佛開帳の爲に、天下に非常特赦を行はせ給ひたるに見ても知られる。然るに此時天皇は一方に於て神宮の尊嚴といふことに痛く大御心を注がせ給ひたことがある。それはこの非常特赦に際しても、伊勢神宮と加茂神社の訴へにかゝるものは絶對に赦し給はなかつたこと是れである。以て如何に神宮に對し奉つては、皇室に於かせられて、深く意を用ゐさせ給ひたるかを拜し奉らるではないか。遺に炎々たる佛敎の猛火も、滔々たる支那の濁流も、神宮に對し奉つては如何とも策の施すべき樣がなかつたのである。茲に於て私達は只々其偉大なる靈的力と、不可思議なる靈的作用とに感激恐懼するの外ないのである。又耶蘇敎とても同じこと、我國に於ては今日の佛敎の樣に日本化したならば、どうか知らんが、生地のまゝでは迚も發達は出來ない。現に明治十六年東京に基督敎大會が開かれた時、小崎弘道達が「一人が毎年一人つゝ信者を得ば十四五年にして、日本國を全部信者にすることが出來る」というたさうであるが、十四、五年は愚か、四十年も經つてゐる今日基督敎の狀態はどうであるか。大正七年十二月の調査によれば天主敎外二十三敎會の會堂及講義所合して一四八三所、此牧師が內外人合して二五六六人其信者合計僅に一九三、四五一人（信者は大正六年調）しかないのである。これを三百五十年前天正年間の信者と比べて見ると面白い。天正十年當時の宣敎師コエホルの年報によれば天正九年末、日本內地の基督敎信者は十五萬人であつたといふことである。而して此十五萬人は彼のサビエルが渡來してから三十三年間で得た信者である。然るに明治初年から五六十年かかつて僅に十九萬人といふ現象は何を物語るものであらう。天正年間の人智と今日の人智と對照して考へて見れば、實に面白い結論を得るではないか。即ち耶蘇敎信者の增加率は人智の進步發達と反比例をなすものであるといふことを觀見するのである。尤も今日は、本場の西洋に於ても耶蘇敎は全く勢力を失墜し、氣息喘々爲たる狀態にあるといふことである。といふのは本年五月十日の倫敦電報に、同地の控訴院長バンクス氏が「倫敦四百萬市民が基督敎會に通

ふものは五パーセントに過ぎない。これ基督教が世界的不振に陷つたものである」といはれてるるによつて明かである。又本年四月四日より支那北京に開催せられた、第十一回基督教大會に對し、支那では南北同時に反對の大運動を起したのであつた。以上幾多の事實を綜合して考ふる時は耶蘇教は最早世界的にも、國家的にも滅亡の死地に一歩々々近づきつゝあることが判るのである。隨つて我國體の靈的力と作用とに對抗などは思ひもよらぬことである。然るに私達日本人の中の一小部分の人々が今尚覺醒しないで、十字架に隨喜の涙を流してるるものゝあるは情けないことである。

ハ、國體の尊嚴を體得せよ

以上述べ去り說き來つて、考へれば、我國が今日世界の三大强國の一に加はり、鑑ては世界文化の中心を掌握すべき機運の熟せるまでに至つた所以のものは、私達の祖先が世々相繼ぎ忠實公に奉じて來た努力も、勿論多とする所ではあるが、實は萬邦無比なる國體の靈的力と靈的作用とに外ならぬのである。從つて其靈的力と靈的作用とは一に、大御神の廣大無邊、日月と並び稱ふべき御神德の賜ものであるといふことが充分に會得されたであらうと思ふ。されば將來益我皇の聖謨たる道義的統一の一大御理想を實現し、私達が祖先の信念を繼承して、國家社會の安寧幸福を期せんとせば、須らく國體の尊嚴を體得して其靈的力と靈的作用とを朝に夕に不倦不撓、實踐躬行して行なければならぬ。又古語に「機を與ふるは天にあり、機を捕ふるは人にあり」といふ如く、今や天は我國に世界文化の中心たるべき機を與へんとしつゝあるのである。然るに私達國民が只々目前自己の我欲にのみ沒頭して、この千載一遇の機を逸したらば外、外國の侮りを買ひ內、祖先の折角築き來れる堅固なる信念を破壞し、上は聖謨に背き奉り、下は子孫に累を遺すものである。豈誠心して而して誠心せざるべけんやである。

大正十一年六月廿六日

伊勢山田市常設講演所開所記念講演會において

四　大祓式に就きて

當山春三

起因意義、沿革

一、現行の儀式　現行の我祭祀令には、恒例の儀式として、六月十二月の晦日に、大祓を行ふ事に定められてあるが、來る六月晦日行ふ大祓は夏越の大祓ともいうて、上は伊勢神宮より、下は諸社に至るまで、夫れ〳〵掟に據つて行ふのである。勿論宮中に於かせられては、最も壯嚴に行はせられる事は申すまでもない。畏き事ながら其模樣を承るに、先づ賢所の前庭なる神樂舍に、祓所を設けられ、午後一時に節折の御儀があり、次いで祓物等を具備せられ、同二時掌典長以下着床、同時に勅奏判任官總代、西の幄舍に着床、次いで掌典補二人案上の御麻に、祓の稻を挿む儀があり、次いで掌典長祓の事を仰すれば、掌典進べつゝ大祓詞を奉讀し、畢れば掌典一人進みて、案上の大麻を執りて退き、參列の諸員を祓へ了りて大麻を掌典補に授け、次いで掌典補祓物を執りて大河に參向し全く式を畢るのである(三殿圖解)。地方の諸社も、古から特殊の慣例のある神社は別だけれども、大體之に準據して行ふ樣である。

二、其意義　却說大祓といふは、百官已下臣民一般の罪穢を祓ひ清めるといふ所から、大祓といふので、令義解に「祓者解除不祥」とあり、即ち既往の罪穢を解除し、將來の福善を祈るの意義であるが、要するに諸々の邪念を去り、公明正大の至誠に至るといふので、俗の言葉でいへば精神の洗濯である。で、昔は朝廷に於かせられては、宮中で行はせ給ふと同時に、諸國に令して行はしめられたのである。即ち令に

凡六月十二月晦日大祓者、中臣上御祓麻、東西文部上祓刀、讀祓詞、訖、百官男女、聚集祓所、中臣宣祓詞、卜部爲解除、云々

又

凡諸國須大一者、每郡出刀一口、皮一張、鍬一口、及雜物等、戶別麻一條、其國造出馬一疋、云々

と仰せ出だされてある。如何に其示達の嚴重なものであつたかと同時に、如何に確實に執行され

たかさいふことが想像される。然るに今日では朝廷に於かせられては、昔以上に鄭重嚴肅に行はせ給ひてあるけれども、地方の官衙などでは、一向行はれてない樣である。尤も今日では、各神社に於いて行ふべき事に、定められてゐるから、地方の官職員は最寄神社に於いて、祓を受くる事が出來るから、殊更に行はぬのであらうとおもふ。ところが神社に出かけて祓を受ける官職員などは、甚だ稀の樣である。神社から案内しても中々出かけないようである。一般氏子崇敬者も同樣大祓式に參列するものが少いかと思ふ。是れは甚だ面白からざる事である。が併し、是れは官職員始め一般の人々に大祓の主旨が徹底しない故であつて、決して敬神思想が乏いなんといふのではない。畢竟神社側たる、神職其他の係員の努力の未だなる結果であるかとおもふ。

三、沿革　抑々大祓式は、神代に於て、伊邪那岐大神が、黄泉の國の穢れを日向の橘の小門の檀原に於て、御禊遊ばされたるに起り、素盞嗚尊の千座の置戸の祓に成つたので、天孫降臨の當時より、之れを天下に傳へしめ給ひしものである。其後、神武天皇の御時、天種子命に、天罪、國罪を祓はしめ給へし事、古語拾遺に見えてゐる（三殿圖解並大祓三條の辨）これより以降歴代行はせられたものであらうと拜し奉るけれども、仲哀天皇の御時まで、史乘に其事が見えないようである、則ち古事記仲哀天皇の條の、天皇崩御の段に「爲國大祓云々」とある。是れ大祓と稱する事の始めなりと延喜式祝詞解にいうてある。其後に至り天武天皇紀に見えてゐる。即ち

五年八月詔曰、四方爲解除用物則國別國造、輪祓柱馬一匹、布一常、以外郡司各刀一口、鹿皮一張、鑪一口、刀子一口、矢一具、稻一束、且每戶麻一條。又十年七月戊辰朔丁酉令天下悉大解除云々。又朱鳥元年辛丑詔諸國大解除。

とある。公事根源に大祓式は天武天皇の御時よりはじまるとあるは、右の詔に據りたるものであらう。然り而して六月十二月の兩度に、恒例として行ふ事になつたのは、文武天皇の大寶元年からのことである。然るに應仁以降は所謂戰國時代とて、此の如き由緒ある尊き御儀式も凡二百三十年間廢絶したのである。今にして思へば、實に畏しとも恐き極みである。東山天皇元祿四年に至り漸く御再興の運びとなつて、兎も角も明治の御代に至つたのであるが、明治四年六月に至り、更に舊儀御復興の旨仰せ出されたのである。こは眞に聖代の祥事にして、尊くも、また忝けなきことである。即ち同月二十五日に

大祓の儀從前六月祓或は夏越神事と稱し執行來候處全く後世一社の神事と相心得本儀を失ひ

候に付今般舊儀御再興被ゝ爲ゝ在候間追々天下一般修行可致樣被ゝ仰出ゝ候事

と布告あらせられ、次いで翌五年六月十八日其儀式を一定して各府縣へ達せられ、暦面にも記されたのである。

四、諸行事の意義　以上は大體の意義及沿革であるが、なほ其部分々々の名稱故實等にも、種々深い意義があるのである。左に其二三を擧げて兒童達の參考に供しようと思ふ。但これからいふ事は古事類苑、令義解、三殿圖解、大祓三條辨、さては俳諧歳時記其他に引用されてあるものを綜合したのである。

一、贖物（アガモノ）　貞觀儀式、延喜式等には、御贖物と申して、天皇及中宮東宮、各贖物に等差あることが記してある。要するに素盞嗚尊の千座置戸の祓ツ物の事であつて、前に述べた諸國の祓に郡毎に刀一口、皮一張、鍬一口、及雜物、戸別に麻一條を出したといふが如き即ち其贖物である。今日神社に於て行ふ儀式に參列して受祓するものが、若干の金品を納むるのも即ち此贖物の意義である。

二、節折（ヨヲリ）　前に述べた節折の御儀といふのが、其れである。これには種々の説明があるけれども、公事根源に「竹にて御丈の寸法をとりて、その程に折りあてがへばなり」とある如く、荒世和世の竹枝を以て、御丈を量り奉るので「ヨ」とは竹の節と節との間を俗に「ヨ」といふからであらう。又節折の御服、即ち荒世の御服、和世の御服と申す、天皇の御贖物の御衣もある。この荒とは惡祓に用ゐるの謂にして、和とは善祓に用ゐるの謂だとか、或は荒ぶる神を和す（なごす）の意義であるなど古書にあるけれども謂れなき事であると思ふ。この荒和の御服の事より荒和の祓といひたるを歌人などが、殊更にいろ〳〵の意味をこじづけたのである。藤原長能が「さばへなすあらぶる神もおしなべて、けふはなごしのはらへなりけり」とよみけるなどより其誤を世々に傳へたのであると、「松の落葉」の著者はいうてゐる。然もあるべし。歌としては左の如きが最も穩當にして芽出度ものではあるまいか。

霜さやく竹の葉風は荒妙の、よをりの神は猶や寒らん　秀長朝臣

水無月のけふくれ竹のよをりにぞ、君が千歳の數はそへける　土御門内大臣

三、名名越祓（ナゴシノハラヘ）「ナ」は夏の略にて夏越の祓といふので、不祥を解（はら）祓へ千秋に至るの義なりといふが、最も穩當の解釋ならんか。又邪神をはらへ和（なご）むる祓ゆゑ「和（なごし）」といふとも

ある（八雲御抄）或は和儺、荒和などゝもいふ。又「六月盡也、夏秋交代之時候、而夏火秋金火與金相剋、故越夏之名、攘相剋之災、故云名越之祓也」ともある（下學集、名越祓の註）

相生相剋「カツ」（克）は五行說にて五行の相互に關係して運行する狀態をいふ。即ち「木より火を、火より土を、土より金を、金より水を、水より木を生ず、これを相生といひ。

木は土に、土は水に、水は火に、火は金に、金は木にかつ（克）としてこれを相剋といふ。この相生相剋によつて萬物人事は消長變化すとあり。」思ふに今日大祓式と同時に、鎭火祭を行ふ神社のあるは、この意味から出たのであらう。

四、茅輪（チノワ）又菅拔（スガヌキ）　これは、菅或は茅を以て輪形を造り歌を唱へて左足より潛り越し、右足より出るこゝ三度するといふのである。其歌は

みなつきのなごしのはらへするひとは、千歳のいのちのぶなりけり

（拾遺和歌集よみ人知らず）

思ふこゝみなつきぬとてあさのはを、きりにきりてもはらへつるかな

（後拾遺集和歌集和泉式部）

といふのである。其茅輪の起因故實は、よく判らんが、備後風土記の蘇民將來の故事「素尊兒童たりし時牛頭天王と號す、又武答天神と云ふ。或時南海の女子と通じ日暮に會ぬ、宿を路の傍に借る、二人あり兄を蘇民將來といふ。兄は貧、弟は富、神弟に宿を求む不聽、兄に求め之を借る、粟の箕を坐として粟の飯を献ず。後八年にして神其八子を持て蘇民が家に來り、その德を報んぜゞし、敎へて茅の輪を作らしむ。其夜天下惡疫大に流行し人民死するも、蘇民の家のみ免かる。是に於て武答天神曰く我は素尊なり、今より以後疫起らば、蘇民將來が子孫なりといひて茅の輪を造つて其災を免かるべしと云々」は、其起因の樣であるけれども、茅輪そのものゝ意義については言うてない。此輪は神宮及宮中にも用ゐたと見えて、外宮神事著略に、外宮に於て行はせられた事が書いてある。又和訓栞「スカヌキ」の條に

茅の輪をいふ、輪二丈六尺圍八寸藁を以て造り、茅を心とし紙を以て纏へたる者也、內侍所の調進は茅のみを用ふといへり

とある。これを以て見れば內侍所に御用ゐになつた事が判る。又神祇提要に名越祓蘇麻輪の圖がある。其寸法に

經六尺四寸、蓋用ニ天二十八宿地三十六禽之合數ニ蓋輪者天地未分之象也云々

と書いてある。これ等によつて、おぼろけながらも、其由來を知ることが出來るか。

五、形代（タカシロ）これも素戔嗚尊の高天原に於て、手足の爪を拔きて其罪を贖ひ給うたに起因したのである。則ち神祇令や延喜式などにある、所謂贖物たる鐵偶人、木偶人、鐵人像など同じ意義である。

右の外麻葉流、祓草など色々の行事故實もあるけれども、大體以上の如きものである。要するに大祓の儀式は、古來清淨潔白を好む我國民性の顯現で、公明正大なる道義心の由て來る根本であるから國民として、臣民として、氏子として最も大切の行事であるものである。

大正十一年六月三十日大祓式後に於て

五　東宮殿下奉迎謹話

東宮殿下を奉迎して感喜の涙に咽ぶ

一

鵬程萬里、異鄕他國の制度文物、風俗人情等の所謂國ぶり、手ぶりの御視察、御見學を、御首尾よく、御濟させ給ひ、本日芽出度御歸朝遊ばされたる、我東宮殿下を玆に謹んで御迎へ申し上げ奉り、芽出度御歸朝を奉祝し得ましたるは、日本臣民として大和民族として、光榮且幸福此の上ない事であります、と同時に歡天喜地感極まつて、所謂嬉し泣きの涙禁じ得ないのであります。

遠き昔は誓ぐ措き、維新開國五十年この方、我國家に重大事件は多々ありましたけれども、今次東宮殿下御外遊の如き、重大事は未だ嘗てなかつたのであります。隨て今日の如く、吾等は腹のドッ底から感喜の血湧き、感泣の情の切なるものはないのであります。

○國力を堵して戰うた、日清日露の兩大戰爭に勝つた時、吾等は衷心から感喜の涙に咽んだ。尤も日清戰爭は、三國干涉の爲、感喜の涙は悲憤の涙と變じたのでありますが、それだけ日露戰爭に勝つた時は感喜の涙頗る深刻なるものがあつたのである。然も今日は其時よりも一層更に〳〵深刻なる感喜の涙に咽ぶのであります。

二

何となれば、殿下今次の御外遊は、一口に御外遊と申せば、至つて單簡の樣に思はれますけれども、どうして〳〵、そんな手輕のものではありません。先第一は御責任の範圍であります。抑殿下には如何なる御責任が伴ひ奉つてゐたのでありませう。勿論表面上には何等御責任も、御意義もあらせ給はぬばかりでなく、公式的何事にも御責任は帶びさせ給はぬのでありませう。けれども內面的暗々裡中には容易ならざる御責任が伴ひ奉つてゐたのであります。其御責任とは何ぞや。曰く皇統連綿、萬世一系、天壤と共に窮りなき皇室の東宮殿下として、萬邦無比の國體を有する國家の東宮殿下として、又五大强國の一たる日本帝國の東宮殿下としての御責任が含まれ奉つてゐたばかりでなく、皇紀二千五百八十一年の歷史を溯つて嘗つて前例のない、全く破天荒の盛事であつて、絕後とは申されぬとも正しく空前の重大事であつたのであります。この事に關しては諸外國に於ても大に注意を拂はれたのであります。殿下御發航當日たる三月三日の倫敦タイムスは、「日本の皇太子」と題し、社說中に

日本皇太子裕仁親王殿下には、日本橫濱を御出立、御訪英の途に就かせられるのであるから、今三月三日こそは日本歷史の上に最も記念すべき日である。皇太子にして日本の領土を離れられることは、日本の長い歷史に於て未だ其前例を見ない事で、今回を以て嚆矢とする。故に此の先例を開かれたのは、世界最古の日本王朝史に一つの新時期を劃するものであつて、一八六七年の王政復古と同樣の重大事である。云々（東宮御渡歐記による）

と書いてあつた。以て獨り我國に於て重大であつたばかりでなく、世界に大なる注意と反響とを與へた事柄であつたのであります。

加ふるに殿下の御頭上には、御父今上陛下の大御心、御祖父明治大帝の御聖謨が宿り給ひ、御背後には吾等七千萬同胞臣民の精神と期待とが伴隨し奉つてゐたのであります。蓋し殿下は「予は

常に父陛下、祖父大帝、及び國民と共に在り」と云ふ御精神、大決心を以て御出發遊ばされた事を拜し奉るのであります。御英明に渡らせ給ふとは申しながら、まだ二十歳の御青年にましまして、この重且大なる御責任を、而も知らず識らずの談笑の間に、遺憾なく、徹底的に御果し遊ばさうと云ふのでありますから、中々尋常の事ではないのであります。其の間に於ける殿下の御心勞は眞に如何ばかりであらせられたのでありませうか。拜察申し上ぐるも中々愚の至りであると思ひます。洩れ承はる處によれば、御滯英中の如き御旅館に於かせられて、深夜に尙明日の行事に關して、種々御考慮遊ばされて、短き夏の夜も寢ざめ勝に明かさせ給うたといふ事であります

夏の夜も寢ざめ勝ちにぞ明しける、世のためおもふことおほくして

との明治大帝の御製の御事實は、正しく殿下當時の、御心情に渡らせ給うた事と拜し奉つて恐懼の涙禁じ得ぬのであります。

三

次には御渡歐の御時期であります。歐洲大戰後日猶淺く、人心何となく荒立ちて、殺氣の火焰未だ全く鎭まらず、加之ならず一面には大戰の產物たる世界化的思想即ち反國家主義的思想が世界到る所に瀰漫し、而も我帝國を以て國家主義の本家と考へるはよいとしても、强暴なる帝國主義の權化なるが如く誤解しつゝある一部の危險分子が、當時各所に散在しあるやの風聞さへありました。一方には又例の不逞〇〇等が、所在に潛伏して、機の乘ず可きをねらひつゝあつたやの風說が傳つてゐたのであります。而も、これ單に風說風聞だけではなかつた樣でありました。御出發に際し御渡歐御見合を神佛にまで祈願した一部團體のあつたのは決して無理からぬ事で、寧ろ忠良なる赤子の至誠の發露であつたと信ずるのである。

吾等七千萬の同胞臣民は、御出發以來前後二百日、六ヶ月間一日片時も、其御靜動を案じ奉らぬ事は、なかつたのであります。每朝繙く新聞に、先づ眼を落すは、電報欄に於ける、殿下の御消息であつた。御無事の報道を見ては、其日々々に安堵の思ひをしてゐたのであつた。諸君、古今未曾有の世界大戰は、實に一九一四年（大正三年）六月廿八日、墺洪國の皇儲、フランツ、フエルヂナンド大公殿下が、ボスニアの首府セラエヲ市に於て、凶變に逢はせられたのが動機となつたのではありませんか。千萬一我殿下の御尊體に對し奉つて異變があつたらば其結果はどうな

るでありませう。勿論御巡遊先々の各國に於ては、全力を擧げて周到なる警戒に勤め、十二分に護衛し奉つた事ではあるけれども、不慮の災害凶變は、如何とも致し難い事があるもので、現に墺洪國皇儲の遭難の如きがそれである。當時皇儲はボスニア附近に於ける二軍團の演習を父陛下に代つて統監なさる爲に同地方へ出張になり、六月廿七日を以て演習が終り、同日イクゼの温泉に赴かれ、翌二十八日セラエヲ市の招待會に臨むとて、自動車でゆかれる途中午前十時頃第一回の凶行に逢つたけれども幸ひに別條なく、僅に隨員一、二の人々が輕傷を負うただけださうであつた。其式場に臨まれ、式終つて歸路の際、第二回の凶行に於て遂に斃られたのである。（其時が十時四十分）其犯人はボスニア生れのガヴリロ、プリンチープと云ふ中學八年生であつた。而して其凶器は爆彈でなく短銃で三發を放つたと云ふ事である。第一回の凶行に驚き一層嚴重の警戒をしたに相違ないにも拘らず、白面の書生の爲に、而も悠々と短銃で三發も放射の餘裕があつたのであつた。伊藤公がハルピンで斃れたのもさうである。

我國に於ても小山六之助の李鴻章狙撃の馬關事件あり、津田三藏の露皇太子斬りの大津事件等があつた。こんな事を考へて今次殿下の六ヶ月間の御巡遊に思ひ到れば、今更ながら、皮膚慄然として栗の生ずるを覺ゆるのであります。尤も凶變等はあるべき道理のない事は、初より信じて疑はぬことであつたのでありますが、それでも氣候風土の變つた土地、而も時は炎暑酷熱の際、御尊體に如何なる御障りがないとも計られないのでありましたが、何等の御障りもなく、凶變所か、こんな企てもあつたなどゝいふ噂さへ聞かなかつたのであります。

さうして今日芽出度く奉迎の式を擧ぐるまでに至りましたのであるから、これがどうして嬉し涙に泣かずにゐられませう。是れ全く皇祖皇宗の神靈御照鑑の賜もの、別して祖父明治大帝御神靈の御加護と、御父母兩陛下並に五千萬同胞臣民の至誠神に通じ、天神地祇の冥鑑冥護の結果であると拜し奉るのであります。

四

加ふるに、御巡遊の各國に於ては、實に有史以來嘗て例なき破格の御待遇を申上げたのであります。其待遇に對する殿下の、應酬應答の御挨拶、御演說から、御起居の一擧手、一投足の微に至る迄、實に堂々たるもので、少しも國威を辱しめ給はぬのみならず、大に威信を御發揮遊ばさ

れたのであります。今、諸新聞及御渡歐記等の報導を綜合して、今次御外遊の主要目的地たる、英國に於ける一、二の事例を擧げて見ませう。實に英國に於ては、上皇室より下國民に至る迄、誠を致し情を盡し、善を致し美を盡し。全英恰も鼎の沸くが如く、眞に熱狂的御歡迎を申上げたのであります。現に五月九日英國皇太子ウエールス親王殿下は海軍大佐の御正裝を以て前日よりポーツマス軍港まで御出迎へ遊ばされ、當日は、態々御召艦香取の艦上に成らせ給ひ、又皇帝陛下即ち大ブリテン、アイルランド王國皇帝ジョージ五世陛下は大元帥の御正裝を以てヴイクトリア停車場に成らせ給ひ、親しくプラットホームに御出迎あらせられ、引續き三日間は國賓として御待遇申上げ、而も九日の夜バッキンガム宮殿の夜會の席上に於て、陛下は

今夕殿下を皇后及予の賓客としてのみならず、全英國民の賓客として玆に奉迎するを得たるは予の深く欣幸とする所であつて云々

と、歡迎の御挨拶を遊ばされたのであります。

越えて五月十一日、倫敦市の歡迎會席上、倫敦市長の歡迎の辭の如きは、市長の態度といひ辭令といひ、實に、鄭重敬虔を極めたものであつた。

これが、太陽の殁する事のないと云ふ領土を有する大英國の皇帝陛下、人口五百萬を有する世界第一の大都市の市長の歡迎の辭であつたのであります。然るに殿下が倫敦市長への御答辭はどうであつたか。先づ冒頭に

余は倫敦市民の懇切なる歡迎を嘉納する。此歴史的に名高い室に於て、倫敦市民の名の下に、貴下が提出された歡迎の辭を衷心から感謝する云々

と音吐朗々と御演說遊ばされたのであります。此答辭は堂々たるといふ形容詞を通り越して、神々しき神の御聲かと怪まれた位であつたと云ふ事であります。日東帝國の國威、嚴として大山の如しといふべきでありませんか。

又新聞紙は有名なる倫敦タイムス、及日曜週刊オブザーヴァ紙を始として、諸新聞紙が一齊に口を揃へ、筆を揃へて、殿下の御英明に對し、辭典上にある總ての賛辭、美字秀句を連ねて敬意を表し奉つたのは決して義理一片の賛美ではなかつたのであります。

以上は英國に於ける一例でありますが、御巡遊の各國悉く同樣であつたのであります。

是れ畢竟殿下の御英明御盛德の然らしむる所であつた事は勿論でありますが、一面に於て正し

く、國運の發展を裏書したものであることを思うて、眞に肉跳り、血湧き、只管感喜の涙に咽ぶのであります。

五

嗚呼三十年前、日清戰爭の時、三國の干涉に涙を呑んで屈服した事を追懷して、(當時の馬關條約、及二十八年五月十日の御詔勅を拜照せよ)眞に今昔の感に堪へぬものがあるではありませんか。

是れ併しながら、皇祖皇宗の神靈照鑑と天神地祇諸神の廣き厚き恩賴の下に、君民一體同心協力して奮鬪努力せる賜ものであると信ずるのであります。

吾等は日本臣民として、大和民族として今日の芽出度き感喜の涙を永久に記念し、益々忠勤を勵み、以て豐榮昇る旭の如く、皇威國光を中外に宣揚發揮せんことを誓ひたいと思ふのであります。

大正十年九月三日仙臺市櫻ヶ岡公園に開催せられたる縣市聯合奉祝會席上に於て

奉祝　外國の人もあふかむ高ひかる、ひつぎの御子のしるきみいつを

六　更に新時代に

大正十年十一月六日

世は歐洲戰亂により新時代に這入つたことはいふまでもないが、我國は今次　東宮殿下の御外遊により、更に一新紀元を劃することになつたものと思ふ。而も前者の場合は何となく恐怖的暗黑的墮落的といふやうの嫌な意味否事實が伴うてゐたやうに思はれたが。後者の場合はさうでなく何となく光明的道德的緊張的といふやうの愉快の意味否氣分が漲つてゐる如く思はれるのである。即ち眞の進步的新時代、覺醒的新時代、更にいへば所謂文化的新時代に這入つたものといふべきであらう。否這入るべき道程についたものといふべきであらう。

何となれば我國は　東宮殿下の御外遊により非常に偉いものになつたのである。別な形容詞で通俗的にいへば素晴らしく男振を上げたといふのである。實は今日までは列强の班に這入つたといふものゝ、內自ら顧みて多少氣遲れもしてゐたし、外列强の連中も口でこそ東洋の盟主だなどとお世辭をいうてゐたけれども腹の裡では「日本の成上がりめが」位に思うてゐたではあるまい

か。事實さう思つてゐたであらうと思ふ。さう思はれる事實は既往に於て幾らもあつた。就中ヴエルサイユの講和會議の時などは屢々あつたと思ふ。ところが今次　殿下の御外遊によつて全く東洋の盟主たる、否列强の一としてはぢない眞の偉さがよく判つたのである。即ち三十年前三國の干涉に涙を呑んで屈服した樣の幼若の男でなく堂々たる好男子になつた男振りが鮮かに披露されたのである。但其好男子といふのは體格容貌が堂々たるといふだけではない、其偉いといふのは權力や金力や武力が偉くなつたといふのではない。所謂花も實も血も涙もある眞の人格的好男子に、即ち名實相伴ふ至誠的、人道的、至情的、道義的、偉い國であり、偉い國民であるといふことなのである。

然るに玆に一つ退いて考へなければならぬのは、其偉いといひ好男子に成つたといふのは、全く　殿下の御英明にわたらせ給うた結果の賜ものであつた事である。殿下の崇高なる御人格によつて得たる名譽であつた事である。實をいへば本質以上に眞價以上に　殿下の御力により紹介せられたのである。そこで吾等國民は御互へに緊褌一番して殿下の御英明を辱しめ奉らぬように、殿下の崇高なる御人格を傷け奉らぬように奮勵努力しなければならぬと思ふ。それに就ても吾等國民は殿下の御心の在らせ給ふ所を拜察し奉つて其御心を心として行かなければならぬと思ふ。

殿下御歸朝後總理大臣を經て國民に下し賜つた令旨こそ、實に殿下御心の依つて存する所の御一端であると拜し奉つて誤りなからうと信じ奉るのである。其一節にのたまはく

大戰の跡を尋ね慘憺たる光景歷々猶存するを目擊して彌々世界平和の切要なるを感じ戰時聯合國民が困難の爲に發揚せる犧牲の精神偉大なるを追想し更に戰後孜々として文明の興隆に努力せる氣象を看取し感興最も深く稗益を獲ること頗る多かりき云々

惟ふに我に國粹の精華ありて固有の特長に屬す然れども我國の宜しく他邦に學ぶべきものも亦尠からず。予希はくば國民と共に維新の宏謨に則りて今後益々奮勵し彼の長を取りて我の短を補ひ國運の隆昌を期し世界文化の發展に資して以て皇上陛下の聖意に副はむことを

と、誠に難有い令旨ではありませんか。吾等は此御心を心として衷心から世界人類幸福の爲に世界平和の實現に貢獻しなければならぬ。同時にまた聯合諸國の既往に於ける犧牲的精神の發揮と、現在に於ける文明の興隆に努力しつゝある氣象に學び、因て以て我國粹の特長を發揮しなければならぬ。而も誤れる敵愾心に囚はれ、徒らに排外的思想に馳られず、須らく心懷を廣大にし至

誠にし、宜敷く採長補短、以て「皇上陛下の聖意に副はむ」と仰せ給ひたる　殿下の御心を體し奉るべきであると思ひます。謹言

七　巡回感想

大正九年九月廿八日

講演の爲遠方の地方へ初めて出張巡回した場合は、時により日時順に日誌樣のものは、度び〻〻書きましたが、こゝ更に感想的のものは餘り書きません、書いても、多くは地方的局部に限つたことで餘り參考になりませんが、本稿はいくらか、三千年の昔を偲ぶよすがともならんかと思うたまゝこゝに加へたのであります。

私は、今年は不思議の因緣で、春から二回九州は大分縣へ、皇道講演のため出張した。即ち第一回は三月中旬から四月初まで、第二回は八月末から九月中旬まで、二回共約三週間大分縣の栗に活きたわけである。袖振り合ふも多少の緣、躓く石も緣の端とかいふが、自分の所管内の仙臺地方でさへ、まだ一度も行かぬ所もあるのに、五百里遠方の九州まで半歲の中に二度も行き、而も前後通じて一ヶ月以上も厄介になつたといふは、所謂范睢か「遠交近攻」の策を眞似たのでないかと思ふ樣であるが、決してそんな生意氣の考へでなく、全く偶然であつて實に不思議の因緣といふより他ないのである。巡回中實地目擊した二三の事柄について一寸感想を述べて見ようと

思ふ。というて何にも斯道研究上の資料にしようといふのでもなく、又大方諸君の參考に供しようというのでもない。單に他の地方より態々出張した私として、又我上代の歴史と最も深い關係を有つてゐる地方を實地歩いた私として、若干の感想を述べるといふことは、禮儀でもあり、義務でもあると信じたからである。

一、神武東上と豊後水道沿岸

大體に於いて九州一圓は、我上代の歴史資料に富んでゐる所であるが、大分縣地方も無論其一である。特に豊後水道の沿岸は我上代史中、神武天皇御東上の御事蹟とは頗る深い關係を有つてゐるのである。然るに今日の所謂學者と稱するもの、動もすれば、我上代の歴史を妄評し、曲解し、甚しきは史實を抹殺せんと企圖するものさへ往々あつて、天皇の御鴻業に對し奉りても種々臆測を逞しうするものあるが、實に思はざるの甚しきものである。

當時皇艦の航路たりし、豊後水道の沿岸を仔細に踏査すれば、當時の史實を語る資料の頗る豊富なるに驚くのである。今其中の最も著しい二三を擧げて見ようと思ふ。

「日向泊」由來此沿岸は良港灣の多い所て、佐伯、臼杵、竹田津を始めとし、大分灣内では佐賀關、別府、守江等あり。又日向堺の上入津、名護屋等で中々立派な小港灣である。今日此等の港灣は、航路の要港として、船舶の碇泊所となつてゐるのであるが、三千年の昔皇艦東上の際も矢張此等の港灣に碇泊遊ばされたのである。例へば佐伯灣の入口の大入島といふ島の南岸と佐賀關町上浦港の西岸邊りに「日向泊」といふ地名があるのは其れである。これは皇艦日向より航行し來りて泊られたといふので名付けたのであるといふ。この佐伯灣は恰も支那山東省の威海衛に酷似し、其規模の小さいのゝ見れば間違ひない。大入島は先づ劉公島といふ型である。今日我海軍が碇泊したり演習したりするのも、其良港灣たる故であらう。

「早吸日女神社」佐賀關上浦港の海岸を距る數町の西端に「早吸日女神社」といふ縣社がある。祭神は今日の明細帳には表筒男、中筒男、底筒男、八十枉津日、大直日外一柱となつてゐるが、神祇誌料には、水戸神速秋津姫命であらうとしてある。早吸名門に關係を有つ上に於て、それが事實ではあるまいか。尤も諾神の身禊は、日向の橘の小門でなく、此早吸名門であるといふ說もある。此說是なりとせば今の祭神も早吸名門に關係があるわけだ。それは兎に角として、此神社

が、皇艦東上に深い因縁のあることは事實である。豐後國誌には「神武帝、東征時、到二此門一、祭二速吸神一、遂創二鴻業一」というてあるのでも判かる。

「椎根津彦神社」同しく佐賀關町の南方下浦海岸を距る數丁、町の西端に「椎根津彦神社」といふ縣社がある。祭神はいふまでもなく、椎根津彦命即ち珍彦命にして、當時皇艦を名門に奉迎し航海長として忠勤を盡された神であつて、皇艦東上とは、一層因縁が深いのである。

「伊勢本明神」又日向堺の近くの上入津港の海岸大字畑の浦に「伊勢本明神」といふ村社がある。これは天皇を奉祀したので、其神體は、常時天皇の水醬を容れ給ひたる德利であるといふことである。

「足一騰宮」又宇沙都比古、宇沙都比賣の天皇を奉迎した、足一騰宮の遺蹟がある。

以上は悉く三千年昔の鴻業の蹟を考證するものである。此等の史實資料を以て、單に後人が地名から考へた、地名傳說に過ぎぬといふならば、餘りに馬鹿々々しき評ひごとゝいはねばならぬ吾等の祖先が態々神社まで建立して、其鴻業の蹟を欽仰するといふことが、戯談や面白半分に出來るものでないことは常識を以つても判斷が出來るではないか。

二　史實の考証

大分縣一圓に於ける上代の史實考證の資料は、獨りこればかりでなく、景行天皇の土蜘征伐等に關しても幾多確たる考證資料があるのである。けれども今は之を省略し、序に「蟹守」の事を少しくいうて見よう。

「蟹守」は古語拾遺の豐玉姫命產褥の條に「作箒掃蟹」といふことがある。これは海邊に產室を造つたのであるから自然と蟹が這込んだのであらうと、鹽尻の著者天野信景翁（信阿彌）は說いてあるし、大概の人は、然う信じてゐる樣であるが、私は嬰兒の胎糞を「カニババ」といふから詰り糞尿の掃除をしたといふ樣の意味であらうと考へたのであるが、今度親しく、此地方に足を入れて見れば海邊は勿論であるが、田野一帶非常に蟹の多いのを見て、當時產室を建てられた日向の海邊（日向國那珂郡宮浦村の海邊に其御跡というて大なる窟あるもこは如何あらむと記傳にいへり）も無論斯うであらうと思うて、白華翁の所說を事實ではないかと思うた。中山太郎氏は鄕土趣味（第二〇號）蟹守土俗考中に「翁が斯くいうたのは、天和三年の夏或海邊の旅亭に宿り蟹の多くゐるのを目擊して、神代の故事を想ひ合は

したのに過ぎぬことで、深く言ふに足らぬことである」というて、土豪問題にしないのである。さうして氏は蟹守の說明に關し結局結論として「蟹が獨りで自然に產室に這入つたのでなく、所產の御子の生命の不滅を祝福する爲の信仰から蟹を態と產室へ這はせたのである」というて、幾多的確なる土俗上の事實と、文獻上の引證を擧けて考證せられてゐる。此所見に對しては多少の愚見ないでもないけれども、今は之を議論する場合でない。のみならず、所說の贊否は別問題として、氏の發表は我古典研究上、非常なる裨益を與へるものであるから、古典研究の同人諸君は該誌を是非一讀して欲しいと思ふ。

三　小藩割劇

「舊藩時代」今の大分縣は豐後の國一國と豐前の國一部を加へて一縣を成してゐるのであるが、遠き上代のことは暫く措き、鎌倉時代に至り、大友家が約四百年許りの間、領主として統治してゐたのである。即ち初代の大友能直は、頼朝の庶子で母方（上野國利根郡司大友相模守經家）の大友を冒したのであるが、建久七年豐前豐後の守護に任し尙鎭西奉行を兼ねたのである。爾來子孫世を襲ふもの二十二代、三百九十八年に及んだのである。尤も此三百九十八年間、豐前豐後全部が大友家に統一的に統治せられてゐたかといふに、强ち然うでない。豐後の國中にも、公家の莊園、社寺及國人の諸領もあつた樣である。

けれども先づ大體に於て稍統一してゐたのであらうと思ふ。然るに二十二代の義統が朝鮮役に罪を獲て亡ぶるや、秀吉は之を其功臣太田飛田守重正以下五人に分與した。次いで德川に至り家康は其功臣竹中伊豆守重隆外七人に分與し、其外に所々直轄の天領もあつた樣である。是れ德川が九州の大名に對する何か意味ある政策であつたのであらう。右の如く小藩割據の狀態で、凡そ三百年（文祿二年より明治元年迄）間も續いたのであるから、各藩每に風俗人情も異なるに至り、從つて割據的精神が段々高調したことであらうと思ふ。

「維新後」右の舊藩、時代に於ける割據的精神は維新後に於ける、本縣の發展上に多少の累をなしたではあるまいか。今より一千九百年前景行天皇（十二年冬十月）は此地方に行幸まし〳〵其地形が廣大にして麗はしいとて殊に碩田（おほきた）と仰せられたといふことが書紀に書いてある。其位本縣は昔から豐の土地であつたのである。實際今日でも、海陸ともに、其地勢は優勝であるし。產物

亦豐富であつて、到底他の地方の及ぶ所ではない。かゝる優勝の地勢と、豐富の産物との天惠を有つてゐるのであるから、普通なれば非常に發展しなければならぬわけであると思はれるが、今日までの經過に見れば、他より進んでは居るけれども、天惠を有つてゐる割合に、進み方が遲いではないかと思はれる。是れ確かに割據的遺風が禍根をなしたのであらうと思ふ。が併し　それは既往のことであつて、現存では官民共に、其禍根を發見し、互に之が除去に力め、全く割據的地方感情を捨て、協同一致以て時代の趨勢に順應し、縣としての價値ある發展をなさんことに鋭意しつゝある樣である。これは實に本縣の爲に慶賀に堪へぬ次第である。近來神職會などで毎年巡回講演を開催して、民心の啓發と統一とに努力してゐるのも、其一端の現はれであらうと思ふ。希くは此機を逸せず大に奮勵努力を願はしいのである。何となれば機を與ふるは天にあれども機を捕ふるは人にあるからである。

四　敬神思想

「神社破壞」大友家第二十代の領主義鎭入道宗麟は基督教の信者となり、聖名をフランソアーと稱し、死んだ時は基督教の儀式を以て葬儀をやつたと、いひ傳へられてゐる。其爲めであつたか宗麟は暴力を以て神社佛閣を破壞したのである。只八幡神社だけは、源家の氏神であるといふので、流石に手を觸れなかつたさうである。(尤も全部ではない)。今日本縣に八幡神社が非常に多いのも其わけらしいのである。尤も宇佐神宮と云ふ、神威顯著なる大社のある關係もあつたのであらう。現在の所、各町村の鎭守の神は大概八幡社であつて住吉とか、春日とか、山王とかいふのは至つて稀である。

「現在の發展」以上の如き歷史を以てゐるのであるから、普通から考へれば、今日も基督教は非常に盛んであつて神社は甚だ振はぬであらうと、何人も直ぐ想像することであらうが、それが全く反對の現象を呈してゐるから妙であると同時に頗る嬉しいのである。現在の處本縣の基督教は他の地方に比べて著しく發展してゐるとはいはれない樣に見受けられる。而して神社はどうであるかといふに、八幡は勿論であるが其他の神社と雖も、悉くではないが大體に於て、其社殿やら境内やら實に立派なものである。中には縣社以下でも他の地方の官社よりも外觀内容ともに優れてゐる神社が尠くないのである。以て如何に本縣縣民諸氏が敬神の觀念に厚いかといふことが判

るではないか。特に本縣の山手に屬する玖珠、日田郡地方には通常の神社の外に、更に各村毎に伊勢神宮の遙拜所がある。それが立派の神社式的建物であるばかりでなく四季折り〳〵の祭典等が非常の殷賑を極むるのなさうである。之れは全く他の地方では多く見られない風であつて實際敬神思想の熾烈なる反映であらうと思ふ。

只玆に深く〳〵一考を要すべきは以上の神社及遙拜所は現代人の經營に成つたのは極めて少く大概は先人の手に成つたものであるといふことである。露骨にいへば先人の手に成つたものが、僅かに今日に保存されてゐるので、今人の新しき信仰の反映と見るべきものが、殆どないといふのである。中には其昔社殿境内等が立派であつたゞけ、それだけ今日では却て物の憐を偲はしむる的の神社もないではないのである。

併しながら本縣人の血液中には慥に先人の熾烈なりし、敬神思想の血潮は流れてゐるのであるから、啓發指導宜しきを得れば非常の勢を以て噴湧するであらうと思ふのである。而して之れが啓發指導の任に當るものは誰であらう。いふまでもなく神職其人である。私は此機會に於て本縣神職諸氏の前途を祝福し、併て一層の活動を希ふものである。

八　世界に類例なき紀元節と改造

大正九年二月十一日

一、大戰の結果世界地圖の色彩は勿論、國家社會の組織から、制度風俗まで悉く改造されることとなり、世は混沌として騷擾又喧噪を極めてゐる。其中に在つて吾等は玆に二千五百八十回の紀元節を迎へ奉るのである。さうして徐かに二千五百八十年の歷史を回顧する時、何人も一種いふべからざる崇高の感に打たるゝであらうと思ふ。改造は無論必要である、結構であるが併し破壞とは違ふ。故に改造の計畫は此の二千五百八十年の歷史に鑑みて立てねばならぬ。否更に神代の昔に溯つて考へなければならぬのである。此際此秋吾等は先づ紀元節の意義を體得したいのである。

二、謹で案ずるに、人皇第一代神武天皇甲寅の歲日向高千穗の宮に諸皇族を會せられ「吾聞東方有美地山嶽四周足以恢弘天業」と詔せられ十月御親ら將として東征の途に上り給ひ筑紫之岡田宮安藝之多祁理宮及吉備之高島宮等に帶陣して舟楫兵食を備蓄し、進んで大和地方に攻め入り給ひ

兄猾八十梟帥長髓彦等を始じめ諸窟居の賊共を誅せられ給ひたので、その間に於ける惡戰苦鬪實に名狀すべからずであつた。皇兄五瀨命は孔舍衛坂に於て戰沒遊ばされ、同稻飯命三毛入野命は海風を鎭めんとして自から海に投じて果て給ひ（古事記には稻飯命は海原に、三毛入野命は常世國に渡らせ給へるとある）以つて全軍の犧牲とならせ給ひたるが如きその一斑が拜察し得るのである。

三、斯くて中洲悉く平定するや、己未の年建都造宮の儀を仰出され天富命は手置帆負、彥狹知二神の孫を率ゐて齋斧齋鉅を以つて造營の事に奉仕したのである。而して工竣るや辛酉正月御即位の禮を行はせられたので、今を去る實に二千五百八十年前の一月二十九日であつた。此の日を以つて國家の大祝日と定められたのは明治五年十一月十五日、次いで翌年三月七日紀元節と改稱せられ、明治七年以後は太陽曆に換算し二月十一日と定められたのである。

四、扨世界の各國には種々の紀元が用ゐられてゐる。然れど我が國の如く國祖即位の年を元年とし一國一元を以つて上下三千載を一貫し終始渝らぬものは絕えて莫いのである。例へば古代希臘人は今日歐米にていふ前七七六年オリンピヤ祭の時を紀元とし、羅馬人は同七五三年羅馬府建設の年を以つてし、中央亞細亞方面の各國即ち土耳古、埃及、波斯、その他麻哈默德教徒は麻哈默德のヘジラを紀元としてゐる。麻哈默德は五七一年メッカに生れ、長じて隊商となりシリヤ地方に行商せしが、後思を宗教に凝らし基督猶太兩教を參酌してイスラム教（回々教）と云へる一神教を說き自らその神の豫言者と稱せしが、メッカ市民の迫害を受け六二二年難を北方メヂナに避けた。教徒はこれをヘジラ（遁走の義）というて此歲を紀元々年としたのである。これが丁度我が推古天皇の世、聖德太子薨去の翌年に當るのである。

五、現今世界に最も多く通用してゐるのは基督紀元であるが、基督は我神武天皇即位紀元後六五六年に猶太に生れ、猶太教に基づき別に一宗を開いたもので、その沒後五〇四年ヂオニシウス、エキシギユースの主唱によつたのである。斯く英、米、獨、佛等の列强は勿論各國が一貫せる一國一元を用ふることが能きないで、宗教的共通紀元、而も他の國で出來た紀元を用ふるの止むを得ない所以のものは何故であらう。幸ひ本尊たる基督、麻哈默德の生れた國が今日何等政治的にも、軍事的にも勢力がないからよいが、若し相當の勢力があるものと假定したらば、この紀元を用ふる國は自然にその國の勢力に服從したものといふべきではないか。殊にヘジラ曆紀元の如き、遁走を紀元とするなど、甚だ好ましき事でない。尤も教徒はこの遁走によつて却て信仰上多大

の稗益を得たものとし、之を記念する考へかも知れぬ。恰も鹿兒島の青年會で毎年九月卜四日薩祖島津義弘が關ヶ原の敗戰に當り突擊して、一方の血路を開いた勇猛を偲び、その靈を慰むるため鹿兒島を距る七里の德重神社へ參詣すると同樣の意味であらうか（前著大四三頁已下參照）

六、要するに各國の國家は其成立が殆ど革命爭奪によつて成つたのであるからどんな國でも敵國外寇の蹂躙を蒙らぬものはなく、朝興暮亡定りがないから、一國一元を以て一貫することが出來ないのである。我國は建國以來敢て華美やかなる發展をしたといふわけではないが併し未だ嘗て敵國外寇の蹂躙に逢うた事がないから、玆に國祖即位の年を紀元とし、三千年を一貫し、更に永久に濫らぬのである。是れ畢竟立國の根本が違ふからで實に尊しとも、有り難しともいふような次第である。此根本を比較研究して而して改造計畫を立てゝ欲しいのである。

九　耶蘇の素性

大正九年一月　日

一　耶蘇の出生

新約全書馬太傳第一章の記する所によれば、基督はアブラハム四十二代の後裔で、父はヨセフ母はマリアといふことになつてゐる。即ちアブラハムよりダビデに至るまで十四代、ダビデよりバビロンに徒さるゝまで十四代、バビロンに徒されてより基督まで十四代といふのである。而して其出生につき同傳には左の如く書いてある。

一八　それイエスキリストの生れ給へること左の如し。其母マリアはヨセフと嫂定をなせるのみにて、未だ偕にならざりしとき、聖靈に感じて孕みしが、其孕みたること顯れければ一九　夫ヨセフ義人なる故に之を辱しむることを願ず、密に離緣せんと思へり二〇　斯て此事を思ひ念せる時に、主の使者かれが夢に現れて曰けるは、ダビデの裔ヨセフよ爾妻マリアを娶ることを懼るゝ勿れ、その孕める所の者は聖靈に由るなり二一　かれ子

を生まん、其名をイエスと名くべし、蓋はその民を罪より救はんとすればなり云々二四
ヨセフ寢より起きて主の使者の命ぜし言に遵ひし其妻を娶りたれど二五　象子の生るゝ
まで牀を同にせざりき、其生れし子をイエスと名付けたり云々

右の傳を基督信者が「聖靈に感じて」といふ所に隨喜して、神の子と渴仰するは別として、普通の人が、普通の眼で、普通に之を見て何と解釋するであらう。神の子と渴仰しない限りは、どうしても私生兒と見るより外あるまい。「不義の子といふより他あるまい。成程良人なくして生れた子であれば私生兒と見られても仕方がない。嫂定の良人がありながら未だ僧にならぬに孕める上は不義の子といはれても仕方がないのである。之を今日の倫理道德觀念からみれば、母、マリアは不義亂倫の甚しきもので、其名を口にするさへ不快を感ずる次第である。が、併しだ、之を今日の發達したる道德觀念を以て律するといふことは少しく早計であり、酷であらうと思ふ。之に公平なる批判を與へんとせば、須らく當時に於ける道德觀念の程度標準及習俗等を考へてみなければなるまいと思ふ。一體道德は習俗と相伴ふもので、習俗が異へば、道德の標準も自ら異ふし習俗が變化すれば、隨つて道德の標準も變化するものであることは、今日の實社會に於ても同樣である、故に當時の習俗を知れば自ら道德觀念發達の程度並其標準等も判かることであらうと思ふ。

二　淫猥なる習俗

然らばどういふ習俗が行はれてゐたであらうかといふに、當時亞細亞土耳其、亞剌比亞地方及地中海東沿岸一帶の習俗として、女は或一人の男の正式の所有となる以前に於て必ず先づ他の男の自由となるの風があつたではあるまいか。即ち小亞細亞地方に行はれた、ホーリ、プロスティチユションの如きは其のよい例であらうと思ふ。此ホーリ、プロスティチユションについては、比較宗教學者の加藤玄智博士が嘗て明治聖德記念學會に於て「何物か是宗教」と題する講演中に幼稚なる宗教の引證として話された事がある。其れに從ひて、大要をいへば「小亞細亞にアルタステイといふ女神がある。此女神の祭りは大抵森林中で行はれるが、其森へ若い女が出掛けて一夜を明す。さうして此女神に仕へてゐる所の坊主が、此等の女を犯すのである、然るに女等は此坊主を神の現はれと信じ、神と接觸同交したものとして喜ぶのである」といふことである。これは博士のいふ如く幼稚なる宗教即ち迷信から來たことではあるが、正しく彼の地方の一つの習俗

であることは疑ひないのである。又昨年の夏發行の鄕土趣味誌上に各國の奇習と題し原始民族の男女關係に於けるヘタリズムの引證としてヘロドタスがいうたバビロニア其他の風俗が紹介されてゐる。此ヘタリズムは前述のホーリ、プロステイチユションと似たもので、畢竟これを裏書したものである。其れに從うて大要をいへば「バビロニアでは有ゆる女が生涯に一度は必ず「ヴエナス」の神殿に詣でゝ、他國の男と接しなければななぬ。男等が一片の銀を女の膝に抛げながら私はおまいを愛することを女神ミリタに希ふと云ふ。すると女は社の外でその男と抱擁しなければならぬ云々。又サイプラスの或る地方にも之に似た風がある」といふのである。ヘロドダスは前五世紀時代の希臘の歴史家で、歴史の始祖といはれた有名の人である。又バビロニアはユーフレテス河畔の古代最大の都府で前二、二〇〇年代の創設であるといへど確ではないが、兎に角基督の生れた猶太とは接近せる接續地であるし、サイプラスとは多分地中海にあるサイプラス島のことであらうと思ふが。それとせば小亞細亞の海岸から六〇哩シリア即ち元の猶太海岸を距る僅四一哩の海中に在る島である。即ち此地方一帶の習俗として、良人なくして子を生むといふことは何でもないのである。されば基督の母マリアも、其習俗に從うたに過ぬのであるとみるが、最も穩當の判斷であらうと思ふ。即ち當時の幼稚なる道德觀からすれば、不義でもなければ、亂倫でもないのである。寧ろ道德に副うたものであつたかも知れないのである。斯の如き宗教的迷信から來た淫猥の習俗は、獨り此地方ばかりでなく何處にもあつたのである。河口慧海氏の話によれば印度の秘密教徒は總ての善い事を神に供養するのは結構なことであるとて、交合の快樂を神に供養するといふ名の下にベナレスあたりでは、家族が息子も娘も親も女房も、又他の家族の人々も一つ所に集合して肉を食ひ酒を飲み、これが濟むと、今度は燈火を消して、誰れでも構はず女に當れば提まつて交合の慾を實行し、それで以て神に供養したというて喜んでゐるので、今も現に行はれてゐるといふことである。又南米ベリューの或地方の未開種族の女は、二年間だけ其種族の神聖なる神社の巫女となり、神に仕へると同時に種族の有ゆる男の要求に應じなければならぬといふことである。さうして生れだる子を神の子というてゐるさうである。歐米人が此地方へ旅行し、土人の家に宿つた時に其土人の妻は、公然と今の亭主の子が何人、神の子が何人というて旅人を驚かしてゐるといふことである（鄕土趣味第十四號）

三　基督の信仰

以上の考證によつて基督の出生は、當時の習俗に從うたものであるといふことは極めて明かな事實なのである。然るに强ひて之を神聖化せんとして聖靈に感じてなと、聖書に書いたのは、餘りに見え透きた手細工で、却て人をして不快を感ぜしむるかと思ふ。其又手細工を眞面目になつて隨喜渴仰するに至つては氣の毒の至りだと思ふ。矢張平凡に當時の習俗に從うたのであるとしておく方が、どれほど基督を偉くするか知れないと思ふ。基督の教義や主張の善惡は別として、彼が一大工職にして目に一丁字もなき無學者でありながら、三十年間靜默を守り、而も奮然として一度蹶起するや靈界の爲に一大教義を宣傳するに至つた事は、確かに偉人たる資格を具備したもので、何人も賞贊するに躊躇しないのである。基督が無學なれども堅き信仰の爲に成功したのであるといふことは、蘇國ゼームス、ストーカー氏が其著基督傳にいうてある。即ち曰く「彼は元來無學文盲のガリラヤの一平民なりし事を思へば其成功に就いて彼が抱きし動すべからざるの確信は其成功よりも一層驚歎すべきなり云々」と。これこそ眞に基督を解したものであると思ふ。

かくてこそ基督の偉い所が判るのである。然るに此大偉人が聖靈に感じて生れたのでは何等の價値も認められぬのである。豐太閤が尾州中村の土百姓から出て、關白とまでなつたから、偉いのである。藤原氏がいくら顯位に上つたからというて、左まで世人の注意をひかぬと同じことである。併し又基督教に反對する者が、坊主憎めば袈裟までの流義で基督を私生兒だの、不義の子だのと罵倒するのは思はざるの甚しいもので、會々以て襟度の狹きを告白するものである。上杉謙信が武田信玄の死を歎いた涙と雅量とがなければならぬと思ふ。

一〇　新思想の觀察

大正九年一月一日

一　平和の第一年

最も記念すべき平和の第一年であつた大正八年も、戰後山なす世界的諸問題を解決するに至らずして暮れ去つたのは、何となく名殘惜しい氣がする。とはいへ、こゝに新鋭にして而かも希望ある第二年の大正九年を迎へたのは、また何となく喜ばしく感ずる次第である。何といつても、新年は新年だ。紫雲天に靄いて、瑞氣門に集るといふわけで、此處彼處に祝宴の歌も聞え、屠蘇機嫌の賀客の顏も、例によつてニコ〳〵たるは、偏に聖世のたまものである。併し年は改つても、世界的懸案たる諸問題は解決したわけではない。政治問題、經濟問題、社會問題、勞働問題等數へ來れば今年も昨年に倍して多忙を極め、而かも幾多の波瀾曲折に逢着するであらう。私は今、新年の賀辭を述ぶるに當り、世界的懸案たる諸問題の根本ともいふべき思想問題につき、聊か述べて見たいと思ふ。

二　新思想と壓迫

附　露國の暗殺時代

偖、世界改造とかデモクラシーとかいふ言葉は、最早月並的常套語のやうになつて、稍陳腐の感がするのであるが、併し實は未だ之に對し明確なる說明、適切なる解決が與へられてゐないやうである。少くも尙研究の餘地ある問題たる資格はあらうと思ふ。

澎湃たるデモクラシーの來襲により昨今我國の上下が何となく騷々しく、盛んに塵埃の揚るが如き狀態の見えるのは何人も認めてゐることであらうと思ふ。然るに之を視て、直に我固有の良風美俗を破壞し、精神思想を攪亂するものとし、今にも國家が滅亡するが如く、今にも國體が破壞せらるゝ如く思惟して、之を怖れ、之を憎み、努めて之を避け、之を抑止し、之を排斥せんとし甚だしきは之を壓迫せんとするものが稀にあるようであるが、これは所謂杞人の憂か、然らざれば頑迷因陋の舊思想に捉れたものである。勿論避けんとして避けらるゝものでなく、抑へんとして抑へらるゝものでないばかりでなく、避けるのは別として、抑へるのは却て惡いと思ふ。特に

壓迫は大の禁物である。假令論者のいふが如き事實があるとしても、壓迫は甚だ危險である。それは前露國に於て良い殷鑑がある。即ち十九世紀の中頃(一八五五一八七〇)最も盛んであつた、破壞的急激なる虛無主義に代つて、英、佛、獨等より侵入した社會主義は、破壞に代ふるに建設的思想を以て、頗る穩かなる手段を以て其目的の遂行に從うたのであつたにも拘らず、政府が非常な壓迫を加へて盛んに彼等を縛して牢獄に投じたため、彼等は其壓迫に堪へずして自暴自棄となり、遂に暴力を用ゐるに至り、暗殺時代に這入つたのである。一八八一年三月十三日には皇帝アレキサンダー二世も遂に暗殺されたのである。其後益々軋轢が激しくなり、社會革命黨(此時は社會民主黨と二派分立せり)は再び暗殺手段を執り、一九一一年九月には總理大臣ストリビンを暗殺したのである、今次の戰亂にとう〳〵混亂狀態に陷つたのも、必竟此社會黨が因緣を爲したのである。こは極端の例であるばかりでなく、我國と露國とは國情を異にしてゐるから何も心配することはないけれども、兎に角事の善惡は暫く措き、徒らに壓迫を加へることは考へなければならぬと思ふ。勿論恐怖するにも及ばぬし、排斥するにも及ばぬのである。德川の臣石川伯耆守數正は、德川譜代の重臣たるの故を以て、家康の代理として屢々秀吉に使した。即ち天正十一年五月秀吉が柳瀨に柴田勝家を破つた御祝の使にも、次いで同十二年十一月信雄との和睦を賀する爲にも、同十二月にはオギ丸を護衛して大阪に至り十三年の三月迄居て歸つた。此間にオギ丸に從うて紀州征伐にもいつた。さうして親しく秀吉に接近し、秀吉の人となりに敬服して、歸來頻りに秀吉を賞贊してゐた。併し彼は決して德川に背くなどいふ考へは微塵もなかつたのである。然るに周圍に於て、數正は秀吉に降參する積りであるの、二股武士であるの、獅子身中の蟲であるのと騷ぎ立て、殊によれば殺されないにも限らぬ樣の形勢になつて來たので、彼は不得止、涙を呑んで遂に本當に豐臣へ走るに至つたのである。今日の日本人が、新舊思想を云爲するに方り双方共に鑑みべきに、ふさはしい事柄であると思ふ。

三　採長補短

私をして忌憚なく言はしむれば、昨今何んとなく動搖し、盛んに塵埃の揚る如く見えるのは世界的大勢の變化であつて、取りも直さず、國運發展の兆を示す一の階梯であるとして、寧ろ歡迎したいのである。勿論善惡長短を選擇しての事である。是れ蓋し恐れ多き事ながら、皇室の聖謨

に副ひ奉る道理であると信ずるのである。

明治大帝の「よきをとりあしきをすて、外國に劣らぬ國となすよしもかな」との御製は其思召であると拜し奉るのである。又五箇條の御誓文の御精神に拜しても然るべきであると信ずるのである。去れば、この動搖を怖れ、塵埃を嫌うて、之を抑止せんとし、排斥せんとするは、恰も塵埃の揚るを厭うて屋内の掃除を停止せしむると同じ事である。舟の動搖を怖れて目的地への船出を見合すと同じことである。掃除は沈堆せる塵埃を掃き出して清新なる氣分を得て健康を保つべき衛生上大切の行事であることを忘れてはならぬ。判官義經が暴風を排して大物浦を船出し、平家追討の大目的を達したことも思ひ合すべきである。即ち繰り返していふ如く、今日は國運發展の一紀元であると信じて差支へないと思ふ。

四　國運發展の兆

往昔我國に儒教佛教が渡來した當時の世の中はどうであつたであらう。就中佛教が這入つて來た時は、世の中が鼎の沸くが如く動搖したではないか。然れども我國體には何等の變動を來さずして、却て之が爲め燦然たる文化の花を咲かしたではないか。大化の新政も、實は儒佛の思想文物に負うた所が尠くなかつたのである。降つて戰國時代となつては、事は内國だけの騷ぎであつたけれども、全國兵亂の大騷動で、人心の動搖其極に達し、戰塵朦々として、恐れ多くも天日の光りも幽かにして將に隱滅せんかと拜せられた場合も屢々あつたのである。甚だ不祥の言葉ではあるけれども、當時武將が起つて皇室に取つて代らうと思へば、事は容易であつたのである。若し外國であつたならば、幾度か革命を繰り返したことであらうと思ふ。然るに一人もかゝる叛逆を懷いたものがないばかりでなく、實は何れも早く戰禍を鎭定して上洛し、天皇に拜謁して干戈鎭定の優詔を頂き度いといふ願望で、其上洛の道を開かんとて、互に爭鬪したのであつた。恰も數人の子供等が先を爭うて慈親の懷に抱かれようとあせつたと同じごとである。結局數百年間の大騷動、大動搖も何等國體に變動を來さずして、茲に武士道といふ、立派な道德を仕上げたわけである。更に德川の末より、外國との國際關係勃發し、一時は大に動搖し、隨分塵埃も揚つたけれども、矢張國體には何等變動を來さずして、國運益々隆々として發展したのであるではないか之を要するに世の中が騷々しく動搖し、盛んに塵埃の起る樣の際は、必ず國運發展の機運であつ

たことを證明してゐるのである。去れば今日、世の中の、何となく騒々しく落着を失つて動搖し盛んに塵埃の揚るが如く見えるのは、軈て國運の上に大なる發展を齎らすものであると信ずるのは、強ち奇矯の考へではあるまいと思ふ。然るに何ぞや、之を怖れ、之を憎み、盛んに排斥せんとし、抑止せんとし、甚しきは壓迫せんとするが如きは笑ふべき頑迷といふべきであると思ふ。

五　希臘時代の所産

扨この新思想たるデモクラシーとは、如何いふ性質のものであるか。彼は這次戰亂に於て初て生れたのでなく、今より約三千年の昔の、希臘時代に呱々の聲を擧げたので、今日から見れば隨分古い思想の老人なのである。其れを新思想などゝいうて、新人扱ひにするのは頗る可笑い話であるが、これは詰り今次の戰亂に於て、新に世界改造などゝいふ大風呂敷をひろげる機會を得たからのことであらう。

處で我國に於て、この老人にして新しい珍客に、どういふ名をつけて、どういふ待遇をしてゐるかといふに、隨分種々樣々の名がついてゐる。一寸私の記憶してゐるのでも、民政、民主、全民、庶民、民衆、公正、善政主義等數へ切れぬ程あるが、最も多く用ゐられてゐるのは民本主義である。何れも至極適當の名であるがデモクラシーの語義からいへば、民主々義といふが最も適當の名であるのである。けれども一部の人は民主といふと、直に國家の主體を、形式も實質も極端なる、主權在民主義即ち共和政體を意味するものと解するが故に國體上甚だ面白くないとするのである。現に最近某雜誌に某氏が民衆政治を說き、民主々義の實現を力說してゐるが如き其れである。これはデモクラシーの影に捉はれ其精神を知らぬものである。デモクラシーは決して絕對的主權在民主義即ち共和政體を意味したものではなく、其實質的精神は、民本又は善政の意義にあるのである。詰り君主と共和とに關係なく、暴君政治、私慾政治、橫暴政治に對する反對の意味である。多數の橫暴は、一人の暴君より惡いのである。要するに人民が自由に、平等に其意志を顯現したいといふ慾求なのである。現にプラトーは極端なる政事上の共和論者にして、又共產主義者であつたけれども、デモクラシーは衆愚政治又は暴民政治であるとて、之を排斥したのである。アリストテレスは君主々義とデモクラシーと對立してあるけれども、其精神は專制と對立さしたのである。これは專制が腐敗すれば暴君政治、私慾政治となるからである。而して其頃

の君主は、何れも極端なる專制であつたからであらう。又モンテスキヨーは、君主と對立さしてゐない。彼は共和國必ずしもデモクラシーと一致するものでないと考へてゐたのである。デモクラシーの研究者、室伏高信氏は其著「デモクラシーの講話」の「皇室との關係」の條に於て「日本に於てデモクラシーを非難するものゝうちには、デモクラシーを以て共和政治の意味に解するやうに思ひます。若しデモクラシーの主義が、絶對的に共和政治を要求するものであるとなし、從つて皇室の觀念と相容れないものであるとすれば、日本に於てデモクラシーを主張することは、皇室を尊崇する私どもの心持に叛逆するものであります云々」と述べてあるが同感である。以てデモクラシーの精神のある所を、知るべきではないか。要するに人民の意志を主とし、善政を施くといふのが其主たる目的であると信ずるのである。但此人民の意志といふは人民が國家社會の團體の一員としての場合に、人民個々の意志の合計を以て國家社會の團體の意志とすることは出來ないのである。國家社會の團體としての意志は、所謂一體としての意志でなくてはならぬのである。

デモクラシーの民意といふは即ち是れである。デモクラシーは、彼のリンカーンが「人民が人民の爲に、人民の政治をする」というた「人民の爲に」に重きをおくのであると信ずるのである。而して又デモクラシーは單に政治上のみの狹義のものでなく、產業的、社會的等の各般の生活上に於ける廣義のものであるのである。試にデモクラシーの變遷について見ても其一端が判かる。

六　デモクラシーの歷史的變遷

デモクラシーの經歷變遷は、假りに之を五期に別つことが出來るではないかと思ふ。即ち第一期は希臘の都市國家時代から紀元五六百年頃までの、所謂封建時代の末期まで、第二期はこの封建的武士の豪族を併呑して國王、帝王といふのが出來て、暴君政治をやつた時代即ち十八世紀頃まで、第三期は即ち佛國革命によつて政治的に其主張を完成した時、第四期は政治的より產業的に移つた所謂資本家時代即ち佛の一八三〇年の七月革命、英の一八三二年選擧法改正前後の時代、此資本家時代を招來したのは、十八世紀の初め頃から科學の進步により諸々の機械の發明（一七三八年ジヨン、ケーの機械發明を初めにして）の結果、こゝに資本家といふ一の階級が成立し、隨つて勞働者といふ階級が生れたのである。この資本家の橫暴の爲め、デモクラシーは全く破壞されたのである。即ち佛國革

命によつて僧侶貴族の特殊權は剝ぎとつたけれども、それに代ふるに資本家といふ特殊權を產出したのである。所謂暴に代ふるに暴を以てしたわけである。そこで勞働者に於ては肉的生存と靈的人格の向上とを叫び出したのである。それが或はチャーチストの普通選擧運動となり、或は其他の社會運動となり、遂にデモクラシーが社會的に移つたのである。併し政治的意味を全然離れたといふのではない。結局此資本家對勞働者の問題が、這次の戰亂と纏綿してゐるので即ちこれを第五期とすることができようか。先づざつと、斯の如き變遷である。

概括的にいへば、政治を中心として各般の生活上に亘つてゐるものと考へなければならぬのである。

七　生物の生活法

斯く論して見れば外來の珍客デモクラシー君には何等恐怖すべき要素もなく、憎惡すべき分子もないのである。必竟自由と平等を根本的性質とし先天的命脈としてゐるのであらう。

自由平等は總ての人類の本性（Human nature）であつて、何れの國、何れの時代を問はず、人類の等しく具備してゐる本性である。但人類の本性には靈的生活の靈的本性、肉的生活の肉的本性の二方面があることを忘れてはならぬ。

尤も嚴密なる意味からいへば、人類の生活には生物學上種々の生活法があるのである。某理學博士の類別に從へば

一、共同生活　本來は食卓を共にするの意にして、二個以上の個體、群がりて存し、相互間に何等物質の援助を與へないもので、旅宿に於ける宿泊人相互の關係の如きもの

二、相互生活　二個體以上の相互間に物質援助を交換し、各利益を得て生活するもの、又共棲生活、これは相互生活の特殊の場合即ち生活物質の相互的補助に依るもの

三、寄生生活　一の個體又は團體が、他の個體又は團體の費を奪うて生活するもの、寄生蟲の如きものにして、厄介なる居候は即ち其れである。但子女が親に養はるゝは寄生ではない。

四、社會生活　同種の生物數個體以上一團となり、同一の目的を遂行せんが爲に分業を營み、或個體は個性を犧牲に供するの覺悟と用意とを要するもの、即ち生物學上の社會生活は、社會の目的の爲には個體の犧牲を要求するものにして、一般社會主義の目的とは異なるものである。

大略以上の如き區別であるが、私は此外に、更に國家生活といふことを考へたいのである。單に生活といふ時は、國家も社會も等しく人類の集合團體であるけれども、國家には大なる責任があるのである。此責任を果す上に於て、國家生活といふ觀念を徹底したいといふのである。人類が國家を組織するのは矢張人類の一つの本性である。アリストテレスは「人は國家的動物なり、人若し國家を成さゞれば人にして人にあらず」というてゐる。實に至言であると思ふ。亞弗利加の野蠻人や、臺灣の生蕃人は生理的には人なれども、人たる本性を完全に正當に發揮してゐないから、此等は人にして人でないのである。要するに國家生活の觀念といふは、吾等の靈的本性の實現に外ならぬのである。

即ちデモクラシーの眞諦たる自由平等を、人類の本性の現はれであるといふた、其本性は、此の靈的本性の謂にして、肉的本性のことではない。換言すれば、精神的自由平等の謂にして動物的放縱、杓一的惡平等のことではない。即ち己が天賦の自由を他に拘束せられざる如く、他の自由をも妨げないといふのである。己が他と等しく得んとする如く、他にも等しく得せしむるといふのである。必竟するに靈的精神的眞の自由平等は肉體的動物的には、却て不自由にして不利のものであることを自覺しなければならぬ。

ルーソーは「人は自由を得ん爲に他より强制せらるべきものなり」というてゐる。實に千古の格言である。即ち眞の自由平等は、嚴格なる階級、整然たる秩序の裡にあつて、有力なる主權者に統一せらるゝに於て、始て實現するものである。故に權力の集中はデモクラシーの實現に於ける第一の要素であるのだ。獨逸の社會主義者ラッサルや、ベルンスタインや、又英の同じくバアナードショウ等が皆口を揃へて權力集中の必要を力說したのも其故であらう。最近英國のチッスタートンといふ人は「大國家」といふ著書に於て「デモクラシーの要義は理想的專制君主によりて實現せらるゝを得べし」とまで極言したのである。如何にデモクラシーの眞諦が人類の靈的本性の欲求に合致するものであるかゞ明かであると同時に、肉的本性の發揮はデモクラシーの本質でないことも判かるのである。（デモクラシー講話九三以下參照）

尙デモクラシーの作用上最も大切の事柄は、自由平等の權利の伸張を獲得すると同時に、之に伴ふ責任を誠實に自覺することである。即ち國民が國家を組織する上は、其國家を維持すべき義務即ち兵役、納稅は勿論有形無形に亘り、苟も國家の維持に必要なる法律及び道德に對して

責任を負はなければならぬのである。彼の佛國革命以前、即ち中世の歐羅巴に於ては、人民の權利を認めない代り國費は貴族、僧侶に於て負擔し、一般國民の負擔は多くなかつた時代も、一時はあつたのである。それが革命後漸時權利の伸張されると同時に、負擔も亦一般に認められて來たのである。即ち眞のデモクラシーの反面には大なる義務的責任が當然伴ふものであることを忘れてはならぬ。處が外國に於ては、國家の成立が我國とは異つて各種民族の寄合所帶であつて、政治的からいへば、治者と被治者とは互に仇敵の間柄であるし、社會的からいへば富者も貧者も親も子も兄弟も極端なる個人主義であるから、所謂弱肉强食で、治者は其集中したる權力を以て被治者を壓迫して私然横暴の政治をやり、富者は金力を以て貧者を虐待するから、被治者貧者は其壓迫、横暴、虐待に堪へないで、時々デモクラシーを叫んでは革命を起し騷動を惹起するのである。佛國の革命も這次の戰亂も其原因は其れなのである。要するにデモクラシー其のものは、常に正義人道の上に基礎を置き、人類の本性擁護に貢獻してゐるのであると見て差支なからうと思ふ。然るに時として暴徒暴民的の過激亂暴を演じたのは、悉く相手方の出樣によつたのである。

八　掃除と破壞、自由平等と放縱均一

併しながら、茲に大いに考へなければならぬ事は、凡そ事物には必ず善惡長短の相伴ふものであるといふ事である。即ち掃除は動もすれば破壞となり易く動搖は殊によれば轉覆と間違はれ易い如く、新思想のデモクラシーにも幾多の弊害の伴ふことを考へなければならぬ。即ちデモクラシーの本質である自由、平等は、時として常規を逸し放縱、凡愚、腐敗、懶惰、卑猥等の狂態に陷ることがあるのである。いや、時としてはでなく往々にして陷り易いのである。昔雅典の衆愚が石を以て哲人ソクラテスを打ち殺したのや、先頃の朝鮮の暴民や、又彼の羅馬帝國の滅亡も、近頃の支那や、露西亞の混亂も種々の原因はあるけれども、結局デモクラシーの弊害に基因したのである。併し、これはデモクラシーの本質でなく變態である。長所でなくて短所である。今日の社會主義、共產主義、過激主義、無政府主義なども、皆この變態なる短所から生れた思想である。

九　デモクラシーの本質を誤解

然るに今日新思想家を以て自任する一知半解の生物識先生は、この變態たる短所を見て、これをデモクラシーの本質と誤解し、而して人類と動物と同視し、動物的慾望を僞らず、飾らず、白晝公然告白し演出すること、そのものがデモクラシーであるというて得々としてゐるのである。即ち曰く改造とは何ぞや、曰く我に與へよなり、改造とは何ぞや、曰く要求なり、改造とは何ぞや、曰く我を利するなり、是れが今日改造の叫びの直諦なりといふのだ。されば勞働者は狼虎の飽くなき要求を資本家に迫り、資本家は、獅子の群羊を屠るが如く、勞働者の血を絞らんとして紛擾又紛擾、爭鬪又爭鬪、眞に淺間しき動物世界を出現してゐるのである。焉ぞ知らん、デモクラシーの改造の叫びは、自己の內心の改造である。外に向つての要求でなく內に向つての要求である。己を利せよでなく、世を利せよとの叫びである。正義人道の叫びである。誤解も玆に至つて甚しいといはなければならぬ。又曰く國家社會の階級秩序は、平等を妨ぐるものなるを以て、宜しく破壞しなければならぬ。君臣、父子、夫婦などいふ別は自由を壓迫するものであるから、須らく廢止しなければならぬといひ、放縱自恣我儘勝手を以てデモクラシーの眞諦であると考へ、節操なく堪忍なきを、寧ろ人類の眞面目であるとし、義理人情を正すを虛僞と貶し、甚しきは、忠孝を無視し、道德を破壞して、あつぱれデモクラシーを實現したるなりとて得意然たるものがある。斯の如きが若しデモクラシーの眞諦ならば、白晝大道に於て靑年男女が相擁し、犬猫の如く痴情に狂ふをデモクラシーの極致としなければなるまい。デモクラシーの本塲たる米國(費府)でさへ、男女戀愛の表情は風紀を紊るとて、其表情の程度により罰金を科したといふことではないか。まことに我國の新思想家の大膽さには驚く外ないと同時に、其不明にも呆れるのである、是れ併しながらデモクラシーなるものが誤解され易く、陷り易き弊害の分子があるからである。玆に於てかデモクラシーには、嚴たる監督と周到なる指導が必要であるのである。瑞西のバーゼル大學教授ミヘルス氏は一九一五年に「政黨論」を著し仔細にデモクラシーを論じ、結局「デモクラシーには指導者を要す」といふてゐるさうであるが(皇典講究所の思想問題研究)至極周到なる注意であると思ふ。掃除をする人夫、掉を取る舟人には、しつかりした指導者がないと危險であると同じである。前に述べた我國の歷史上の時代々々の騷ぎの際にも詮じ詰むれば、隨分危險の分子もあつたけれども、其分子か少しも芽を出さなかつたのは、當時の人々が十二分の注意を拂つて、之を指導し、巧に調和をとつた偉大なる努力の結果であつたのであることを忘れてはならぬ。乃

ち新思潮たるデモクラシーの手によつて、動搖せられ、盛んに揚る塵埃を抑止せんとし、排斥せんとし、壓迫せんとするは、甚だ誤つた考へであることは、前に述べた通りであるが、去りながら世界の大勢であるからというて、事の善惡長短をも辨へず、只管之を歡迎し、又服從し、盲從するのは考へものである。歡迎、服從、盲從は未だしもとしても、其眞諦を誤り、徒らにデモクラシーの短所弊害をのみ捉へて得々とし、あつぱれ新思想の先驅けでゝもあるが如く思惟するに至つては、前者の頑迷に劣らぬ愚者たるを免れぬのである。乍併全然肉的本性の欲求を排斥するのではない。或程度までは、之を認めるのである。また認めなければならぬのである。けれども其欲求は常に靈的本性と連絡し、靈的本性の指揮によつて現はれんことを望むのである。「人は麵包のみにて生るものでない」と同時に「唯神の口より出づる總ての言葉に因て」のみ生くるものでもないのである。要するに靈と肉とは一體不二にして離るゝことの能きないものである。只肉の生活が、靈を離れて、遂に獸的生活に陷るのを恐るゝのである。

一〇　眞に父子の情

以上述べ去り說き來りたる所により、新思潮たるデモクラシー君の性質、眞諦は、略ぼ明瞭になつたわけであると思ふ。玆に於て一歩を進め、之を我國體の上より見て、之を我國俗の上より見て、之を我等國民が咀嚼してみて、どうなるであらうか。私は斷言す我國に於ては神代の昔からデモクラシーの精神は皇室の民本主義の聖謨の裡に事實上立派に實現せられてゐたのであるといふことを。而もそれが、頗る徹底的であつて、今日のデモクラシー以上であつたのであるといふことを更に極言し得ることを感謝するのである。デモクラシーの最初の項即ち第一期の希臘時代に於ける、所謂人民の意志云々といへる、其人民は全人民のことではなかつたのである。例へばスパルダの憲法に於て人民といふのは、たゞ支配階級に屬する人民即ちスパルタンス Spartans であつてペリオイコイ Perioikoi は公民權をもつてゐたゞけで國政に參與し得なかつたのである。最下級のヘロッツ Helots（奴隷）は人間としての權利は認められてゐないのである。アゼンスの憲法（ペリクルスの立法）に於ても、人民とは、たゞ自由民（フリーメン）と稱する一階級だけで奴隷（スーレブス）はスパルタ同樣人間として扱はれてゐないのである。又羅馬に於ては被征服の人民は、同じく人間扱ひをしてないのである。（室伏高信氏）然るに我天照皇大神は天安河原に於ての會議の時は、八百萬神

を會せられたではないか。又近來歐米に於て婦人參政權などを云爲し、此頃英國に於てナンジ、アスター夫人が初めて下院議員に擧げられた（十二月一日倫敦電報）さうであるが、今日としては珍とすべきことであらうが、併し我高天原時代に天宇豆賣命は、正しく國政に參與したものであつたらうと私は信ずるのである。降つて人皇の上古時代に女子も男子と同樣租稅を負擔してゐた所を見れば、これ亦政治にも參與したものであらうと思はれる。又神武天皇は降將に禁闕護衛の重任を與へて怪み給はせられなかつたではないか。其他皇室に於かせられて人民を赤子として大御寶として尊重し愛撫遊ばされ、ひたすら人民の幸福を增進するを以て天皇の天職とされたことは歷史の證する所にして、何人も之を疑ふものはないのである。特にそれが、外國の樣に、人爲的でなく全く惟神の自然の發露であらせられたのである。一體靈的にもせよ、肉的にもせよ、人類の欲求即ち自由平等の思想は勿論、總ての實生活上の欲求といふものは、程度のないもので全く無限のものである。一を得れば二を望み、二を得れば三を望みて、殆んど停止する所を知らぬものである。故に我等の靈肉に於て感ずる程度を以て決定する外ないのである。即ち欲求の滿足、不滿足は感情によつて解決されるものである。甲乙の相對者が互に好感情を以てするとゝ、惡感情を以てするとは、其事柄は同一であつても、其感情に於ては雲泥の差があるのである。

韓非子は、此理を「說難」の條に於て、實例を擧げて能く、說明してゐる。果して然らば世の中に、互に好感情を以て終始相對するものは何であらう。これは親子の親みに於て始めて見ることが出來るのみである。親が子を愛し子が親を慕ふは、人爲でなく自然である。而して親が子を愛するの情は、子が親を慕ふの情に勝るのである。松陰先生が刑せられる時に「親を思ふ心にまさる親心今日の音信なにと聞くらん」との辭世は即ち其眞情を語つたものである。果して然うだとせば、國家の主權者と人民との間が親子の關係であつたならば、絕對に不自由、不平等不滿足などいふ感情が、道理上から起らぬわけではないか。斯ういふ國家が何れにあるか、世界廣しといへども獨り我國あるのみではないか。即ち治者たる天皇は、親にして而して君主にましまし、被治者たる國民は、子にして而して臣であるから其關係は全く親子の親みであるのだ。故に列聖が臣民を愛撫し給ふは、全く惟神の自然の發露であることが道理上から拜知することが能きるのである。治者たる君主が勤めだから、いやだけれどもとか、人の口がうるさいからとかいふ意味は毫も見出す事が出來ないのである。北條泰時は名執權といはれたのであるけれども、併し無理

がある。即ちうるさいけれどもといふ考へが頭の底に潜んでゐたのである。彼の歌に「ことしけき世のならひこそものうけれ、花のちりなん春も知られず」といふがある。この「物憂けれ」の一句によつて其心底が判るのである。之を明治大帝の「この春は梅鶯も忘れけり民やすかれと思ふばかりに」との御製と比べて見てどうであらう。大帝は民安かれと思ふ餘りに梅も鶯も思出し給はぬのであつた。泰時の心持とは、眞の親子と繼の親子との差があり〳〵と見えるではないか。實に畏しとも畏き次第ではないか。而して又吾等國民が古來忠孝の至誠を捧げたのも亦決して無理にしたのではない。全く吾等の本性から自然に發露した至誠であるのである。肉の生活に食物を欲求したと同樣に、靈の生活の欲求の現はれに外ならぬのである。一體忠孝などゝいふ名前をつくべきものでないと思ふのであるが、それは兎に角として此至誠が百般道德の根本となりて、萬邦無比の國體を今日に擁護し來つたのである。(前編第一三、一四節參照)

凡そ何れの時代、何れの國家に於ても、標準こそ異なれ、道德の必要でなかつた時代と國家はないものである。然るに外國では、この道德を無理に不自然に、作らなければならぬから、却々其實現が困難なのである。獨り我國の道德には其根本たる忠孝に少しも無理がなく、少しも不自然の所がない。全く我等の本性の欲求、そのものが直に道德の根本を成すのであるから、道德として如此理想的のものは何れにもないのである。然るに何ぞや、或一部の人は曰く「日本に於て忠孝を奬勵するは大切の事ではあるけれども、之を以て總てを律せんとするは時代錯誤である、世界の大勢に逆行するものである」といつて思想の中心を忠孝におくを、舊思想の頑迷者であるかの如く貶してゐるのである。實に思はざるも甚だしきものである。第一忠孝奬勵など、いふのが抑々誤つてゐる。忠孝は奬勵されてするのでなく、自發的のものである。之を奬勵するは恰も食事を奬勵するといふと同じ事である。孫子は「知彼知己百戰不殆、不知彼知己一勝一敗、不知彼不知己每戰必敗」といつてゐるが、論者の如きは即ち「不知彼不知己」の部類に屬するのである。

斯の如き馬鹿者が絶對主權在民主義等を夢みるのである。今日戰後の世界的諸問題の解決は、全でもなく、權でもなく、全く道德の力即ち正義 Justice 人道 Humanity に俟たなければならぬとは、世界の輿論になつてゐるのである。我國に於ても今日各方面に亘つて唱導せられてゐるのである。即ち法博河田嗣郎氏は「改造」誌上に「如何に改造するか」と題せる一篇中に「社會改造

の大事業を成就せんには形而下の組織に改革を行ふと同時に國民の精神的革新を行ひて社會の人心を一新する工夫を凝すの必要をしみじみ感ぜざるを得ないのである云々」というて形而上の向上を衷心から切望してゐる。又法博江木翼氏は「大觀」誌上に「改造の根本觀念」と題し「予は茲に國家維持といふことは斯の如き法律的觀念以外に一個の道義に基かなければならぬことを信ずる其道義なるものは、國民が國家を組織し、國家を維持する上に於て缺いてはならぬ所の最高道德である云々」というて改造の根本は道義にあることを力說してゐる。共に我意を得たるものとして、共鳴するのである。其他各方面に於て何れも道德の力を要求しないものはないのである。蓋し戰後改造の第一歩は道德の力に俟たなければならぬといふことを、世界は痛切に認めたのであらう。然るに何ぞや、我忠孝を以て時代錯誤であるなどゝは傍腹痛き次第である。論者こそ正しく時代錯誤に陷つてゐるのである。臭いもの身知らずとは、斯の如きをいふのであらう。

一一　國體の擁護に全力を

以上述ぶる所によつて、我國は神代の昔よりデモクラシーの眞精神は、而も徹底的に事實の上に現はれてゐたといふ事が明かに判つたであらうと思ふ。されば、今更事新しくデモクラシーを云爲する必要は認めないやうに考へられるのであるが、それならば、何故にデモクラシーの作用は、國運發展の階梯であるとして歡迎するのであるかといふ疑問が起るであらうと思ふ。一應尤もの疑問であるが、これには深い理由があるのである。それは何んであるかといふに、外國に於ては前にいうた通り主權者が暴君政治を行ひ。人民を苦しめるから、人民は苦痛に堪へずして、デモクラシーを叫ぶのであるから、この叫びが起るにつけても、我國體の尊いといふことを國民が衷心から感孚し、一層緊張した精神を以て國體の擁護に全力を傾注するといふことになるので、詰り國民の自覺の上に大なる効果を齎すからのことである。もう一つは皇室と人民との中間に在る諸々の機關が、何等かのために塵埃がかゝり圓滑の性能を失ひ、之が爲に難有い皇室の惠風慈光が、もし萬一何れかに、少しでも塞がれる樣の個所があるとせば、輙ちデモクラシーといふ箒を以て掃き清めなければならぬのである。或は又國民といふ家族が小艇に分乘して皇室の親船に到らんとするに方り、風浪の爲に遮られることがあるとせばデモクラシーといふ棹を以て艇の動搖を顧みず之を漕ぎ破らなければならぬのである。要するに彼にありては、主權者の專制壓迫より

逃れんとて叫んだ個人解放の思想が、我にあつては主權者たる皇室を慕ふの思想となつたのである。幸に今日我國に於ては何等の塵埃も風浪もないのであるけれども、萬一ありはしないかというて頻りに箒を振り廻し、掉を叩いてゐるのであらうと思ふ。これは萬一の用意であるから悪いことではないのである。兎に角我國は政治的には此思想のデモクラシーは何等の必要を認めないのである。只社會的産業的等の各般の實生活方面に於ける各種の階級が萬一疎通を缺いてゐはしないか。もし缺いてゐるとせば、これもデモクラシーの箒と掉とを以て疏通を計り以て上皇室の安泰を祈り下國民の安定を期したいのである。この意味に於てデモクラシーの善的方面の長所を採らうといふのである。(終)

大正九年一月一日

一一　理想的國家と現代思潮

大正九年二月　日

本講は前講と其主旨精神は殆ど同一なれども、内容に於て多少異なる所あるを以て、重複を顧みず、こゝに加へたのであります。

一　戰亂の影響

這次歐洲戰亂は流石に有史以來の大戰爭であつただけに、世界各國に及ぼした影響は頗る甚大であつた。勿論幾多尊重すべき教訓も與へられた。此甚大な影響と尊重すべき教訓とは、世界的大勢に大なる變化を與へたことは何人も熟く知つてゐる所である。此變化に對し冷靜沈着能く之に順應し、取捨選擇宜しきを得、敢て歸趣を違ひず、以て國運の發展に資せんには、一に國民精神の緊張に俟たなければならぬ。萬一滔々たる大勢の變化に囚れ、取捨選擇を誤り歸趣を違へるならば、國家は戰爭に敗けたより以上の悲境に陷るものと覺悟しなければならぬ。

古代の羅馬は其廉潔剛毅の氣象と、勇悍不拔の武略とを以て、時世界を征服し、世界の國王